

---

# モンスターハンター 空気男の生きる道

イグレック

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

モンスターハンター 空気男の生きる道

### 【Nコード】

N0175P

### 【作者名】

イグレック

### 【あらすじ】

気付いたらモンスターハンターの世界に居た男が、ハンターとして生きていく物語。  
かなり勢いで書いているのでおかしい所もあるでしょうがご了承下さい。

## 空気男の生きる道（前書き）

他の小説もあるのについて書きたくなくて、割と本気で書いて見ました。独自設定や独自解釈が含まれることを了承した上で読むことを進めます。

5月2日改訂。

## 空気男の生きる道

森と丘。

緑豊かな森となだらかな丘が広がるフィールド。

丘の部分は比較的陽当たりの良いフィールドであり、アプトノスやケルビなどの草食動物が呑気に暮らしている姿が度々見かけられる。

森の方では良質なキノコを比較的簡単に手に入れることができ、初心者ハンターがよく受注するキノコ狩りのクエストでは穴場スポットとされている。

そしてその緑深い森の奥には透明度の高い綺麗な湖があり、そこはこのフィールドで暮らす生き物達の水飲み場となっている。

其処で俺は獲物を待っていた。息を潜め、森と一体化する様にして。ただひたすらに待ちに徹する。

そして其処でじっと待つこと数時間。

突然森全体がざわつき始めた。

今まで其処にいた生き物達は一目散に走りだし、我先にと逃げしていく。

生態系の頂点に君臨する捕食者、この森と丘の“主”が来たことを彼等の野性的勘が感じとったのだ。

その腕と一体化した巨大な翼を羽ばたかせることで生じる風圧が、まるで森全体を揺らしているかのようだ。

赤黒い鱗に覆われたその身体からは圧倒的な生命力と威圧感を感じる。

そしてその巨体を支える太い両足が地面に着地した瞬間、地面が揺れる。

空の王者、雄火竜・リオレウス。

この森と丘の主が其処にいた。

来たか……。

遂に現れた獲物に対して俺は心の中でそう呟く。

俺は狩人。一般的にモンスターハンターと呼ばれる者の一人だ。そして俺の今回の狩りの獲物が火竜・リオレウスというわけだ。

リオレウスはその赤黒い頭部を左右に振り、ぎらついた双眼で辺りを見回す。

ここで見つかるようなへまはしない。息を止めて緑の中に溶け込むことでやり過ごす。

危険は無いと感じたのかりオレウスは湖の方へ歩き出し、口を水面に付けて水を飲み始めた。

そして、ここから俺の、俺のによる、俺だけの狩りが始まる。

俺は背負っていたライトボウガン……、いや、分類上ライトボウガンと呼んでいるだけの俺の“相棒”にペイント弾を装填した。

そしてスコープを覗きリオレウスの頭部、目の位置に銃口を向け

る。

そして引き金を引いた。

サイレンサーによって減音された、パシュツという小さな音と共にペイント弾が発射され、目標通りリオレウスの目に着弾する。ピンク色の塗料がぶちまけられると共に、攻撃を受けたことでリオレウスは水を飲むことを止め、キョロキョロと首を左右に振り自らに攻撃した者を探そうとする。

しかし俺は見つからない。

次に俺は貫通弾を装填し喉から腹までを貫通するように狙いをつけ、発射。

空気を切り裂きながら飛ぶ貫通弾は、狙い通りに着弾し喉と腹を貫き、血を撒き散らす。

その攻撃に怒りの咆哮をするリオレウス。大したダメージではないようだ。流石は空の王者。

リオレウスの口の中では怒りの炎がメラメラと揺れ、そしてそれが火球と成って一直線に放たれた。

体内にある炎を生み出す器官から精製された炎を吐き出し、それを攻撃とするブレスと呼ばれるものだ。火竜の特権だ。

しかし俺には当たらない。

火球は木に直撃し、ゴウゴウと音を立てて木を燃やす。

その間に俺はリオレウスの死角へと移動し、そこからさらに弾丸を放つ。

死角から死角へ、影から影へと移動し、そこから放たれる幾つも

の弾丸は、リオレウスの巨体に次々と着弾し肉を貫き血を撒き散らし、確実に生命を削っていく。

その一方的で無慈悲で正確無比な射撃に、リオレウスは堪らず巨大な翼を広げ空へと浮上した。

空中戦でこそリオレウスはその本領を発揮する。自由自在に空を飛び、そこから獲物を狙うことこそがリオレウスが空の王者と呼ばれる由縁である。

そしてそこからいくつもの火球を発射し、草を、木を、森を燃やしていく。

しかしそれが俺を捉えることはない。

空からの一方的な攻撃は接近武器を使うハンターは逃げに撤し耐え続けるしかないが、俺はガンナーだ。

翼膜に向けて放たれた貫通弾がいくつもの穴を穿ち、空中でのバランスを崩したりリオレウスは空から落下し地面へと激突する。その衝撃により翼は折れ、その目に宿っていた生命力が消えていくのが分かる。

そこへさらに弾丸が着弾する。

リオレウスはとうとう最後まで俺の姿を見ることはかなわなかった。

「クエストクリア」

ポツリと俺は呟いた。

「旦那さん、戻って来たののニャー！」

「ああ、村まで頼む」

「あいあいニャー！」

リオレウスを討伐した俺は剥ぎ取りもそこに竜車へと戻った。そこには二足歩行をする喋る猫。所謂アイルーと呼ばれる不思議生物がいた。

アイルーは元気良く返事をする。と竜車に跳び乗り、アプトノスが繋がれている手綱を握る。

それを見て俺も竜車の中に入り込み座席に座る。背負っていた相棒を膝に乗せると手で少し撫でる。

黒で統一されたそれは工房の親方に頼み込み作成してもらった特注品だ。当然カタログには載っていない。

良質な鉱石と貴重な素材を使って作られたそれは満足がいく仕上がりになった。値段はかなりばられたが……。

使用できる弾丸は通常弾と貫通弾が全レベルと、毒弾にペイント弾、捕獲用麻醉弾のみだ。使用できる弾丸が少ない代わりに威力と集弾性はライトボウガンの中では高い位置にある。

パーティにおいてのライトボウガンの役割は麻痺弾や睡眠弾、回復弾等によるサポート等になるが、その一切がこいつには備わっていない。

何故なら俺はソロハンターだから。それに誰とも組むつもりはない。

俺は既にソロハンターとしてかなり特殊な戦い型を確立している。そしてその戦い型に特化させた武器が俺の“相棒”ってわけだ。

俺の狩りは獲物に見つからずに、常に死角からの攻撃を心掛け、一方的に相手を打倒する戦い型だ。そしてそれを可能にする特殊なスキルが俺には備わっている。

それを説明する前にまた相棒の説明に入ることにしてしよう。

俺の相棒は俺の“元居た世界”でP90と呼ばれていた銃器の形に似ている、というかそれを真似た。大きさは二回りほど大きい。ライトボウガンにしてはやや小さい。上部にはスコープが備えられ、折り畳み式のフォアグリップとレーザーサイト、サイレンサーが装備されている。

そしてこれは俺の銃オタとしての知識をぶちこんで作成されたもの。

つまり俺はモンスターハンターの世界へ“異世界トリップ”してきた人間なのだ。

俺は進路に悩む高校三年生で、何処にでもいるような普通の人間だった。

それがいつの間にか俺は森の中に居た。最初は夢だと思っていた俺だが、なかなか覚めることのない夢に焦り出し、めっちゃくちゃに

辺りを走り回った。

そしてそれが悪かったのか俺は今まで実際に見たこともない生物に見つかってしまった。

龍だ。

ゲームや映画の中だけの空想上の生き物とされるそれが、今俺の前において、俺を見ている。

全身が震え上がる。逃げることもすらできない。

もうダメだ、俺はここで……、

死ぬ

そんな時だ、風を切る様な音と共に飛来した弾丸が、龍に着弾するのを見た。

それは一方的で、無慈悲で、正確無比な射撃だった。

そしてそれはあつという間に目の前に居た龍を撃退させてしまった。

そこで後ろから今の射撃を行ったであろう人物が俺に近付いてくる足音がしたが、俺はそこで気を失ってしまいその姿を見ることは出来なかった。

目が覚めた時俺は何処かの大きな家の中に居た。その家は俺が今拠点にしている村の村長の家だった。

右も左も分からぬ俺を村長は温かく村に向かい入れてくれ、俺は堪らずその優しさに涙した。

村長に聞いた話しによると、俺を此処まで運んで来てくれたのは

流れのハンターらしく、そのハンターが俺を助けてくれた人物とみて間違いなさそうだった。

その時俺は、ハンターってなんだ？ と思い村長に聞いてみたところ、かなり驚かれた。

ハンターという職業はかなり有名らしく、村長は「記憶喪失かう。可哀相に……」とか言っつて勝手に勘違いしてくれた。

しかし本当にハンターってなんだ？ 何か聞いたことあるんだが……、と思っつていると村長が村を案内してくれることになった。

何かのゲームで聞いたことあるなあ、と思いながらもなかなか思っい出せなかつた俺だが、二足歩行の喋る猫を見た途端に理解した。

モンスターハンターの世界に来てしまったのだと。

それに対して発狂するとかそんなことはなく俺は結構簡単に順応していった。

そこから俺は村長への恩返しも兼ねてハンターになることを決意し、訓練所の門を叩いた。

それは、少しばかりの好奇心と、何か役に立たなければこの村に居られないのではないかという不安と焦燥感によるものだ。

しかしそこで待っつていたのは地獄すら生ぬるいと思わせるようないつ死んでもおかしくないような特訓に次ぐ特訓。何度吐き出したことか、何度気絶したか分からない。

ハンターになるということを甘くみていた。奴らは皆が皆超人のような奴らなのだ。

そして俺は異世界トリップ特有のチート身体能力など何もなく、果ては村の子供達にも負けるような力しか持たないゴミみたいな存在だった。村の子供に腕相撲で負けた時は鬱になつて死のうとすら

思った。

この世界の連中はおかしい。きっと空気にプロテインやステロイドが入っていて、そこで暮らしているうちに人外化していったに違いない。俺も訓練を続けているうちに、元の世界では考えられないような身体能力を身に付けていったが、それでも並みのハンターと変わらないくらいで、評価出来るとしたら瞬発力が他の奴より少し優れてるくらいだ。

そして基礎的な訓練が終わり、遂に武器を扱う訓練に入ることとなったのだが……。

接近武器に関してはことごとく適正がなかった。当たり前といえは当たり前だ。使ったことも触れたことも今までなかったのだから。しかし訓練所の鬼教官に「お前才能無いな」と言われた時には泣いた。まああんな巨大な飛龍に対して接近武器担いで突撃なんて自殺行為にしか思えないのですぐに立ち直った。

そして遠距離武器、つまりボウガンか弓を扱うことになった。まず弓を試してみると見事に的に当たらなかった。教官はまた「ぶつ、やっぱ才能ねーよこいつ」みたいな顔しててムカついたので殴りかかったら三秒でぼこぼこにされた。泣いた。

そして最後に残ったボウガン。そういえば俺を助けてくれたハンターもライトボウガンを使っていたな、なんてことを思い出した。あの時のハンターは俺を運んですぐに村を後にしたらしく、お礼も言っていない。

男のハンターだったらしく、村長曰くかなり高ランクのハンターのような感じだ。確かに一般人の俺から見てもあの射撃は凄かった。今でも覚えている。忘れることなんて一生出来ないだろう。そして俺は今そのハンターと武器のランクは違えども、同じライ

トボウガンを手に行っている。

これでダメだったら諦めるしかない、やるしかねえ！ と意気込む俺の横で教官が「さっさとやれや」みたいな顔してたのでぶん殴りたくなつたが、必死に抑えて教えられた通りライトボウガンを構えて撃った。

そして今度は綺麗に的の真ん中に着弾した。

俺がどや顔で教官を見ると「な、なかなかやるようだな……、しかしその程度でいい気になるなよ小僧才！」とか言って訓練が三倍に増えた。また泣いた。

そんな感じで訓練すること数ヶ月、俺はハンターとなることを教官に渋々、そんなに俺をハンターにしたいくないのかという程渋々認められ、初心者ハンターとして活動していくことになった。

それからは地道にキノコ狩り等のクエストをこなし続けた。最初は皆こんなもんだ。

たまに飛竜と遭遇することもあったが俺の持っていた俺特有のスキルを使って逃げた。

そして俺特有のそのスキルとは何か。

それが判明したのはある日の訓練所での出来事。

「ガンナーとしての立ち回りを教えてやる！！こいつらを打倒してみろっ！！」

とか鬼教官が言い出し、闘技場にランポスを次々と解き放つたのだ。

俺を殺す気かっ！？ と思い、初めてみる小型の青い肉食鳥竜にビビりながらも何とか倒していくが、数が多すぎる。

あつという間に囲まれた俺はその時死ぬと思った。

しかしその時俺は、自分の気配というか存在というか、そんなものが周囲と一体化するような、自分が空気の一部となるような感覚を感じた。

すると今まで俺の周りを囲んでいたランポス達は、まるで俺を見失ったかのようにキョロキョロと辺りを見回しだしたのだ。

俺がわけが分からなくなっていると、ハンマーを持った教官が駆けつけ、鬼神の如き動きでランポス達を次々と尻ぎ払っていき俺の近くまでやってきた。

しかし教官は俺に気付くことはなく「逃げ出しおつたなあの小僧オオオオ!!」とか叫び出したのでそのケツに貫通弾をぶちこんでやった。

確かに貫通弾がケツに直撃し病院送りになったはずの教官は、次の日にはピンピンしてやがった。やはりこの世界の人間はおかしい。それともこの教官が化け物なだけか？

そんなことは置いといて、あの時の感覚について教官に話してみたが、「貴様のようなポンコツにそんなスキルがあるはずがないっ!」とかほざき出したので、あの時の感覚を意識してやってみることにした。

段々と自分の気配や存在感とかそんなものが周囲と一体化していくようなものを感じる。

すると教官が「何処に行ったポンコツ!!」とか叫び出したのでぶん殴ってやった。

そして今のでだいたい理解できた。当然教官が俺を見失ったり、普段なら当たる筈のない俺の攻撃が教官に当たったことから、教官

が俺のことを認識出来なくなった可能性が高い。

俺の気配とか存在感が限りなくゼロに近くなったのだろう。

それを教官に言ったら、「ぷぷっ、空気男かお前は、ぷぷぷっ」とか言ったのでそのスキルを発動させてぼこぼこにしてやった。

これは素晴らしい。一方的に攻撃できることはこんなにも気持ち良いのかと、今までの分も含めて気が済むまで教官をぼこぼこにしてやった。

それでも次の日には教官はピンピンしてやがった。やはり化け物らしい。

隠密というスキルがあるが、俺のスキルはそれの上位にあたるものだと思う。

道を歩いていて肩がぶつかっても誰も俺に気付かないし、モンスターとの戦闘では目の前にさえ居なければ滅多に気付かれることはなかった。

話しかけたり目の前に姿を現さなければ相手に気付かれないこのスキルを持つ俺は、空気男と呼ばれても仕方ないな。

それからはこのスキルを使いこなし、次々とクエストをクリアしていき、今の戦闘スタイルを確立していった。

「旦那さん旦那さん！ 村に着いたのニャー！」

竜車に揺られること半日程で村に着いた。

それから俺はアイルーにお礼を言いマタタビをやった。

このアイルーという不思議生物はかなり和む。マタタビを貰って

喜び飛び跳ねるアイルーを見ていると癒される。

アイルーを見て充分癒された俺は集会所に向かった。

集会所は酒場も兼ねているので、荒くれ者のハンター達が飲み比べや腕相撲、果ては殴り合いをしていることもしばしば。

当然のように俺はスキルを発動させてから集会所に入る。一々馬鹿に絡まれたくないし、スキルを発動させてない状態の俺は並みのハンターレベルの身体能力しかない。喧嘩になったらばこられるのが落ちだ。

それに初心者ハンターだった頃、此処へ初めて来た時は酷かった。こちらを見て初心者が来たと嘲笑う声と罵声が飛んでくる。

ハンターとしての最初の戦いはそこから始まるのだと思い知らされたと同時に、この村のハンターにはろくな奴が居ないのだ悟った。

まあそんな風に俺を馬鹿にしたり嘲笑ってた奴等は、ある日クエストに行つたつきり戻って来ることはなかった。

詰まる所、ハンターにとって一番重要なことは無事に帰って来ること、生存力なのだろう。

クエストをこなすことも大事だが。武器の扱いが上手いとか、良い武器を持っているとかそんなものじゃないと俺は思う。

そんな過去は今はどうでもいいとして、集会所のカウンターに居るメイド服の受付嬢　輝く金髪に碧目という、人形のように整った容姿に笑みを浮かべてこちらを見ている　にクエストクリアの手続きをする。

実はこの娘には何故か俺のスキルが通用しない。俺が集会所に入った時からずっとこちらを見ていた。

実は俺のスキルが通用しない奴はもう一人いるのだが……、まあいいや。

そのことについて聞いてみても、「女の勘です」とか「女の子には秘密は付き物ですよ」とか言つて教えてくれない。

俺は自分のスキルが通用しないのがどうしても気になって、四六時中彼女を観察していたことがある。決してストーカーとかじゃない。

それで分かったことは、彼女の身のこなしには全く無駄が無いこと。相当な実力者とみた。

それと、彼女に手を出そうとしたハンターの一人が行方不明になったことから、俺は詮索することを止めた。流石に命は惜しい。

それから彼女に手を出そうとする者は居なくなり、それは暗黙の了解となったとか。

彼女と面と向き合つと、その碧目に心を見透かされているようで、俺は何となく目を反らしてしまう。何か自分が悪いことをしているんじゃないかと心配になる。

そんなことは無い筈なんだが……。

「クエストお疲れ様です、空気男さん」

「なっ、どこでその呼び名をっ!?!?」

「訓練所の教官さんが教えてくれましたよ?」

あの野郎、ぼこる。

忌々しいことに、あの教官は色々な奴らに俺のことを空気男だとか吹き込んで回っている。

その度に俺は奴をぼこぼこにしてやってるのだが、次の日にピンピンしている。なんかもうコメディだよあのオッサン。

しかし彼女にまで吹き込むとは、三倍ぼこる。

「はあー、その呼び方は止めてくれ。頼むから」

「ふふっ、ごめんなさい。面白かったから、つい。教官も貴方に構ってもらいたいただけなんですよ」

「あのオッサンが構って欲しいなんて筈はない。これは俺に対する挑戦状と受け取った」

あんなオッサンが構って構って言うてる姿を想像したらゾツとした。四倍ほころう。

彼女から報酬としてお金と火竜の甲殻や鱗が入っている袋を受け取る。

いつも思っただがこのシステムはよく分からん。

俺が飛龍を討伐して竜車に揺られながら帰っている間に、俺が討伐した飛竜から、俺が剥ぎ取り切れなかった素材が俺が此処に着くより早く此処に送られていて、その中から一部を報酬として今受け取っている。

どういうカラクリなのだろうか？ 聞いてもどうせ教えてくれないから考えるのは止めた。

そしてそのまま集会所を出る。俺は飯はほとんど家で食うことにしている。こんな馬鹿共が居るような場所では飯は食えんからな。

俺は馬鹿共に気付かれない内に集会所を後にした。

「ふふふっ、やっと見つけたぞ」

もう少して家に着く、そんな時に不敵な笑みを浮かべて現れた俺

と同じ位の年の女は、俺のスキルが通用しない内のもう一人だ。

「またお前か……」

「そんな顔をしないでくれ。それよりも、私と組んでくれる気にはなったか？ 私としても早めに承諾してもらいたいのだが」

「嫌だつて言つてんだろ。他をあたれよ。お前だつたらホイホイ男が寄つてくるだろ」

「下衆な男共と組む気はないよ。あくまでも私の目的は君だ。君でなければダメだ」

「んなこと知らんわ」

こいつは最近他の村からこの村にやってきた女ハンターで、何をとち狂ったのか俺とパーティを組みたいとかほざく粹狂な奴だ。

俺がいくらスキルを使おうともことごとく俺を見つけたし、その度に俺をパーティに誘おうとする。

その都度俺は断っているのだが、こいつはかなりしつこい。

俺はソロハンターとしての戦い型が身体にたき込まれているし、それに不満はない。一人で充分やっていける。誰かと組む必要性は感じない。

それにこいつと組みたくない理由は他にもある。

こいつは容姿が良い。肩口で切り揃えられた濃い紫色の綺麗な髪と、アメジストのような輝きを放つ切れ長の瞳に、整った顔立ち。陶器を思わせる白い肌。女性としては高めの身長でプロポーシヨンも良く、出るとこは出て引つ込むとこは引つ込んでいる。かなりの

美女だ。

そしてハンターとしての実力も俺とそう変わらないだろう。だいたい見れば分かる。これでも俺はこの村一番のハンターのつもりであるし、今までにそれだけの功績も残してきた。ハンターを見ればそいつがどの程度の実力者かは簡単に見破れる。

そんなこいつを他の男共が放っておく筈がなく、度々勧誘されているがこいつはその全てを断っている。

そしてこいつが俺とパーティを組むとなるとどうだ？ 男共の嫉妬に眩む姿が目につかぶ。非常にめんどくさい。

つまり俺にとってこいつからの勧誘は厄介事以外の何事でもない。嫌に決まっている。

だと言つのにこいつは諦めもせず、勧誘は日に日にエスカレートし俺の家に侵入して来るほどになっている。

朝起きてベッドの中にこいつが居た時は、自分が過ちを犯してしまったのではないかと自己嫌悪に陥ってしまったものである。

「お前と組むくらいなら、アイルーを連れてった方がマシだ」

「そんなことは分からないだろう？ 君と私はまだ一緒にクエストに行つたことはないのだから」

「お前と組む必要性はない。よって一緒にクエストにも行かん」

「私には君が必要だ。だから私と組もう。一緒にクエストに行こう」

「嫌だつつつてんだろ。とにかく俺はお前とは組まない。分かったならさっさとっか行け」

「相変わらず手厳しいな、君は。だが君は私と組むことになる。私には分かる」

「お前は預言者か。そんなことには断じてならん。そしてそこをどけ。俺は家に帰って飯を食うんだ」

そしておれは家にいるアイルー達に癒されるんだ。

「なら私も行こう」

「なんでお前が来るんだ。馬鹿じゃないのか？ お前」

「酷い言い草だな。まずは一緒に食事をし、関係を深めることから始めよう。そしてそれから私達のこれからについて考えようじゃないか」

「そんなこと考えんでいい。そしてついて来るな」

「……ふむ、そうか。出来ればこの手は使いたくなかったのだが……」

「どんな手を使われようとお前と組むことも飯を食うことも未来永劫ない」

俺はどんな手を使われようと思ったりはしない。必ずや打ち勝つてみせる！

「今この場で、君に○○○○されたと叫ぶが、良いかな？」

「なっ!?!? お前は俺を性犯罪者にするつもりなのかっ!?!? やめろっ!?!?」

こんな人通りの多い道でそんなことを叫ばれでもしたら、俺はこの村に居られなくなる。そして性犯罪者というのは殺しと同等の重犯罪とされていて、ギルドのブラックリストに載せられハンターとしてもやっていけなくなる。

そしてこいつはマジだ。マジで俺に〇〇〇されたとか叫ぶつもりだ。こいつはそういう女だ。

「ふふっ、ならば私を君の家に招待してくれるな? 嫌だと言っのなら……」

「わっ、分かった! だからやめろっ」

なんて卑怯な女なんだ。俺は何でこんな厄介な女に目を付けられたんだ。

「君が賢くて助かるよ。では行こうか、私達の家へ」

「俺の家だポケット!」

「近い将来私達の家となるに違いない。私には分かる」

なにこいつ、怖いんですけど……。

なんだかんだで俺はこいつに押し切られてしまっのかもしれない。そんな気がするんだ……。

マジ、怖いです。

空気男とアイルー達と修羅場（前書き）

主人公達の名前出すの忘れてたのに気付いたのは1話目を投稿した後だった。

5月2日加筆修正。

## 空気男とアイルー達と修羅場

「旦那さん！ おかえりなさいニヤー！」

「おいお前ら！ 旦那さんが帰って来たのニヤー！」

「ニヤー！ 旦那さんニヤー！」

「ニヤーニヤー！」

「ニヤー！」

「相変わらず凄い数のアイルーだな……」

「うるさい。何匹雇おうが俺の勝手だ」

家に帰って来た俺を出迎えてくれたのは、俺の家で働いているアイルー達だ。

その数総勢16匹。普通では考えられない数だろう。

ネコ婆から紹介されたアイルーを片っ端から雇っていったらこうなった。

別に家で雇うアイルーの数に制限はないし、俺の家はまあまあデカイのでこれくらい居ても問題ない。それに俺は稼ぎも良いからな。

「旦那さん旦那さん！」

「ん？ なんだ？」

「その人は誰ニヤ？」

「ああ、こいつは……」

……なんて説明すればいいのかわからん。

付き纏われて、半ば脅されたも同然で此処へ連れて来させられた。客か？ と聞かれれば首を傾げざるを得ない。

「どこかで見たとあるのニヤー」

「どこでニヤー？」

「分かったニヤー！ この前の侵入者だニヤー！！」

「侵入者ニヤー！？」

「そうニヤー！ 侵入者だニヤー！ 間違いないニヤー！」

「出ていくのニヤー！」

「そうニヤそうニヤ！」

アイルー達が出ていけ出ていけと騒ぎ出す。確かにこいつは侵入者だ。間違いはない。

うん。そうだそうだ。出ていかせるべきだ。

やれ！ 我がアイルー達よ！！

「そう邪険に扱わないでくれ。君達は私のことを誤解している」

「誤解なんてしてないのニャー！」

「そうニャー！ 出ていくのニャー！」

「出ていくのニャー！」

良いぞ！ もっとやれ！ こいつを追い出してくれ！ 頼むっ！

「これは困ったな。そういえば、土産があるんだが……」

そう言ってこいつが取り出したものは……！？ マツ、マタタビ  
だっ！？

し、しかしその程度の誘惑に屈するような我がアイルー達では…  
…。

「マタタビニャー！」

「やったニャー！ やったニャー！」

「好きなだけ此処に居るといいニャー！」

「此処に住めばいいニャー！」

「そうニャそうニャー！」

「ニャーニャー！」

「ふふっ、気に入って貰えて何よりだよ」

ばかな……。我がアイルー達が……、こんな簡単に買収されるな

んて……。

お前ら、マタタビなんていつもあげてるじゃないか。後で好きなだけやるからこいつを追い出せよ！ 誘惑に負けるな！

「可愛いものだな。すっかり気に入られてしまったよ」

「なんて卑劣な……。良心が痛まないのか？」

「そう睨まないでくれ。私はただお土産を渡しただけなんだ」

嘘だ。絶対嘘だ。謀ったなこいつ。でなければマタタビなど用意してくるものか。なんて汚い奴なんだ。

「それはそうと、先ほどアイルー達が言っていたな。此処に住めばいいと。私としてもそれは望むところ。君の家はなかなか広いし、私一人増えたくらいなら問題ないだろう？」

「ばっ、馬鹿を言うな！ 問題だらけだっ！ なんでお前のような奴を此処に住まわせねばならんのだっ！」

こいつが此処に住むだと！？ 「冗談じゃない。あり得ない。却下だ却下！ 絶対に嫌だ！ 死んでもごめんだ！」

「そんなに拒絶しなくてもいいじゃないか。悲しくて涙が出そうだし嘘をつくな！」

この程度で泣く奴なら今まで俺に付き纏ったり、家に侵入したりするわけがないだろが！

「旦那さん酷いのニャー！ 住まわせてあげるべきニャー！」

「そうニヤそうニヤー!」「女の子には優しくしてあげるのニヤー!」

「大丈夫かニヤー?」

「ああ、ありがとう。しかし彼はとても嫌がっているようだ。私は邪魔なのだろう……」

「そつ、そんなことないのニヤー! 旦那さんはいい人なのニヤー! そんなこと思ってる筈ないのニヤー!」

「そうなのだろうか? 私が彼にいくら尽くしても、彼は私を邪険に扱うばかりで……、うう……」

こ、こいつううううう!!

よくもめけぬけど、どの口がそんなことをほざきおるかっ!!

いつお前が俺に尽くしたと言っんだ! 誤解を招くようなことを言うな! なんか俺が最低な奴みたいじゃないか!

そしてアイルー達! 演技に決まってるだろ! 騙されんなよ! よくそいつの目を見ても! 涙なんて出てないだろ、笑ってるだろっ!

「やはり私は迷惑が過ぎたようだ……。彼はとても私を嫌っている……」

「旦那さん酷いのニヤー!」

「酷いのニヤー! 酷いのニヤー!」

「彼を責めないでくれ。悪いのは全て私なんだ。私がいらないばかりに……」

「最低だニヤァー！ 鬼畜なのニヤァー！」

「鬼畜だニヤァー！」

「全ては私が……」

……………。

「最悪だ。鬱だ。死にたい」

「そんなことを言わないでくれ。悪いとは思っているんだ」

「平気な顔で嘘をつくな。てか笑ってんじゃねーよ！」

「すまない。こんなに上手くいくとは思わなんだ。つい笑みが零れてしまったよ」

こいつはあたかも自分が俺の為に尽くす良い女であるかのように  
思わせ、アイルー達を味方に付けた。

総勢16匹のアイルー軍団にニヤァーニヤァー罵倒され続けた俺は、  
結局折れてこいつを俺の家に住ませるといふ結果になってしまっ  
た。

「将を射んと欲すればまず馬を射よ。とは、よく言ったものだな。正にその通りだったよ」

「クソツ、外道め……」

「本当に悪かったと思っっているんだ。それに言っただろう？ 近い将来私達の家になる、と」

なにこいつ怖い……。

「おまちどおさまニヤー！」

元氣よくアイルー達が次々に料理を運んでいる。いつもより豪華だ。今日からこいつがこの家に住むことになるからそのお祝いらしい。

忌々しい……。

「荷物はどつするのニヤー？」

「ああ、もう少しすれば此処に届く手筈になっている」

「分かったニヤー！ 部屋は二階の空き部屋でいいかニヤ？」

「出来れば彼と同じ部屋がいいのだが……。これ以上を望むにはまだ早いか。そうしてくれ」

「分かったのニヤー！」

「元から此処に住まう魂胆だったのか」

「私の今借りている家は少々狭苦しくてな。それにこれからは君と  
組むことになるんだ。一緒に住んだ方が都合がいい」

「誰がお前と組むと言ったか。寝言は寝て言え」

「寝言か……。そう言えばあの夜も確か君は……」

「待て待て！ あの夜ってなんだ！？ ふざけた事を言っつな！」

「ふふふっ、なかなか君が起きないものだから。色々と君に……」

「なっ、なっ！？ 俺に何をしたっ！」

まさか、こいつマジで！？

そんな、嘘だ、あり得ない。

「冗談だ」

「~~~~~ツ!!」

「そんなに怒らないでくれ。軽い冗談のつもりだったんだ。……し  
かしあの時は、君のベッドに入った後、何故か凄く安心できて、良  
く眠れた」

「お前はっ！ このっ！ クソツ、もういい」

「そうだな。せっかくの食事が冷めてしまう。いただくことにしよ  
う」

もうこいつの相手は疲れた。無視だ無視。視界に入れないようにしよう。こいつは此処にはいない。そうだいなんだ。

俺は急いで飯を食って部屋に閉じこもった。恋人同士のように、あーん、と食べさせようなどとしてしている奴が居たが、無視だ無視。

俺の家には俺とアイルー以外には誰も居ない。居ないったら居ないんだ。

暫くしてから、今日は俺の相棒を工房の親方に整備してもらおう約束だったと思い出した。

俺の武器はかなり特殊であり繊細なので調整が難しい。自分でもできることはできるが、親方にやってもらった方がしっくりくる。

序でに色々アイテムでも見て回るか。

そう思って部屋を出ると、そこにはアイルーと戯れ合うあいつの姿。完全にアイルー達が懐いてやがる。あいつら主人が俺だと忘れてるのか？

「む、出掛けるのか？」

あいつが聞いてくるが当然無視する。無視無視。

「無視するなんて酷いニヤー！」

「そうニヤー！」

「ニヤーニヤー！」

クソッ、奴の術中にハマりおって！ 此処には俺の味方は居ないのか！？

「くっ、ちょっと工房に行ってくるだけだ」

「なるほど、なら私も行こう」

「何でお前がついてくる必要があるんだよ」

「私もちょうど工房に用事があるんだ。それとも一緒に行くのは迷惑だろうか……？」

「当たり前だポケッ！ 見え透いた演技はやめろっ！」

「ニヤー！ 酷いニヤ旦那さん！」

「最低だニヤー！」

「鬼畜だニヤー！」

「良いんだ君達……。悪いのは私だ……」

……………もうこの流れヤダ……………。

「おい、もうちょっと離れて歩けよ。というか、くっ付くのやめろやー」

「いいじゃないか、少しくらい。これからは一つ屋根の下に暮らす

者同士なんだから」

「誤解を生むような発言はやめろ！ 部屋は別だし、お前が勝手に俺の家に住むとか言い出したんだろ。てかさっさと出てけや」

「ふう、やはり君は一筋縄ではいかないな……。だからこそこちらのヤル気も起こるといふものだが」

「そんなヤル気は起こらなくていい。とにかく離れる、50メートルくらい」

もう勘弁してくれ。こいつと一緒に居るだけで周囲の視線が俺に突き刺さってくる。スキル使って逃げたい。でもこいつには効かないからな。マジで謎なんだが。

何故俺の居場所が分かるんだこいつは。自動マーキング付いてるのか？

千里眼女かこいつは。

「てかお前が工房に何の用があるんだよ」

「なに、私の武器の作成依頼をしていてな。今日がその受け取りの日なんだ。それにしても、君の武器は変わっているな。そんな形のボウガンは見たことがないよ」

「こいつは特注品だからな。他に使ってる奴なんか居るわけない」

「なるほど……。益々君に興味が湧いたよ。やはり君は良い。私と組もう」

「組まねーよ。いい加減諦めろ。ほら着いたぞ」

俺の家から徒歩数分の所にある工房は、この村唯一の工房でハンターの武器や防具の作成や修理を行っておりこの村のハンター達の御用達の店だ。

立派な大剣が店の前に飾ってあり人目を引き付ける。上半身裸の暑苦しい筋肉剥き出しの男達が働いているのも人目を引き付ける要因になっているのかもしれない。暑苦しい。

「いつ来ても暑苦しいな此処は」

「暑苦しいとはなんだクソガキ。男の職場舐めてんのか」

「おっと、禿げ、じゃなくて親方」

「お前、今俺のこと禿げって言っただろ。絶対言っただろ」

「何のことやら」

「クソガキめ。今日は何のようだ」

暑苦し禿げの筋肉男が此処の親方だ。50を越えてなお独身だが、腕は確かだ。

「こいつの整備を頼む。セッティングはいつも通りで」

「おおー、来たか俺の可愛い最高傑作ちゃん！こんな奴に使われ  
て可哀相に」

「黙れ禿げ。さっさとしろや」

「お前今確実に禿げって言っただろゴラア！！」

怒ってゴリラのようになる禿げはかなり暑苦しい。

それに陰ではみんな禿げと呼んでいることに未だ気付いていない可哀相な人だ。

「おっ、お嬢ちゃん。頼まれてた物は出来てるぜ！」

そう言っつて親方……、いやもう禿げでいいや。禿げが取り出した物は身の丈ほどの長さがあり、それでいて細くしなやかな剣。

太刀と呼ばれるハンターの武器の一つ。

昔、太刀を見せびらかしていた馬鹿なハンターがこの村にも居たがそいつもある日クエストに行つたつきり……。なかなか扱いが難しい武器のようだな、太刀というものは。

大剣のような重量と頑丈さは無いが、鋭い切れ味と大剣よりも軽いその刀芯は、使うやつが使えばバツバツサとモンスターを切り裂く。

そして受け取った太刀を抜刀し、刃の具合を確かめているこの女は、薄く笑みを浮かべていて、なんか人でも切りそう怖い。背筋がゾクツとする。

「良い出来だ。ありがとうございます」

「がはははっ、良いってことよ！」

禿げが照れんな、キモいわ。

それにしても……、鬼神斬破刀か。不覚にもカツコいいと思つてしまった。

太刀としてはランクの高い武器だな。あの禿げは性格はあれだが

やはり腕は確かなようだ。俺にも才能さえあれば……。いや俺はガンナー一筋だ。てかそれ以外無理なんだけど。そして必ずやあの射撃の境地に至ってみせる！

「ところで、何でクソガキとお嬢ちゃんが一緒なんだ？」

絶対来ると思っていた質問が来やがった。上手く誤魔化さねば。

「偶々来る場所が一緒だったただけだ。こいつのこと何て一切知らないし、俺とは何の関連性もない」

「私は今日から彼の家に住むことになったんです」

「なっ！？ 何だとおおおお！！」

「ちょ、お前何言ってるんだ！？」

そんなこと今言ったらどうなるか考えろよ！ 主に俺が。頼むから空気読めよ！

「クソガキイイイ！ お前はこんなかわいこちゃんに手を出したつてのかっ！！ 何で俺じゃなくお前なんだっ！？」

「黙れ禿げ！ 誰がこいつなんかに手を出すか！ それと自分との年齢差を考えろやロリコンがっ！！」

「なんだとクソガキ！ おい野郎共やつちまえ！！」

ぞろぞろと工房から暑苦しい筋肉男達が出てくる。仲間を呼ぶとは卑怯な！

「生きて帰れると思うなよ！」

「よくも俺の女神に手を出してくれたな！」

「馬鹿野郎！ 彼女は俺の天使だぞっ！」

「お前この間はアイテムショップのケティちゃんが好きだって言うてたじゃねえか！」

「い、いやそれはだな……」

「そんなことより今はこいつを成敗するぞ野郎共！」

「うおおおおー！！！」

「そんな大人数で卑怯だぞお前等！」

「私の為に争うのは止めてくれ！」

「お前もう黙ってる！！！」

「酷い目に会った……」

あの後スキルを使って必死に逃げた。逃げまくった。久しぶり死ぬかと思ったぞ。あんな筋肉達磨達と戦ったら命がい

くつ有っても足りん。

「全くその通りだな」

「何でお前が居るんだよ……」

何で俺のスキル効かないのこいつ？ マジで。ちょっと詳しく説明してくれ。

どうやっても俺はこいつから逃げ切れないのか？

「てかもつお前の用事は済んだんだろ。さっさと家に帰れよ」

「む、君はまだ帰らないのか？」

「俺はこれから寄るところがある。お前は帰れ。そして俺の家から出てけ」

「ならば私もついて行こう」

「だから何でお前がついて来るんだよ！」

「私はまだこの村に来てから日が浅い。散策も兼ねて君について行くことにする」

「そんなもんは別の日に一人でやれ」

「少しくらいはいいだろっ？ 最も、ダメと言われてもついて行くな」

「くっ、このっ、……ならおとなしくしてろ、言葉を発するな、他

人のフリをしろ、存在を消せ、てか消えろ」

「そんな酷いことを言わないでくれ」

「とか言っつて腕を組むのはやめろや！ また誤解されるだろが！」

「これもダメなのか。全く君という男は……」

「なんで俺がダメみたいなことになってんだよ！」

「仕方ないな、じゃあ隣を歩くだけにしておくよ」

「だからなんでお前が妥協してやったみたいになってんだよ!!」

「隣を歩くのがダメだというのなら腕を組む。それが抱きつく」

「こ、このっ、なんて女だ。……隣を歩くのを認めよう」

「君がそこまで言うなら仕方ないな。隣を歩くことにしよう」

お、女を殴りたいと思ったのは生まれて初めてだ。

こいつ俺で遊んで楽しんでるだけだな？ 何で俺がこんな奴に遊ばれんにゃならんだ。

そんな感じで歩いて行くと、村の中心からやや離れた場所にあるアイテムショップに着いた。

ハンター用品や日用品なんかも扱っていて、俺はいつも此処を利用している。

それに看板娘のケティちゃんは可愛いし。

「いらつしゃいませ！ あ、バレルさん！」

可愛らしい声と共に現れたのは この店の看板娘のケティちゃんだ。

深緑色の髪とそれと同じ色の大きな丸目が愛らしい少女だ。小動物のような仕草は思わず抱きしめたくなる。

まあそんなことをしたらこの店の店長でケティちゃんの母親のケイシーさんに殺されるがな。

あの鬼のようなお人とケティちゃんの血が繋がっているとは思えない。ケティちゃんが将来あんな風に成ってしまうとしたらこの村の男の大部分が絶望することだろう。無論俺も。

因みにバレルというのは俺の名前。銃身を意味するそれは自分が銃の一部に成ったような一体感があつて気に入ってはいるが、スキルによつて一部を除いて誰にもバレない俺の名前がバレル……。我ながら寒いな。

訓練所の教官は「名前がギャグとか、ぷぷぷ」とか言いやがったのでぶちのめしてやったが、次の日にはピンピンしていた。お前の存在の方がギャグだ。

あと言わずもがなに偽名だ。

この世界では前の世界での漢字の名前なんてかなり使い難いし、一々目立つから偽名にした。

俺は目立つのが嫌なんだ。ひっそりと生きていきたい。

例え元の世界に戻れないとしても……。

因みに教官の名前はダンカンというらしい。果てしなくどうでもいいな。

「おう、いつものやつな」

「かしこまりました！」

俺はこの店の常連客なのでだいたい此処に来た時には「いつもの」で通じる。

いつもの、とは通常弾や貫通弾などのことだ。

自分で調合しろや、とか思つかもしれないがあれは結構めんどくさいし買った方が早い。

街などの店で売ってる弾丸は質が悪い物が多いらしいがこの店の弾丸は質が良い。ケティちゃんは調合が得意らしい。

「おまちとおさまですー！」

「ああ、ありがとう」

「はい！ えと、その隣の方は……」

ケティちゃんがビクビクしながら聞いてきたことで、隣にいる女の存在を思い出した。

そついやこいつのこと忘れてた、と思い隣を見てみると、こいつはケティちゃんのことを、眉間に皺を止せ、歯をむき出し、その眼力で殺そうとするかの如き目つきで睨み付けていた。

何て顔してんだよ！ 怖すぎるだろ！

「私は彼の家でこれから一緒に暮らすことになった者だ。彼とは君よりもずつと、ずつと深い関係にある」

「えっ、そ、そうなんですか……？」

でたらめを言うな！　そしてケティちゃん信じないでくれ！　こいつとは何もないんだ！

やや涙目になりながら聞いてくるケティちゃんにちょっとドキッと  
する。

「確かに一緒の家には住むが……」

「そんな……」

いや待てケティちゃん、話しを最後まで聞いて下さいお願いします。  
す。

「理解出来たか？　私と彼は愛し合っている。何者も邪魔することは  
できない」

「嘘を付くなポケツ！」

「えっ、嘘だったんですか！？」

「嘘ではない」

「やっぱり、本当なんですか……？」

「嘘だから、こいつの言ってることは全てでたらめだから！」

「嘘などではない。一夜を共にした仲だ」

「それはお前が勝手に……」

「やっぱり……」

誤解を招くような言い方をするなっ！

そしてケティちゃん、こいつの言うことを一々信じないでくれ。

暫くしてやっとケティちゃんの誤解が解けた。

俺が説明している最中にいらぬ事を言う女がいるのでかなり疲れた。

「じゃあ、この人とは何もないんですね？」

「そんなことはない」

「こいつの言うことは全て無視してくれ。こいつとは何でもない」

「はっ、はい。分かりました」

これでもう安心だ、とと思っているときいきなりこいつは俺の腕に抱きついて来た。

「何してんだお前！ 離れろ、て痛てててっ！ やめろ、骨が折れる！」

なんだこいつ。どんな力してんだよ、化け物がこいつは！

「バレルさんから離れて下さい！ 嫌がってるじゃないですか！」

「そんなことはない。彼は照れているだけだ。それに君は彼の何だ？ 彼女というわけでもない君に止める権限は無いよ」

「そ、そうですけど……。でも、バレルさんが嫌がってるのは分か

ります！ バレルさんを放して下さい！」

「そつだ早く離せ。もう限界だ。これ以上はヤバい、ボキツといくぞ。主に腕が。」

「マジで頼む。放してくれ！ これ以上は本当にヤバいんだ！」

「性欲を我慢する事はない。我慢せずに私としよう」

「性欲じゃねえよっ！ 腕が折れそうなんだよポケツ！ さっさと放しやがれ！」

「仕方ないな」

「やっと解放された……。絶対痣になったぞこれは。後で回復薬かけよう。」

「あつ、あなたの名前を教えてください！」

「アリシアだ」

「アリシアさんですね、分かりました。あなたには絶対に負けません！」

「私に勝てるだけでも？ 冗談は止してください」

こいつの名前は今初めて知ったな。自分が今まで名前も知らない奴にまとり付かれていたと思うとゾツとするな。怖すぎる。

てか何の話しをしてるんだ？ 目立ってしょうがない。野次馬が集まって来てるし。

今のうちに家に帰ろう。今日はもう疲れた。散々な一日だったよ。何やら話しをしているケティちゃんと、こいつとかあいつ改め、アリシアを置いて家へと帰った。

家に帰る途中にアリシアが追い付いて来て腕を組もうとするのを防ぎつつ、やっとこさ家に帰り着いた。もう疲れた。アイルー達に癒されたい。

「旦那さんと姐さんが帰って来たのニヤー！」

「おかえりなさいニヤー！」

「ニヤーニヤー！」

我が愛しのアイルー達が出迎えてくれる。うむ、癒される。てかなんでアリシアが姐さんなんて呼ばれてんだ。洗脳だ。洗脳に違いない。完全に我がアイルー達はアリシアに洗脳されている。しかしもうそれを正すのも面倒なほどに今日は疲れた。早く飯食って風呂入って寝たい。

「ご飯にするかニヤ？」

「お風呂にするかニヤ？」

「それともわたry」

「お前は出てけ」

それから飯を食うとなれば、アリシアが食べさせようとしてきたり、風呂に入っているとまたアリシアが入って来ようとしてきたり、寝ようとすればベッドに入って来ようとしたりと、ことごとく俺に付き纏ってきた。

そしてそれを拒絶するとアリシアはアイルー達を味方に付け、アイルー達は俺を非難し始めるのだ。

かなりセコくないか？ 絶対洗脳されてるよこいつら。

因みに朝起きるとアリシアは俺の身体に抱きつきながら寝ていた。それで俺が驚いてアリシアを突き飛ばすとアイルー達が来て以下省略。

もうほんとヤダ。

いつの間にかこの家がアリシアに乗っ取られてる。

何でこうなってしまったんだ。

とにかくアイルー達の洗脳を解こう。そうしよう。

アリシアの寝顔がちょっとだけ可愛いと思ったのは何かの間違いだ。これも洗脳に違いない。そうしたらそうに違いない。

さて、今日も狩りに出かけるとするか。

「私と一緒にな」

「絶対嫌だ」



空気男と勝負と岩竜（前書き）

小説を書いていたら1日が終わっていた、あるある。

## 空気男と勝負と岩竜

「私と一緒に狩りに行こう」

「嫌だっつってんだろ」

「ダメだ、一緒に行こう。私と組もう」

「何でお前にダメとか言われにやなんのだ。一人で行けや」

「君と一緒にでなければ意味がない」

「んなこと知らんわ。てか引っ付いてくんないや！」

朝っぱらからこんな感じでアリシアは俺に付き纏ってくる。いい加減鬱陶しくて堪らん。

「お願いだ。私の願いを聞き入れてくれ」

そう言つて上目遣いにこちらを見るアリシア。認めたくはないがこいつは美人だ。美人に上目遣いで懇願されるとたいいの男はやられてしまう。俺もちょっとはグッと来るものがあるが、こいつの本性を知っているので屈することはない。

「ダメだダメだ。絶対にお前とは一緒に行かん」

「これだけ頼んでもダメとは……。君はやはりどこかおかしい」

「おかしいのはお前の頭だ」

「君は強情だな」

「お前はしつこい。さっさと消えろ」

ほんとにこいつはしつこい。何だって俺みたいな奴に付き纏うのか。まるで見当がつかない。俺はこれから四六時中こいつに言い寄られなければならぬのか？冗談じゃないぞ。

それに悲しいことに、昨日の騒動で分かったのだが、俺はこいつに単純な身体能力で負けている。男としてどうよ、とは思っただがこいつが化け物なだけだと思う。思いたい。絶対そうだ。

つまり身体的にこいつに劣る俺は、こいつに力で強引に迫られると勝てない。

何とか言葉でこいつを言い負かして諦めさせるしかないのだ。

「押してダメなら引いてみる、とよく言うだろう？だからお前も引いてくれ。そうすれば俺もお前と一緒に狩りに行っても良いと思うかもしれない」

引いた瞬間家から追い出すから。

「君にそれは通じないよ。しいて言うなら、押してダメなら押し通せ、か」

ただ強引なだけじゃねえか！

クソツ、何気にこいつは頭が良いんだ。ちょっと頭のネジが一本か二本外れてるだけで。

とにかくこいつがアイルー達を呼ぶ前にケリを着けなくては。数の暴力の前では個人は無力なのだ。

「何だつてお前は、俺に付き纏うんだ？何で俺と組たがる？何の理由がある？」

「それはだな……」

「旦那さん姐さん、朝食の用意が出来たのニヤー！」  
くっ、もう来やがったか。

「ん？何ニヤ？もしかして旦那さん、姐さんをイジメてるのかニヤ？」

「そうなんだ。実は彼が……」

「違う！違うぞ！そいつの言うことは全てでたらめだ。信じるんじゃない！」

「それで彼が……」

「ニヤー！旦那さん酷いのニヤー！」

「待て待て！俺の話を聞け！」

「良いんだ君達……。私が我慢すれば……」

「最低だニヤー！」

「鬼畜だニヤー！」

「俺の話し聞けやつ!」

「何故こうなった……」

「これでやっと君と狩りに行ける。心が踊るよ」

アイルー軍団の総攻撃を受けた俺は、渋々、誠に遺憾だが、こいつと共に狩りに行くこととなった。てかアイルー達は酷いと思う。俺はお前らの雇い主なんだぞ?会社の中で社長に楯突いた平社員はクビにされるんだぞ?分かってるの?まあ俺はクビにはしないが。てか悪いのはアリシアだ。奴に決まっている。悪質なコンピュータウイルスのようにアイルー達に取り付きその思考を乗っ取ったに違いない。そうであって欲しい。

「確かに私は随分と卑怯なことをしたと思う。だから約束しよう。今回の狩りを見て私のことが気に入らない、私とは合わないと君が思ったのならば、私は君から手を引こう」

「大した自信だな。俺が嘘を付いてお前とは合わないと言うかもしれないぞ?」

「君はそんな男じゃないよ」

「どうだか」

そこまで言うのなら、もし万が一、いや億が一にも、あり得ない可能性だが、もしも、こいつとこれからやっていけると思わせられたのなら、それだけのものをこいつが持っているのなら、俺も認めようじゃないか。

これは勝負だ。もし負ければ俺は死ぬまでこいつに付き纏われるだろうが、俺が勝てばこいつとはおさらばだ。

そしてこの勝負で必ず俺は勝利してみせる。俺は今までの人生で勝負事において負けたことはない。この勝負も勝ってみせる！そしてこいつの呪縛から解き放たれるのだ！  
不敵に微笑むアリシアを睨み付けそう誓った。

それから工房に行つて俺の相棒を受け取る際に禿げが襲い掛かって来たが何とか逃げきった。ロリコンは恐ろしい。

そして今は集会所の入り口。扉を開けると、朝だからかハンターの数はそこまで多くないがそれでも俺達を交互に見て、特に俺を睨み付ける。その視線がビシビシ俺の身体に突き刺さるのを感じながらクエストボードまで歩く。

だから嫌なんだこいつと一緒に居るのは。この村には女ハンターというのはほとんどいない。ハンターというのは男社会なところもあるし、女は入りづらくもある。そしてこの村の女ハンターは、なんていうか、その、大変失礼なのだが、ゴツい。ゴツいという表現を女性に使うてはいけないと分かつてるんだが、ゴツい。特に顔が。まるでゴリラかチンパンジーの様だ。残念ながら事実だ。

そしてその残念な女ハンターの中でもアリシアはとびきりの美人。上玉という奴だろう。認めたくないがこれも事実だ。

そんなこいつの隣を歩く俺は彼らから見れば、忌々しい存在といえるだろう。俺が彼らの立場ならそんな奴には貫通弾をお見舞いする

ね。  
そろそろ視線がキツくなってきた。だからさっさとクエストを選ぶことにしよう。

「どれにするんだ？」

「君に任せるよ。好きなものを選ぶといい。君が選んだクエストで私の実力を君に認めさせてみせるよ」

なるほど、既に勝負はここから始まっているわけか。そしてその内容は俺が決めていいときてる。圧倒的に俺が有利だ。そして俺は容赦しない。こいつを叩き潰し、平穩を取り戻す。そして俺が選ぶクエストはこれだ！

「バサルモス二体の討伐か……。君がそれを選ぶのなら、私はそれで構わないよ」

「本当に良いのか？後悔しても知らないぞ？」

「望むところさ」

「良い度胸だ」

バサルモスとは全身が岩の様な身体、てか岩で出来ていてその防御力は並大抵の武器なら簡単に弾かれてしまうほどだ。成長するとグラビモスと呼ばれる巨大な鎧竜と成るが、バサルモスはその固い甲殻で攻撃を弾き、近付く者には毒ガスを浴びせたりと、剣士や接近武器を使う者にとっては面倒な相手だ。ガンナーの俺にとってはのるまなバサルモスは的ではないがな。そしてアリスは昨日武器を新調したばかり。試し切りも行っていないだろう。そしてその初

の試し切りの相手はバサルモス。  
つまりこれは俺のアリシアに対する嫌がらせだ。本当はグラビモス  
が良かったが、そのクエストは無かったのでバサルモスのクエスト  
にした。性格悪いなお前、と言われればその通りと答えるしかない。  
しかし俺はそのくらいこいつと組むのが嫌だ。それだけは分かって  
欲しい。  
なのにこいつときたら自信満々という顔をしていやがる。その自信  
がいつまで続くか見ものだ。

俺はそのクエストを受注するためにカウンターにいるメイド服の受  
付嬢、シェリーのところに行く。

「これを頼む」

「分かりました。ソロでの討伐で良いですね？」

「いや、今日は……」

「私と彼の“二人”だ」

「二人……？」

やけに二人というところを強調するアリシア。

「どういうことですか？彼女と組むのですか？バレル」

「私達はこれからパートナーとなるんだ」

「いやまだ決まってるないだろ」

「それにもう私達は一緒の家に住む仲だ」

「どういうことですか？きちんと、私の目を見て説明しなさい。バレル」

「私と彼は愛し合っている。同じ家に住むのは当然のことだ」

「貴女には聞いていません。どうなんですか？バレル、きちんと、私の、目を、良く見て、説明しなさい」

いつも穏和な笑みを浮かべているシェリーの顔が、今は絶対零度の無表情だ。どうしたと言うんだ、かなり怖いぞ。一体なんなんだ？妙な迫力があってかなりヤバい。これは飛竜を相手にした時と似ている。生命の危機を感じるぞ。てかアリシア！でたらめを言うのは止める！話しが拗れるだろが！

「まっ、待て待て！こいつの言っていることはほとんどでたらめなんだ！」

「ほとんど、とはどういうことですか？一部は事実なのですか？」

「でたらめなことなど何も無い。全て真実だ」

「貴女は黙っていて下さい。バレル、どういうことが、私に説明してくれませんか？」

そうやって俺に説明を求めてくるシェリーはかなり怖い。とにかくきちんと説明しなければ。

「なるほど。つまり彼女が、無理矢理、強引に、自分勝手に、バレルの家に押し入って来た、ということの良いですね？」

「そんなことはない。彼は快く了承してくれた」

「貴女は黙りなさい。バレル、私の言った通りなのですね？」

「あ、ああ。その通りだ。こいつとは何も無いんだ」

何とか説明し、シエリーの誤解は解けたようだ。

良かった。何が良かったかって？殺されないで良かった。そんなはずないと思うかもしれないが、俺のハンターとしての勘が言っている、彼女の誤解を解かなければ殺される、と。

「バレルが迷惑していると考えたことは無いのですか？」

「彼は照れているだけだ。本当は彼は喜んでいいる。私達は愛し合っている」

「それは貴女の妄想です。妄想と現実の区別も付けられないようです、貴女は」

「そんなはずはない。本当に嫌だと言うのなら、無理矢理にでも私を家から追い出すはずだ」

「バレルは優しいのでそのようなことはしないでください。バレルに代わって私が言います。バレルの家から出て行って下さい」

「君にそんなことを言われる筋合いはないな。これは私と彼の問題だ。部外者は口を挟まないでもいい」

お互いに睨み合い、口論する二人は、妙な迫力があってかなり怖い。てかヤバイ。

そしてそんな二人はその容姿も含めてとても目立つので、どんどん野次馬が集まってくる。そんなことはお構い無しに二人の口論はヒートアップしていく。その口論の内容が俺に関する事なのでかなり嫌だ。これは俺に対する嫌がらせなのか？

「君の様な貧相な身体では彼は満足出来まい。やはり彼に相応しいのは私だ」

「胸と態度ばかり大きいようで、品性が足りないようです。貴女は。貴女のような方がバレルに近付くのは止めて下さい。バレルが穢れてしまいます」

話しの内容がどんどんズレていってるような気がする。そして俺の名前を出さないでくれ。恥ずかしくて死にそうだ。

そしてそんな時一人のハンター、朝まで飲んで居たのだろうか。なり酒臭いが、アリシアに近付く。

「おうおう、姉ちゃん。そんな男のこと何てほっといて、ちょっと俺と」

「邪魔だ」

「ぶへえええええ！」

酔っぱらいハンターにアリシアの右の正拳が直撃し、集会所の壁まで吹き飛んだ。てかめり込んでないか？大丈夫かあいつ。

周囲からも「あいつ大丈夫か？」とか「死んだんじゃねえか？」とか聞こえてくる。  
そしてそれをやった本人のアリシアはシェリーにどや顔だ。どんな自慢の仕方だよ。

「その程度でいい気になるのは止めて下さい」

「えっ、ちよっ、なに、ぐえ！」

そういつてシェリーは野次馬の一人のクビを掴み

「はっ！」

「ぎゃああああー！」

投げた。

まるで人間がダーツの様に飛んでいき、垂直に壁に突き刺さった。周囲からは「あいつ死んだだろ！？」とか「医者を呼べっ！」とか聞こえてくる。その横で俺はちよつと現実逃避してたりした。

何だこの化け物共は……。

その後も「まだまだ」とか言つてアリシアが野次馬を殴り飛ばしたり、「その程度ですか」とか言いながらシェリーが野次馬を投げ飛ばしたりするのが暫く続いた。

なんて恐ろしい女達だ……。

「頼むからもう騒ぎを起こすのは止めてくれ。自重してくれ」

「別にそんなつもりは無かったのだが……。君がそこまで言うのならそうしよう」

集会所で文字通り人が飛ぶという騒動も何とか治まり、今はクエストに向かう竜車に揺られている。

その後、やっとクエストを受注をする時にシエリーが、「私は貴女を認めません」とか「精々バレルの足を引っ張らないことです。貴女程度の実力では無理でしょうが」とかアリシアを挑発し、アリシアは「君に認められる必要はないな」とか「そんなことはあり得ないな。今回の狩りで私達の関係はより深まる。君が入り込む隙間はなくなる。可哀相に」とか言い出しやがるもんだからまた一騒動起きそうだった。

またあんな人が飛ぶ奇怪な事件が起こるのは嫌だったので、アリシアの腕を掴んで急いで竜車へと向かったのだが、「そんなに私と二人きりになりたいとは。私の勝ちが決まったようなものだな」とかアリシアが余計なことをほざき出し、シエリーは「バレル、帰ってきた時どうなつても知りませんよ?」みたいことを言っていて帰ってきた時何をされるんだと今ちょっと震えていたりする。

「てか隣に来るな。向かい側に座れ。狭いだろが」

「誰も見ていないんだから、少しくらい良いだろう?」

「だからって腕を組もうとすんな!」

「これからまだ暫くかかる。せめてもう少しだけこうさせてくれな  
いか？ね？」

「ね？じゃねえよ！離れるや！」

「君は本当に恥ずかしがり屋だな」

「痛い痛い痛い！分かった！分かったから！腕を組んでもいいから  
！力を入れるのは止めてくれ！折れるっ！」

「君は大袈裟だな。では暫くこうさせてもらおう」

最後は結局暴力に頼るとは、なんて女だ。俺の腕に幸せそうに擦り  
寄ってくるアリシアを見てそう思った。決して可愛いとは思ってな  
い。本当に。

そんな感じで半日ほど竜車に揺られ、着いた場所は火山だ。

常にマグマが吹き出していて、登れば登るほど熱い。暑いのではな  
く熱い。頂上では良質な鉱石や、此処でしか採取できない貴重な鉱  
石も多数存在する。それに発掘ポイントも多く、俺も何度も足を運  
んだものだ。一時期、鉱石ハンターなんて呼ばれたこともある。

そして肝心のバサルモスの居場所かというと、大概は麓の方の岩場  
に居ることが多く、たまに頂上付近にも居ることがある。

そのどれもが地中に潜り岩に擬態しているので、慣れていないハン  
ターが見付けることは難しい。不意打ちを食らうこともあるだろう。  
まあ良く見れば分かるもんだがな。

そして今回はそれが二体。今は昼過ぎなので今日中には終わらない  
かもしれない。火山のフィールドはなかなか広いからな。

そうなると大概のハンターはベースキャンプで一泊して〜というこ  
とになる。そしてそのことに今気付いた俺は、ちよっと馬鹿なのか

もしれない。アリシアがほくそ笑んでいる。何かが起こりそうな気がする。なんとしても今日中に終わらせなければ。

「まずは岩場まで行くぞ」

「そうだな。其処に一体居るような気がする」

「なんだ、分かるのか？」

「だいたいの居場所は分かるよ」

そういえばこいつはスキルを発動させた俺を一瞬で見付けけるような奴だった。飛竜の居場所も見付けられるのは当然ということか。

「私は役に立つだろうか？」

確かにこいつが居れば飛竜が見つからなくてフィールドを行ったり来たりしなくても助かるだろう。あれはキツイ。かなりイライラする。

しかしその程度でこいつと組むことに決めたりはしない。こいつと組むよりは飛竜が見つからなくてうるちよろしている方がマシだ。

「ふん、とにかく行くぞ」

そう言って歩き出し、暫くして俺達の前に現れたのはイーオスと呼ばれる赤い小型の肉食鳥竜だ。亜熱帯に群れで生息していることが多く、喉元にある毒袋から毒を吐いて獲物の体力を奪ったりする。それが二体現れた。無視して進んでも良いが何となく邪魔になりそうだったので討伐しておこうか。

「お前は左の奴をやれ。俺は右をやる」

「分かった」

相棒に通常弾を装填し、右のイーオスに向けて速射する。三発の通常弾がイーオスの頭部に直撃しイーオスが吹き飛んだ。

速射とはライトボウガン特有の機能で、一度引き金を引くだけで連射できる機能だ。威力で劣るなら手数で補え、というわけだ。バーストショットってやつだな。

俺の相棒にはその機能が備わっていて、通常弾と貫通弾を速射でき、さらにその機能をON・OFF切り替えができる。通常のライトボウガンでは固定機能なのだが、それだと使いにくいので禿げに無理を言って作らせた。

あの禿げが最高傑作と呼ぶだけはある。そんな物を作ったあの禿げはかなり凄いのかもしれないがどうでもいい。

先ほど吹き飛んだイーオスが起き上がって来ようとしていたのもう一発通常弾を食らわせて沈黙させた。

こいつらは体力が地味にあるから面倒なんだ。

左のイーオスを狩っているはずのアリシアを見ると、既に狩り終わっているようでイーオスの頭と身体がお別れしていた。

一撃か……。その切り口は見事と言う他無いな。

アリシアは涼しい顔をして太刀に付いた血を払っている。

「君から見てどうだ？私の実力の程は」

「イーオス一匹倒したくらいでいい気になるな。そのくらい出来る奴はゴロゴロいるぞ」

「ふふっ、確かにそうだな。ふふふっ」

「何笑ってんだ」

「ふふっ、君と一緒に狩りをしていることが嬉しくてな。つい笑みが零れてしまう」

「一緒に狩りをするのはこれが初めて最後だからな。精々楽しめばいいさ」

「そうならない為にも力を尽くすよ。ふふふっ」

ふふふふと笑うアリシアは置いといて、倒したイーオスから素材を剥ぎ取る。弱肉強食のこの世界ではこういうことも礼儀の一つだと思っ。小金にもなるしな。

それからは猪突猛進する猪のファンゴや、ホーミング生肉と呼ばれているアプケロス等を、俺が撃ち殺したりアリシアがバツサバツサと斬り裂いたりして進んで行った。こいつらは狩りの途中だろうとお構い無しに突進して来るので、ハンターからは嫌われている。俺も苦い思い出があったりする。

そんな感じで岩場にやってきた。ゴロゴロと岩が転がっていて、火薬を含んだ爆弾岩が多くある。

そしてそのフィールドの中央にある岩、擬態しているバサルモスだろう。とりあえず一匹は見つかったな。

「じゃあ俺は此処で観てるから、行け」

「む、一緒に狩らないのか？」

「それじゃあお前の実力がよく観れないだろ。元々はそれが目的な

んだから」

「それもそうだな。では其処で良く観ていてくれ」

「ああ。ランゴスタくらいは狩ってやるよ」

「ありがとう、では行ってくる！」

張り切って走りだしたアリシアは、バサルモスの手前で止まる。ちつ、そのまま突っ込んで不意打ち食らえばいいのに。流石にそこまで馬鹿じゃないか。つまらん。

アリシアはポーチからペイントボールを掴み取り、目の前の岩に擬態しているバサルモスに投げつけた。ペイントボールが塗料をぶちまけると同時に背中の中だけ出して地中潜っていた身体が出てくる。

岩に覆われた身体と短めの翼と尻尾、岩竜バサルモスだ。

ややスモールサイズ気味だな。どうせならキングサイズ出ろよ。

そしてバサルモスは自らの眠りを妨げた目の前の人間に対し咆哮する。その音はハンターの身体を数秒硬直させる程だが、アリシアには効かない。アリシアの防具はリオソウルと呼ばれるリオレウスの亜種の上質な素材から造られている。

そしてその防具によるスキル『高級耳栓』により、あらゆる飛竜の咆哮を完全にシャットアウトすることが出来るのだ。どういう仕組みなのかよく分からないが、一定以上の音量を遮断するものなのだろう。羨ましい……。

因みに俺の防具はナルガクルガの素材で造られた物だ。迅竜と呼ばれているナルガクルガは樹海の奥に生息している最近発見されたばかりの飛竜で、その名の通りの素早い動きと攻撃、そしてその狡猾さでかなりの強敵だった。しかし樹海というフィールドは障害物や隠れる場所が多く、スキルを使った俺には有利に働いた。普通に戦

つていたら今頃此処には居ないだろうな。今まで戦った飛竜の中で一番強かった。そしてそのナルガクルガの素材で造られた防具はやや露出が多いが軽くて動き安く気に入っている。

そんな話は置いて、バサルモスの咆哮が効かないアリシアは太刀を抜刀し、バサルモスの岩の様な身体の中でも特に防御の薄い腹を斬り付ける。その際、アリシアの鬼神斬破刀が雷光が発し肉を焼く。鬼神斬破刀は雷属性の太刀でその刀身は雷を発生させ、モンスターにダメージを与える。

さらに二度斬り付けるとバサルモスの腹から血が吹き出す。

そこでバサルモスが毒ガスを噴出するモーションをとるのが分かる。とアリシアは攻撃を止め毒ガスの届かない場所まで一旦引く。バサルモスの身体から紫色のガスが止まるとバサルモスは突進の態勢をとった。

それを見てアリシアは一旦太刀を納刀し走りだす。その方向にバサルモスが突進を仕掛けるがアリシアをそれを軽々と躲し、バサルモスはその先にあった爆弾岩に激突、強い衝撃を受けた爆弾岩は爆弾しバサルモスへダメージを与える。

これは火山地帯で飛竜を相手取る時にハンターがよく使う手だ。地形について少し知っていれば結構簡単にでき、それでいて飛竜への効果は高い。

だがこれは誰もが使う手であって、こんなものを利用しなくてもバサルモスは倒せる。俺が見たいのはこんなものではない。

アリシアは一瞬だけこちらを見ると微笑んだ。もうこんな手は使わない、といった顔だ。ならば見せてもらおうじゃないか。

そこからアリシアの怒涛の攻撃が始まった。バサルモスの攻撃は今まで培った経験と勘で先読みして躲し、それでいて僅かな隙も見逃さない。防御の薄い腹への徹底した斬戟は次々とバサルモスの腹に赤い線を刻み、その赤い肉を露出させる。そして力任せに強引に攻撃するのではなく、無理することなく引く時は引く。

ヒット&アウェイ。簡単に見えるがこれが案外難しいもので、出来ないハンターは結構多い。重症を負うハンターに限ってこれが出ていない。

アリシアは状況に合わせバサルモスの攻撃範囲を見切り、その全てをことごとく躲していく。

そしてそこから生じる隙は見逃さず次々に剣戟を加える。

徐々にアリシアの身体と太刀が赤いオーラに纏い、それが増加していく。斬れば斬る程に攻撃力を増すそれは太刀の特性だ。そしてそのオーラを解き放つことで可能となる太刀の奥義がある。

左右から斜めに斬り裂き、それだけでは終わらない剣戟は激しさを増す。

そして最後の一撃を放つ為に太刀を上段に振り上げる。

「はあ!!」

気合い一刀。とどめの一撃とばかりに上段から振り下ろされた太刀の一撃はバサルモスの露出した腹を大きく斬り裂き、その一撃を受けたバサルモスは力なく横たわり、動くことは無かった。

気刃斬り。太刀の奥義だ。

そして討伐完了ってわけだ。

息を整えながら返り血と汗を拭うアリシアに俺は近付いていく。

「ご苦労さん」

「ああ、君に不様な姿は見せられないと思うと、少し力が入ってしまったよ。それよりちゃんと観ていてくれたか？」

「そりゃ観てたさ」

「そうか、それで私の実力はどうだった？」

「まあ、お前の実力については認めよう」

動きには全く無駄が無く、その剣戟は鋭く速く正確でそれでいて力強い。

ぶっちやけ最後の気刃斬りには度肝を抜かれた。

やはりこいつの実力は確かだ。単純なハンターとしての技量は俺より上だ。

「そうか！では、約束通り私と」

「しかしそれとこれとは別だ」

「む？どうということだ？約束を破るつもりなのか？」

怪訝な顔をしてアリシアが聞いてくる。俺が約束を破ろうとしているんじゃないかという顔だ。しかしこいつは勘違いしている。

「確かにお前の実力は認めよう。しかしパーティを組むにあたっては個人の實力よりも寧ろチームプレーが出来るかどうか、つまり俺とお前が噛み合うかどうかの方が重要なのだ。そして約束ではお前と俺が噛み合うか、そうでないかで組むか組まないかを定めることになっていた筈だ」

「なるほど、確かにそうだ。じゃあ今までの私の狩りは意味が無かったということなのか？」

「そんなことはない。実力も戦闘スタイルも知らない奴といきなり

狩りを共にしても噛み合うわけではない。今までののはこれからパーティーを組む上での最低条件を満たしているかどうかの確認だ」

本当はこいつの実力が思ったより大したこと無かったらそこで終わりだったんだが、あれ程見事な狩りを観せられたらそんなことは言えない。流石にそれは俺のプライドが許さない。

「そうだったのか。しかしそれでは私は君の戦闘スタイルを良く知らない。これではいきなり君とがちり噛み合うのは難しいのではないか？」

「まあ多少のことは目を瞑ってやろう。俺と組んで行く見込みがあるかどうか、将来性というものを考えてあくまで公平に組むか組まないかを決めようではないか」

まあ組むことはあり得ないけどな。何故なら俺は今まで誰とも噛み合ったことはない。昔パーティーで狩りに行ったことはあるが、射線上に仲間が居てイライラして仕方なかった。そんなわけで俺は根っからのソロハンターだ。当然こいつと噛み合うこともないだろう。つまりこれは出来レース。俺の勝ちは最初から決まっていたのだ。

「では剥ぎ取りをしよう。君も手伝ってくれ」

「まあいいだろう」

それから俺達は黙々と剥ぎ取りを行っていった。

「おっ、岩竜の涙だ」

「なにいいいいい！ー！ー！ー」

なんて運の良い奴だ。十回クエストに行っても一つも手に入らないことも多々ある希少な素材を、たった一回でだど!? あり得ん! 羨ましい!

「む、欲しいのか?」

「べ、別にそんなことはない」

「欲しいと顔に書いてあるぞ? ふふっ、これは君にあげよう」

「何!? い、いいのか?」

「ああ、君に受け取って欲しい」

「そ、そこまで言うなら、受け取るうじゃないか」

「そうしてくれ」

こんな希少な素材をくれるとは、こいつは結構良い奴だな。うん。こいつとならパーティを組んでも……、と危ない! 完全にこいつの術中にハマっていた! 物で釣るとは卑怯な! やはりこいつは人の皮を被った化け物だ! そうに違いない!

「こんな物でお前への評価が上がると思ったら大間違いだぞ! ?」

「そんなことは考えてないよ。これは今日私と一緒に狩りに来てくれた君への純粋な感謝の気持ちなんだ」

「本当にそうなんだな? 後で返せと言っても知らんぞ?」

「ふふふっ、君は本当に可愛いな。そんなことはしないよ。だからどうか受け取ってくれ。そしてそれを見る度に私のことを思い出してほしい」

「それは嫌だ」

とにかく岩竜の涙ゲツトだぜ。

「じゃあ次行くぞ。次のバサルモスは何処だ？」

「次は……、む、そろそろ日が暮れてしまうな。一旦ベースキャンプに戻るう」

「いや、まだ行けるだろ。で、次は何処だ？」

「あああ、見失ってしまったよ。やはりさっきの狩りで疲れてしまったようだ。一旦ベースキャンプへ戻ろう」

「なら俺一人で行く」

「それはダメだ。次は私と一緒に狩りをする事になっていた筈だ」

「ならお前も来い」

「すまないがそれは無理だ。もうクタクタなんだ。だから一緒に戻って休もう」

「そんなことしてたら泊まりになってしまふ。俺は早く終わらせた

「いんだ」

「居場所も分からない獲物を探しても効率が悪い。明日になれば私も回復しているだろう。だから今日は此処に泊まるう。狩りは明日にすれば良いだろう？さあ行こうか」

「待て待て！掴むな！てかお前元気だろうっ！」

「今にも倒れてしまいそうなんだ。だから早く戻ろう」

「嘘をつくなっ！てか引きずるのは止める！分かった！分かったから止めてくれ！」

「では行こうか。ふふふっ」

俺はいつたいこれから何をされるんだ……。

空気男と告白と狩りと卑怯者（前書き）

Q・狩りが短くないかい？

A・仕様です。

日常7割狩り3割でお送りしております。  
戦闘描写の難しさは異常。

## 空気男と告白と狩りと卑怯者

集中、集中だ、集中しろ。

腕の動きと回転速度、全神経を集中させ、それを周りの音すら聞こえなくなるまで研ぎ澄まし、全身全霊を賭けて挑む！

いくぞ！

ちゃんちゃちゃん、ちゃちゃちゃちゃんちゃちゃん、ちゃちゃちゃ、  
ちゃららちゃららちゃららちゃらら、ちゃちゃちゃちゃん

今だ！！

上手に焼けました。

何処からかそう聞こえた気がした。

何してんのかって？肉焼いてるに決まってるだろ。肉の焼き加減が均等になるようにゆっくりとそれでいて焦げないように回し、フィニッシュ時においては立ち上がるのと同時に、腕の角度を意識して一気に振り上げる。これが正しい肉の焼き方だ。

最近はこのが出来ないハンターが多くて困る。マナーというやつを知らんらしい。

焼けた肉を一口頬張る。うむ、うまい。

ウツトラ上手に！焼けました！

「なんだと!？」

隣を見るとアリシアが立ち上がり、美しいフォームで肉を振り上げ

ていた。その手に持つ肉の輝きも合わさって、うっ、美しい……。い、いや、今のは何かの間違いだ！そんなこと思っわけがない！それよりもその手に持った肉。こんがり肉Gだと！？俺でも滅多に出来ないのに。

「私はこれが得意なんだ」

アリシアが手に持つ肉の輝きを見ると、急に俺の方の肉が貧相に見えるてくる。

悔しさが込み上げてくる。なんとも腹立たしい。

「一口どうだ？」

「あ、哀れみのつもりか！？」

「そんなことはない。ただ純粹に、君に食べて欲しいんだ」

アリシアの目は真剣で哀れみとかそんな感じは見られない。本当に俺に食べてもらいたいって感じた。

「な、なら、一口だけ」

「ああ、是非とも食べてくれ」

アリシアに手渡されたこんがり肉Gを一口かじる。口に入れた瞬間に肉汁が溢れだし舌の上で溶けていき、それが心地よく喉に流れていく。

うっ、うますぎるっ！

なんだこれは！？こんなにうまいこんがり肉は初めて食べたぞ！本当に俺の焼いたこんがり肉と同じ肉から出来ているのか！？こいつ

は天才なんじゃないか!?

「どうだろう。お口に合うかな?」

「……………うまい」

こんなものを食わされたら、口が裂けても不味いなんて言えない。言えるわけない。

「そうか!それは良かった。その肉は君が全て食べてくれて構わないよ」

「ん、いいのか?」

「ああ、遠慮することはないよ。その代わりに、君の焼いた肉を私にくれないか?」

「これか?本当にこの肉で良いのか?ぶっちゃけお前が焼いた方がうまいぞ」

「君が焼いたものが良いんだ。ダメか?」

こいつから貰った肉を食わされたら、もう俺の焼いた肉は食えないしな。トレードとしては釣り合っていないが、まあこいつがそれで良いと言ってるのだから良いか。

「ほれ、食いかけだが」

「ありがとう!んぐんぐ」

俺の焼いた肉を嬉しそうに頬張るアリシア。本当に美味しそうに食うな、こいつは。

「うまいか？」

「ああ、君の味がする」

「ぶふう！変な言い方をするなっ！だいたい俺の味ってなんだ！意味の分からんことを言うなっ！」

「美味しいということだよ。それにこれは間接キスというやつだろっ？」

「お前は小学生か！？」

「しょうがくせい？それはどっいう意味なんだ？」

ちっ、こっちの世界の奴には通じないか。

「もういい！その肉を返せ」

「それはダメだ！絶対に嫌だ！これはもう私のものだ！絶対に、誰にも渡しはしない！」

そういつてまた食べ始めるアリシア。クソッ、こうなったら力付くで……は無理か。返り討ちにされるかもしれん。

なんて厄介な奴なんだ。嬉々として肉を食うアリシアを見ながらそう思った。

それから暫くしてお互いに肉を食い終わった。大変、忌々しいことだがアリシアの焼いた肉は旨かったので、さっきのことはチャラにしてやることにする。  
武器の手入れ等も終わって特にやる事も無いので俺は寝ようとしたんだが、

「この先の少し行ったところに温泉があるんだ。一緒に入ろう」

「アホか！何処の世界に狩りの途中に温泉に入る奴がいるか！」

こいつは突然温泉に入ろうなんて言い出してきた。馬鹿なんじゃないか？

いくら此処がモンスターの棲息地から少し離れているベースキャンブだとしても、狩り場には違いないんだぞ？

「此処にいる。心配しなくてもモンスターは来はしないよ。私が保障する」

「お前の保障ほど信用ならんものはないわ！そんなに行きたきゃ一人で行け！」

「そんな寂しいことは言わないでくれ。一緒に行こう。お願いだ」

「嫌だ、断る。……痛い痛い痛い！わっ、分かったから！行くからっ！」

「そうか！良かった！では行こうか！」

「自分で歩くから！歩くから！」

そんな感じで押し切られた俺はこいつと一緒に温泉に行くことになった。てかこいつは結局最後は暴力じゃないか。俺が弱すぎるとか思われると嫌だから言っておく。こいつが強すぎる。

そんなこんなで数分歩くと温泉独特の匂いがしてくる。そして湯気が立つ水面が見える。岩に囲まれていて隠れ家的スポットのような感じがするな。

お湯の温度は少し熱めだが、許容範囲だろう。

「てか本当に一緒に入るつもりなのか？お前意味分かってんのか？」

「分かっているさ。大丈夫、私は気にしないから」

「俺が気にするわ！って、いきなり脱ぎだすのは止める！」

白い肌とかいろいろ見えそうになったので咄嗟に後ろを向く。恥じらいとかないのかこいつは！？痴女なのか！？

「やっぱり俺は戻るぞ！」

「待ってくれ！」

「ばばば馬鹿抱きつくなっ！」

背中かなりのポリウーム感を感じる。なんて大きさだ。

「無理を言っただけだと思っただけだ。これからはもう何もしないから私と一緒に温泉に入ってくれ」

「分かったから離れてくれ！」

結局俺は背中に当たる殺人的圧力に負けて温泉に入ることになった。

「はあー」

溜め息が出る。温泉は確かに気持ちいいが気分は最悪だ。

「そんな端の方に居ないで、もっとこっちに来てくれ」

「アホか」

「なら私がそっちに行こう」

「わっ、分かったから！だからそこから動くな」

少しずつアリシアに近付いていく。アリシアにはタオルを身体に巻いてもらっているから大事なところが見えることはない。何でそんな大きなタオル持って来てんだと言ったら、念のためらしい。何が念のためだ。確実に謀ったなこいつ。なんかもうこいつの手のひらの上で踊らされている感がハンパじゃない。

とにかく今は混浴だと思っただけで乗り切るしかない。

「おいやめろ、隣に来るんじゃない！」

「タオルもちゃんと巻いているから心配することはないよ」

身体に巻いたタオルを押し上げる圧倒的存在感のそれは、否応なしに俺の視線が引き付けられてしまう。こればかりは仕方ない。男とは悲しい生き物なのだ。下半身で生きていっても過言じゃない。

それから暫くの間二人並んで温泉に浸かっていた。

「この前も聞いた気がするんだが、何で俺に付き纏うんだ？俺じゃないといけない理由なんてあるのか？」

これはずっと気になっていたことだ。見ず知らずの男に付き纏い、それだけに留まらず温泉まで一緒に入るといのはただ事ではない。まあそれが普通だとか思ってるのなら本物の痴女だな、こいつは。

「ふむ、そういえば言っていなかったな。……私はパートナーを探していた。それは狩りを共に出来る者であり、日常を共に出来る者であり、人生も共に出来る者だ」

つまり、何時も一緒に居たいの！ってことか。

「お互いに信頼し合い、お互いを高め合える関係。正に今の私と君だ」

「待て待て！何かきつかけとかそんなことがあるだろ普通は」

村でばったり出くわした男に、「君は私のパートナーだそうに違いない」とかあり得ないだろ。そう思ったきつかけがある筈だろ。直

感とか言っなよ？

「私は今まで数多くのハンターに出会ってきた。一緒に狩りに行ったことも多々ある。しかし、そのハンターのどれもが、傲慢で自分の力を過信し、自分より下のランクのハンターを見下したり、果ては私に手を出してこようとするとする下衆な連中だった」

まあハンターってのは皆大小様々だがプライドを持っている。俺だってプライドがあるし、それを他人から見れば傲慢ととられるかもしれない。しかしこれはしょうがないと思う。ハンターというのは、自分の身体の何倍もの大きさの飛竜を狩る。そして飛竜を倒したという達成感とか気分の高揚は、自分がちっぽけな人間だということを忘れさせてくれて自信を付けさせてくれるものでもある。傲慢にもなるかもしれない。

下のランクのハンターを見下すのは、まあ良くないが、そうしなければ自分の力を誇示出来ない者もいる。女に手を出そうとするのは……まあ男の性だ。

「色々な村へ行き、街へ行き、たくさんハンターを見て来たが、その中には私のパートナーたる人物は居なかった。私が見逃して居たのかもしれないが、私の出会った中には居なかった」

「で、何で俺なんだ？」

「うむ。この村に来た時は、この村のハンターにやや失望したよ。他と何も変わらなかった。しかしある噂を耳にした。ハンターに成ってたったの一年足らずで上位の、私に並ぶハンターに成り、しかもその者はソロハンターで私と同じ年だと聞いた。それが君だ」

そんな噂が流れているなんて知らなかった。まあ事実なんだが。俺

は17の時にこの世界に来て、18でハンターになり19で今に至る。かなりのハイスピードで駆け上がって来た。はつきり言って異常だ。これはギルドの記録を一年以上も塗り替えたことになる。普通は三年から四年、それもパーティを組んでだ。ソロハンターでなんて前代未聞も良いとこだ。因みにこの事はシェリーに頼んで公にしないでもらっている。

まあ元の世界ではかなりやり込んでいたゲームだったから、モンスターの弱点部位や習性、攻撃パターンもある程度ゲームと同じで知識としては最初からG級ハンター並みだった。

そしてその知識に身体が追い付く様になり、トリップ特典なのか知らないが俺だけのスキルを身に付けてからは早かった。俺が初心者ハンターだった頃、俺を嘲笑ったハンターはあつという間に俺の遙か格下になり、半年も経たない内に実力的には村で一番のハンターになった。

こうやって聞くとかなり反則的だと思う。しかし苦労が無いわけではなかった。ヘマをやらかして重症を負ったこともあるし、他のハンターの嫉妬などもあつた。早けりゃ良いってわけじゃない。ほんとは色々あつたがあつという間だったな。これも全て自分の順応の早さと運の良さのお陰だな。

それとシェリーのお陰もあるが……今はいいや。

「しかし君の噂は聞くが、肝心の君の姿が見当たらなかった。血眼になって君を探したよ。そして君を見付けた時、君しかいないと思つた。君は私と同じかそれ以上の実力を持ちながらも、その実力に慢心する事もなく格下のハンターを見下すこともない。私にはその在り方こそが本来の狩人の姿だと思えた」

「それは言い過ぎだろ。俺よりも強いハンターなんて結構居るもんだし、格下のハンターを見下したりしないのは特に興味が無いだけだ」

「謙遜することはない」

「してねーよ。で？そんなことで俺に付き纏う様になったのか？」

「それだけではない。何より私の興味を惹いたのは、君はどのハンターよりも異質だったことだ。私が君を見つけた時、君に声をかけようとしてふとした瞬間に君の姿を見失ってしまったことがある。それから君を探し続けたが、何かの拍子に君の姿を見失ってしまったことが何度もあった。私は生き物の気配には敏感なんだが、君の気配はなかなか掴めなかった。目の前に君が居るのに、気配が分からないんだ。こんなことは今までになかったことだ」

まあスキルを発動させた俺を見付けるのは至難の業だ。

しかし今ではこいつは俺を簡単に見付けられるようになってるのはどうということだ？進化したのか？

「だから君の行動パターンや性格などを事細かに分析し、分析に分析を重ね、今では直ぐにでも君を見つけられるまでになったよ。だから君は絶対に私から逃げられない、逃がさない」

ちよ、ちよっと待って待ってくれ！

俺のことを分析だと！？

しかも逃げられない逃がさないとはなんだ！？怖すぎだろ！

「詳しく言っと、村の人から君の情報を集めたり、君の後を付けたり、家に侵入したり」

「お前何てことしてくれてんだっ！」

「済まなかったと思っている。だが君のことを調べずには居られなかった私を許して欲しい」

「許してって言うか犯罪だろが！」

後を付けられてるなんて全然気付かなかったぞ！？こいつの方が気配消すの上手くないか？

「君に興味が沸いて、溢れる好奇心を抑えきれなかったんだ。そして君のことを調べている内に君に惹かれていき、気付いたら君のことが」

「黙れ黙れ黙れっー！それ以上喋ることは許さん！」

こいつをこれ以上喋らせたらなんかヤバい気がする！取り返しのつかないことになる気がする！

「む、これだけは言わせてくれ。私は君のことが好」

「やめろ！喋るな！言葉を発するなっ！」

「何故だ？私はただ純粹に君のことを愛」

「やめろっつてば！頼むからそれ以上は言っな！」

「むう、仕方ない。この場ではこれ以上は言わないよ」

「この場じゃなくてももうやめてくれ。そして俺に付き纏わないでくれ」

「それはダメだ。それに明日の狩りで必ずや君のパートナーの座を勝ち取ってみせる！」

「お前という奴は……」

「顔が赤いぞ？照れてるのか？君は可愛いな」

「のぼせたただけだ」

それからなんとかベースキャンプに戻り就寝した。アリシアが抱きついて来たがどうせ何を言っても聞かないだろうから好きにさせた。自棄になっていたのかもしれない。

「頂上付近に居るようだ」

「ん、クーラードリンク飲んどくか」

翌日の早朝、俺達は狩りを再開した。早朝なんて関係無しに火山のフィールドは熱い。年中無休で火山活動してるからだ。少しくらい休めばいいのに。

クーラードリンクを一气飲みする。相変わらず苦い。味を見直すべ

きだ。

クーラードリンクを飲むと一気に体温が低下し火山の灼熱のフィールドでもいつものように活動出来るようになる。ついで頭にもぶっかけておく。そのくらい熱い。

行く手を阻むイーオスなんかを撃ち殺し斬り殺し俺達は進み、火口が見えるようなところまで登ってきた。

そしてそのフィールドの真ん中にある不自然に突き出た岩。バサルモスだろう。

「準備はいいか？」

「ああ、いつでも良いよ」

なら、こいつとの最初で最後の狩りを始めますかね。

俺はペイント弾を装填しようとし、こいつが居るならペイントしなくていいか、と思い直し足下の石を拾って岩へと投げつけた。

勢いよく地面から現れるバサルモス、それよりも速く俺はスキルを発動させた。いつも通りの行動だ。別に発動させなくともいけるけど、一応真面目にやる。来ると分かっている攻撃と、何処から来るかも分からない攻撃、どちらが効果があるかは明白だ。それはモンスターにとっても同様。

バサルモスが咆哮し、それを耳を塞いで耐える。緊急回避とかバックステップの無敵時間なんて存在しない。これは現実だ。ついでに裸で狩りに行くやつも居ない、はず。

バサルモスが長ったらしい咆哮を上げる中、アリシアが抜刀しバサルモスの腹を斬り付ける。腹を薄く斬り付けられたことで、咆哮するのを止めたバサルモスは、毒ガスを噴出するがアリシアは既に下がっている。

俺は貫通弾を装填し、バサルモスの腹に速射。三発の貫通弾は一直線にバサルモスの腹に直撃し、その岩の様な身体に穴を穿ち、肉を

貫く。更に速射機能をOFFにしてもう一発。計四発を叩き込んだ。その攻撃を受けてもバサルモスは俺を発見出来ずアリシアに対して攻撃をする。アリシアはその攻撃が来るのが分かっているかの様に躲しつつも俺の射線に入ることには無い。

バサルモスの注意が全てアリシアに向いているのを良いことに、俺は次々と貫通弾を放つ。そしてそれが腹を覆う岩の一部を吹き飛ばし、アリシアはすかさずそこへ太刀で鋭い突きを繰り出す。その一撃が赤い血を撒き散らし、堪らずバサルモスは仰け反る。

その隙にアリシアはもう一度太刀突き刺す。バサルモスはその短い尻尾を振り回しアリシアを吹き飛ばそうとするが、既にそこにアリシアは居らず、そこへ俺が放った貫通弾が飛来し剥き出しになっている腹の肉を貫く。

俺の弾丸がバサルモスの隙を作り出せばアリシアがそこへ鋭い一撃を、そしてアリシアが引けば俺が放つ幾つもの弾丸がバサルモスを襲う。

バサルモスの腹を覆っていた岩はもう殆ど残っておらず、大きく腹の肉が露出し血が吹き出している。

いつの間にか自分が笑っているのことに俺は気付いた。

狩りとは殺し合い、命のやり取り。そしてそれはいつでもモンスターとの真剣勝負。それを軽んじている訳ではない。こいつと、アリシアと俺が噛み合い、何も言わずともお互いがお互いをフォローし、モンスターを追い詰めて行くことが、楽しいと思えた。それは狩りの中では初めて感じたことだった。

いつも程よい緊張感と殺意を持ち、ただ淡々と相手を死へ追いやるのが俺の狩りだった。いつからそうなったのかは分からないが、それが狩人だと、それが俺の狩りだと思っていた。そう思いたかったのかもしれない。

たった一人で狩りをするよりも、仲間と共に巨大な飛竜を倒し、

その喜びや苦勞を共感し合い、お互いを称賛し合いたかったのかも  
しれない。それが、それこそが俺の望みだったのかもしれない。

こいつとなら、もしかしたら……。

その時、バサルモスの僅かな隙に反応したアリシアが気刃斬りを放  
った。その激しく鋭い剣戟に堪らずバサルモスがたたら踏む。

しかし今のはアリシアらしくない攻撃だ。結果的には大きなダメー  
ジを与えられたが、反撃を受ける可能性もあった。

ミスか、と思った時アリシアはこちらを見て笑っていた。その意味  
が分からなかった俺だが、少ししてそれを理解した。

こいつ、俺を挑発してやがる！

こいつは、自分にはこんなことが出来る、君に出来るか？と言っ  
ている。俺の実力が、俺の狩りがその程度かと言っているのだ。

上等だ。

俺は、俺だけに与えられた、俺の象徴ともいえるスキルを発動する  
事を“止めた”。

アリシアはその俺の行動に目を見開き、それと同時にバサルモスは  
俺を発見し、突進の態勢をとり、俺に向かって走り出す。

しかし俺は避けずに撃つ。撃つ撃つ撃つ。

血を撒き散らしながらも止まることのないバサルモスをギリギリま  
で引き付けると、一気に横へ身体をおもいっきり転がして避ける。

回避距離と回避性能を向上させるナルガクルガの素材で造られた防  
具があればそれは容易いことだ。

そしてそのまま地面に片膝を付けながら後方のバサルモスに向かっ  
て相棒を構える。

銃は俺の一部であり、俺は銃の一部。俺の指は引き金を引く為の

み動き、俺の目は獲物へと狙いを定める為にのみ存在する。  
そこから放たれる無数の弾丸はまるで嵐。風を切り裂き、音を切り裂き、瞬く間に獲物へ着弾する流星。  
それは一方的で、無慈悲で、正確無比な命を刈り取る射撃。  
それが終わる頃には、バサルモスの目には力は無く、その巨体を地に預け、命の灯火は消えていた。

その後、興奮した様子のアリシアが押し掛けて来て「私の目に狂いは無かった」とか「特に最後は素晴らしかった。濡れry」とかひたすらに俺を褒めちぎり、痴女的発言をする程に興奮していた。

「もう分かったから、少しは落ち着けっ！」

「あ、ああ！そうだな！うん」

漸く落ち着いた様子のアリシアは、一度咳払いをすると改めて俺へと向き直った。

「君の実力を引き出す為とはいえ、君に無礼なことをしてしまった。済まなかった」

そう言ったアリシアは俺に対して深く頭を下げた。律儀な奴だ。

「別に気にしてないからいい。お前が無意味に俺を挑発したりしないことぐらい分かってる」

「そう言ってもらえるとありがたいよ、でだ」

真剣な表情で俺を見つめるアリシア。それはとても真剣で、目を反らすことは出来そうにない。

「君は今日の狩りでどう感じた？私は今日の狩りで、私には君が必要だと再確認した。君こそが私に足りないものだと思った。君はどうだった？」

「俺は……、まあ、お前と組んでみて悪くは無かったよ」

こんな言い方しか出来ない俺は、我ながら素直じゃないなと思う。

「それは本当か!？」

「あ、ああ」

「そうか!そうか、ふふっ、ふふふっ」

いきなり笑い出したアリシア。何だこいつ。

「いやなに、君が私と同じ思いを感じてくれたことが嬉しかったんだ。だから、つい。ふふっ」

恥ずかしい奴だ。なんかこっちまで恥ずかしくなってきた。ひとしきり笑い終えたアリシアがまた真剣な表情で俺を見つめている。さつきとは違いその目には少しばかりの不安が見え隠れする。

「私はこれから先も、君と、君と組んでいきたい。君のパートナーに成りたい。私のパートナーに成ってほしい。君と狩りや日常を共にして、苦楽を共にして、君の隣で、君と同じ景色を見て、君と同じ思いを感じたい。だから、私と組んでほしい」

本当に、恥ずかしいことをペラペラと口にする奴だな。どう答えるべきか、悩んでいる様にしてみせるが、本当は答えなんてとっくに出てる。ただそれを言う勇気が無いだけ。

「私は君と組んでいきたいが、それを決めるのはあくまで君だ。君が決めてくれ。私は君が決めたことに従う。それが例え私とは組めないという結果に終わっても、恨んだりはいしない」

……こいつはやっぱり卑怯だ。ここまで言われて断れる奴が何処に居る。ここまでこいつに言われて俺があっさり断ったんじゃあ力ッ  
コ悪すぎる。

もしかして狙って言ってるのか？まあ、何にしても……、

「はあー、お前には負けたよ」

「そ、それは、つまり、私と組んでくれる、と？」

「ああ、俺の負けだよ」

負けた負けた、完敗だよ。こいつにしてやられた。最初から最後までこいつのペースだったのだろう。

でも不思議と悔しいとかいうのはないな。まあこついうのも悪くない、か。

「ふっ、ふふっ、ふふふっ」

突然アリシアが下を向いて身体を震わせながら笑い出した。何だこいつ。遂におかしくなったのか？

しかし次の瞬間凄まじい勢いで俺に向かって突撃し、首に抱きついてきた。くっ、首がっ！

「やった、やったぞ！私は！遂に！君を手に入れたんだ！」

「はっ、離れる！死ぬっ！」

「こっ、これで！私達は！恋人同士だ！！」

「それはおかしいだろうっ！てかホントに離れるって！」

人の話し聞けよ！てか恋人っておかしいだろうっ！ただ狩りで組むっただけの話しだっただろ！話しが違うぞ！そしてマジで離れるやっ！殺す気かっ！

それから暫くしてやっとアリシアの興奮も治まり、漸く俺は解放された。久々に死ぬかと思った。もうダメかと思った。

「ゲホッ、ゴホッ。おっ、お前は！俺を殺す気かっ！？」

「そ、それについては深く反省している。君と恋人同士になれたのが、嬉しくて……っい」

「っい、で殺されてたまるか！てか恋人同士ってなんだ！？そんな

の聞いてないぞ!？」

「む、往生際が悪いぞ。君は私と組んでくれると言った。それは私のパートナーになるということだ。すなわち恋人だ」

「だからそこがおかしいだろ!話しが飛びすぎだ!そんな話しならお断わりだ!」

「なっ!?!君は約束を破るといふのか!?!」

「だから恋人とかそんなのは約束に無かつただろうが!」

「それは君が勘違いをしていただけだ!私は最初からそのつもりだった!」

「そんなの知るか!てかお前一度も恋人とか言っていなかっただろが!」

「そ、それは少し恥ずかしかったから……。そのくらい察してくれ!」

「ふざけんな!何が恥ずかしかったからじゃボケッ!今回の話しは無しだ!」

「なんだと!君は確かに負けたと言った!敗者である君は勝者である私に従うのが道理だ!」

「そもそもの約束がおかしいのだからそんなもんは無効だ!」

「な!?!卑怯だぞっ!」

「お前に卑怯なんて言われたくないわ！」

「君の方が卑怯だ！」

「お前の方が卑怯だろ！」

「いや君が！」

「いやお前が！」

それからお互いに卑怯だ卑怯だと罵り合う声が火山に響き渡った。  
俺達は何をしてるのだろうか……。

空気男と告白と狩りと卑怯者（後書き）

バレルとアリシアはG級一歩手前という設定。

## 空気男と乙女心（前書き）

Q・この話はそんなに必要なのか？狩り関係無くないか？

A・次の話までの繋ぎという名の時間稼ぎです。

今回の話は一度書き直したので遅くなりました。最初に書いてたのがあまりに酷い修羅場で、5話目でこれはヤバくねーか？と思い書き直しました。

出来るだけコメディでいきたいんです。

## 空気男と乙女心

狩り場に居るにもかかわらず、お互いにお互いを卑怯だ卑怯だと大声で罵り合うという何の生産性のない行為を俺達は続けていた。馬鹿なんじゃないか、と言われたら顔かざるをえない。

そして数分後、俺達は……、

「はぁー、はぁー、おっ、お前の、方が、卑怯だ」

「ふうー、き、君の、方が、ふうー、卑怯だ」

まだやっていた。

もはや何でこんなことをしているかも覚えていない。ただ相手の方が卑怯だと認めさせなければ腹の虫が治まらないのだ。これは意地なのだ。

しかしここで卑怯卑怯と相手を罵り合ってもキリがない。

そしてまだこいつとの勝負は終わってはいなかった。これからが本当の勝負だ。

実力行使で勝てない以上、言葉という名の弾丸で撃ち倒すしかないのだ。弱点を狙い撃つのだ。

……こいつの弱点って何？

「先ほども言ったが、君は私と恋人同士になるべきだ。その義務が君にはあるんだ」

「そんな義務がある筈無いだろ。元々の約束はハンターとして組むか組まないかというものだっただろ？恋人うんぬんはお前の後付けだ」

「それは違う。パートナーになるということは恋人同士にもなるということなんだ。それを都合の良いように君が解釈していただけだ」

「都合の良いように解釈していたのはお前の方だろ。てか自分でおかしいこと言ってるって分かってないのかお前は」

「おかしいことなど何も無い。とにかく君は私と恋人同士になるべきなんだ。ならないとダメだ」

「いやいやアリシアさんよ、それはおかしいだろうよ。そもそも」

と、まだ俺が言い終わらない内に、アリシアが目を見開かせながら一気に顔を近付けてきた。

何だこいつ、普通に怖いぞ。

「き、君は、い、今、なんと言った」

「おかしいだろうよ？」

「違う、そこじゃない。わ、私のことを、アリシアと、名前で」

何だ何だ？名前で呼んだらなんかあるのか？

「まあ確かに呼んだが、それが何だ？」

「も、もう一度、呼んで欲しい……」

やけに顔を赤くしながら自分の名前を呼んでくれと言つたアリシア。  
まあ別に名前を呼ぶくらいならいいが……。

「アリシア？」

「う、うん」

顔を真っ赤にしながら頷くアリシア。ゆでダコみたいだな。元が白  
いから余計に赤く見える。  
しかし、これはもしや。

「アリシア」

「う、うあ、な、なんだ？」

今度は耳まで真っ赤に染まる。むむ、こいつまさか。

「アリシア」

「だっ、だから、なんなんだ!？」

首まで真っ赤になる。これは決定的だ。

「アリシア」

「だ、だから、……う、うう」

なにこのかわいいいきもの……。

顔中真っ赤、てか全身真っ赤っかになったアリシアは、さっきからうーうー唸っている。

なんだこいつ。今まで散々恥ずかしいこと言ったりやったりしてきたくせに、名前呼んだだけでこんなになりやがって。可愛いじゃないか……。い、いや、今のは何かの間違いだ。とにかくこれは使える。

勝てる！勝てるぞ！俺は魔法の言葉を手に入れたぞ！

「なあ、アリシア」

「う、うあ！な、なんだ？」

「俺達、お互いに言っていることが食い違っていると思わないか？ そうだろ？アリシア」

「あ、ああ。私は君の恋人になれたと」

「だが俺はお前とハンターとしてパーティを組むということだと思っただけだ。恋人同士になるなんてことは知らなかったんだ。これは本当なんだ、アリシア」

「うう、で、でもそれは君が勘違いをしていて……」

勘違いなんてしとらんわ！勘違いしてんのはお前だろ！つと言いたいところだが、これを言うともたさっきみたいになるので言わない。あくまで冷静に対応する事が大事だ。最後まで冷静だった方が勝つんだ。つまり勝つのは俺だ。

「じゃあ百歩譲って俺が勘違いをしていたとしよう。しかしその勘違いの原因は、アリシア、お前が恋人とかそういう直接的な表現を

用いなかったからじゃないか？パートナーと言われても、ハンターとしてのパートナーという認識しかないのは仕方のないことなんじゃないか？アリシア」

「うう、それは……、確かに、そうだが……」

そうだそうだ。そうだぞアリシア。俺は悪くないんだ。悪いのはお前なんだぞアリシア。お前はそれを自覚するべきなんだ。

あれ？なんか俺最低っぽくない？んなわけないな、うん。ないない。

「だが、き、君は、私に負けたと」

まだ食らい付いて来るかこいつは。しかも何だ。今さら勝負に勝った負けたの話しを掘り起こすとは。

あれか？とにかく私は勝ったから約束うんぬんは置いといて恋人になれ、ということなのか？何その理論。頭弱くなったか？

「そもそも、勝った負けたで恋人同士になるといっなのはどうなんだ？アリシア。恋人とは勝負に勝てば得られるものなのか？そんなものが許されるのなら、じゃんけんの勝ち負けで恋人同士になる奴らとかいるんじゃないか？アリシア」

「そ、それは言い過ぎだと思うが……。だが、私達の勝負は、お互い合意の上での」

「それは勘違いだったとさっき言っただろ？アリシア」

「う、うう、だが、それでも私は、君と」

まだ反論してくるか。本当に粘り強いなこいつ。俺相手にここまで

粘ったことは称賛してやろう。  
しかし、これで詰みだ。

「例えばだ、アリシア。例えばお前とパーティを組たいと迫ってくる男ハンターが居るとしよう。お前はその男ハンターのことをあまり良く知らないが、実力もありパーティを組むならやっていけると思えたので、お前はその男ハンターと組むことを了承した。しかしその男ハンターは突然、『パーティを組んだということはお前は俺の恋人になったということだ』などと訳の分からないことを言ってきた。そして当然お前はそんなことは聞いていなかったし、知らなかった。お前はそれに素直に頷けるのか？アリシア」

「そ、それは、……無理だ」

言い終わるなり顔を下に向け肩を落とすアリシア。残念だったな。冷静な思考が保てなくなった時点でお前の勝ち目はゼロに等しかった。とにかくなんとかあったな。

しかし乙女心を利用するとは、我ながら最低な手口だな。  
だがとにかくこの勝負は俺の勝ちだ。この勝ちは大きいぞ。

「わ、私は君に、そんなことをしていたんだろうか？訳の分からない女だと、君の目にはそう映っただろうか？」

涙目になりながら聞いてくるアリシア。てか今にも泣きそうだな。女の涙はさすがに心に訴えかけてくるものがあるな。ここで肯定して泣かせるほど俺はそこまで鬼じゃない。泣かせるのはまずいと思うし、泣かれても気分が悪い。

「いや、簡単にまとめて言えばこうだって話した。それに男と女が入れ替われれば色々違ってくるものだしな」

「じゃあ、君は、私のことは嫌ってない、ということの良いのだろうか？」

「あ、ああ、嫌ってはいないぞ、アリシア」

涙目のアリシアに上目遣いで見つめられると、さすがに嫌いとか言えない。いや別に嫌いじゃないんだけどな。てか「私のことが嫌い？」と聞かれて、「嫌いだ」と答える様な酷い男じゃないぞ俺は。それに好きか嫌いかで言えば、まあ好きな方に入るだろう。それは友達とか仲間としての好きだが。普通にすれば案外こいつは良い奴だからな。

「私は、嫌われて、ない。うん、嫌われてない、嫌われてないんだ」  
嫌われてない嫌われてないと自分に言い付ける様に何度も繰り返すアリシアを見ると、な、なんだか胸が締め付けられる様な、物凄い罪悪感を感じる。

「じゃ、じゃあ、恋人になるというのは別にして。ハンターとしてなら、パートナーになってくれるということだろうか？その気持ちは、まだ、変わっていないだろうか……？」

「え？ああ、そうだな。何だかんだ色々と言ったが、俺は元々そのつもりだったし」

「そ、そうか！じゃあ私と組んで欲しい！」

「ん、まあ、よろしくな」

「ああ！」

俺の言葉に満面の笑みを浮かべるアリシア。やっぱりこいつはこいつい  
う顔をしてた方が良いな。

「それとだな。これからは、私のことは、その、アリシア、と名前  
で呼んで欲しいんだ」

なにこのかわいいなまもの……。

ってヤバイヤバイ。

危うく洗脳されるどころだった。確信犯か？いや違うっばいな。

無意識の内に人を洗脳しようとするとは、油断も隙もない奴だな。

いや、まあ、少しは可愛いと思うんだがな。

「まあ、いいぞ」

「そ、それじゃあ、私も君のことは名前で呼ぶことにする。……バ、  
バれりゅ、や、やっぱり無理だ、あうあうあう」

人の名前を噛んだ挙げ句勝ってに自滅しやがった。

何がしたかったんだこいつは。俺は本当にこいつと組んでいって大  
丈夫なのだろうか。かなり心配になってきた。

「おっ、また岩竜の涙だ」

「何だとおおおお……！」

討伐してからずっと放置してたバサルモスから素材の剥ぎ取りをしていると、アリシアがまた岩竜の涙を剥ぎ取りやがった。こいつ昨日の今日でまたそんな希少な素材を手に入れたのか!? あり得ないだろ!

やっぱりこいつは何かおかしいぞ。激運付いてもこうはいかんのだる。

家に帰ったらこいつのアイテムボックスの中を見せてもらおう。何かとんでもない素材が入っているような気がする。大量に。

「む、これはもしかして……」

「何だ? どうした?」

アリシアは手に持った岩竜の涙を見て何かを考えている。何だいらないのか? だったら俺にくれ。昨日貰ったけど。

「君に昨日一つあげただろう?」

「まあ貰ったが。何だ? 返して欲しいのか?」

俺は返さんぞ。嫌だぞ。貰った物は俺の物だ。そもそも譲渡契約に基づいてだな……、と、この世界では通用しないのか? いやさせてみせるぞ。裁判では俺が勝つぞ。

いや、裁判も無いのか?

「そうではないんだ。君も一つ持っていて、私も一つ持っている。つまりこれはお揃いの物ということだ!」

「それが何だ」

「君とお揃いの物ができて嬉しいんだ。それに今日は君とパーティを組んだ日だ。記念の印にこれは大事に保管して置こう。うんうん」  
恥ずかしいことを平然と言うアリシアは、何度も頷きながら大切にうに岩竜の涙をしまった。

だがちよつと待て、その理論でいくと俺が持つてる方も保管して置かねばなんなのか？こつそり売ったらダメか？ダメなのか？

こんなこと聞いたらさすがにアリシアもキレそうだから言わないが、俺は空気は読めるんだぞ、……空気男だけに。

火山に居る筈なのに寒く感じた。

「じゃあ帰るぞ」

そろそろ我が家のアイルー達が恋しくなってきた。癒し分が足りない。

竜車に揺られること半日。漸く村に帰って来れたぞ。なんかもかなり疲れたぞ今回の狩りは。狩りとほぼ関係無いところで。

そしてその疲れの原因のアリシアは俺の隣でこれからのことについてあーだこーだ言ってる。

曰く、「これからは狩りでも一緒に居られるんだな！」とか「そしていずれは……ふふふ」とか後半がちよつとヤバい気がするが、も

うめんどくさいからいいや。

なんか結局はこいつの思い通りになったような気がしてきた。恋人うんぬんは何とかなかったが結局はこいつと組んでるし。

だが前衛が居るとやはり後衛は動き安いということが分かったな。アリシアが注意を引き付けてくれれば俺はほとんど撃ち放題だ。

しかしそれだとアリシアの負担がやや大きくなるので、今日みたいに俺もスキル無しで戦うことを考えた方が良さそうだな。それか、出来ればあともう一人前衛が欲しいところだが、もうこの村のハンターにろくなのは残ってないから期待しないでおこつ。

そんなことを考えて居るといつの間にか集会所、ハンターズギルドの前まで来ていたのだが……。

「やけに静かだな……。いや、静かすぎる」

まるで葬式のように静まりかえっている集会所。灯りは付いているから誰かしらは居るんだろうが……。

かつて此処がこれほどまでに静かになったことがあっただろうか。葬式してても此処だけは騒いでいるぐらい不謹慎な場所何だが。

今はもう夜だしいつもなら宴会状態になっている筈だがこれ如何に。

「おお、バレルよ。やっと帰って来たか。どうかシェリーを何とかしておくれ」

そう言つて俺の前に現れたのは子供程の小ささの老人。このハンターズギルドのギルドマスターであり、この村の村長でもあるお方だ。そして俺の恩人でもある。

当然その発言力も強く、俺に対してもそれは変わらない。まあこの人には頭が上がらないんだよ、俺は。

それでシェリーが何だつて？

「シェリーがどうかしたんですか？」

「百聞は一見に如かずじゃ。とにかく見てみた方が早い。もうわしの手にはおえん」

よく分からんが扉の隙間からちょっと中の様子を確認してみる。シエリーは何処だ？と探してみるといつも通りにカウンターの中に居る。居る……が、ヤバい。かなりヤバい。

静寂という言葉が相応しい集会所の中で佇んでいるシエリーは、全くの無表情であり不動。しかしその身体には赤いオーラが纏われていて、ヤバい。とてもじゃないが近付ける状態じゃない。シエリーはいつたいどうしたんだ？おかしいぞ。

かつてこのようなシエリーを俺は見たことが無い。

「ど、どうしたんですか、シエリーは」

「わ、わしには分からん。昨日からずっとこうなのじゃ。お主は何か心当たりはないかのう？」

昨日から？ずっと？心当たり、心当たり。……あるな。

『バレル、帰って来た時どうなっても知りませんよ？』

……言ってたな、そんなこと。

お、俺のせいなのか！？待て待て、じゃあシエリーはあんな風に昨日から俺を待ち構えて居るといふのか！？

ま、まずいぞ。今のシエリーと面と向き合って話すことなど到底無理だ。不可能もいいとこだ。どうすればいいんだ。

「心当たりがあるようじゃな？」

「……………はい」

「ならば責任を持ってシエリーを元に戻すのじゃぞ？わ、わしはちと腰が痛くなったでな、家に帰ることにする」

村長は颯爽と走り去った。何て速さだ。腰の痛みはどうしたというんだ。

てかやつぱり俺が何とかしないとイケないのか？無理だよ。無理無理。

「どうしたんだ？中に入らないのか？」

「いやちょっと待てアリシア。ちょっと待つんだ」

「あ、う、うん。待ってる」

名前呼んだだけでこんなに従順になるとは。案外扱い安い奴なのか？いや今はアリシアより、シエリーだ。シエリーを何とかしなければ。とにかく話し合いに持っていければ何とかなるだろうか？

そうなるとアリシアが居るとややこしいことになりそうだな。先に家に帰らせよう。

「今日はもう疲れただろう？だから先に家に帰って休んでいていいぞ、アリシア」

「い、いやしかし、そんなに時間は掛からないだろう？なら」

く、素直に従うんだアリシア。それが俺の為になるんだ。

「えーと、あれだ、お前に家で待っていて欲しいんだ、アリシア」

「わ、私に、待っていて、欲しい……。う、うん、分かった。家で待って居ることにする」

そう言つて家へ向かつて歩き出したアリシアは、時折チラチラとこちらに振り返つては顔を赤くするという、見ているこっちが恥ずかしくなることをしてくれたが、何とか帰ってくれた。

ちよつと苦しかったが何とかアリシアを帰らせることが出来たな。扱ひ安い奴で助かった。

「よし、これであとは」

「あとは、何ですか？バレル」

「シエリーを元に……。や、やあシエリー」

音も無く背後に現れたシエリー。全く気付かなかつたぞ。

そんなことよりもシエリーがヤバい。さっきよりも赤いオーラが三割増しだ。てかこれはあれか？鬼人化なのか？あれつてかなり体力使つんじゃないか？それと俺の命が危なくないか？

「私がどうかしましたか？」

「い、いやあ、シエリーは今日も綺麗だなと」

「ありがとうございます。貴方でもそんなことを言つたのですね。明日は雨でも降るのでしょうか。それより」

それより、と続け目を細めるシェリー。お世辞も通じないというのか。いや、鼻屑目無しにシェリーは綺麗だと思つが。とにかくさらにオーラが増した気がする。はつきり言つてヤバい。何かを間違えたら取り返しのつかないことになりそうな雰囲気醸し出していらつしやる。

「随分と、仲良くなつたようですね、彼女と。貴方なら一日で終わらせられた内容の狩りを、わざわざ一泊して、今頃帰つて来る程ですから、さぞかし仲良くなれたのでしょよね」

ヤバいやバいやバい。

やっぱり昨日の内に狩りを終わらせて帰つておくべきだつたんだ。シェリーがかなり誤解しているぞ。

俺とアリシアにはシェリーが想像している様なことは何も無かつた筈……、何か一緒に温泉入つたり寝たりした記憶があるな……。あ、ちよつとヤバいかも知れない。

「それに、さっきのあれは何ですか？まるで恋人同士の様な雰囲気でしたが、私の気のせいなのでしょう。私は貴方が間違いを犯してしまつたのではないかと思つていますが、どうなんですか？」

「ご、誤解しているぞシェリー。お前の想像しているようなことは、俺とアリシアには何も無かつたんだ」

いや、ちよつとは有つたかも知れないけど、間違いとかは犯してないよな？多分。うん、黙つとけば大丈夫大丈夫。

「それなら、この二日間のことを私に話してくださいませね？事実を、事細かに、詳しく、全て話してくれることを私は期待しています……、もし、もしもの話ですが。もし貴方が私に嘘を付いたり、

何か隠していたりした時は、それが後になって判明した場合、……  
……殺す」

「……はい、分かりました……」

無理無理、無理だ。

シエリーは本当に殺るつもりだ。本物の殺気を感じた。俺が嘘を付いたり隠したりしたらマジで殺すつもりだよこの娘。

だから、全部話してしまった。もう洗い浚い、根掘り葉掘り、一から十まで、包み隠さず全部話した。  
もう自棄になって話した。

「……という訳で、アリシアと組むことになった、ん、だ」

何とか話し終えたが、ヤバい、シエリーがヤバい。シエリーの目が俺を殺さんばかりに睨み付けている。あまりの恐怖で身体が震える。俺は此処で殺されてしまうのか？

「……貴方という人はああああ!!」

「ま、待ってくれ!早まるなシエリー!」

「そんなにあの女が良かったのですか!!胸ですか!?!あの馬鹿みたいな大きさの胸が良かったのですか!?!」

「おっ、落ち着いてくれ!」

「よくも、よくも恩を仇で返してくれましたね!!貴方という人はああああ!!」

「そ、それについては本当に悪かったと思っている！俺が悪かったから落ち着いてくれ！！」

こんなシエリーを見たのは初めて、ていうかこんな大声を出しているところを見たのが初めてだ。相当怒ってるってことなのか！？あと、ここで言っている恩というのは、今まで俺がシエリーに対しての借りがあるということだ。

俺が初心者ハンターだった頃は金に困っていて、そんな時にシエリーが内緒で報酬を上乗せしてくれたり、素材の中でも良い部分をくれたりしてくれたことがある。

そして最近ではナルガクルガのクエストのことがある。ナルガクルガは最近発見された飛竜ということで、ハンター達はこぞってそのクエストをやりたいと考える。その理由は、ナルガクルガの素材から造られる武具が欲しかったり、力試しがしたい等と様々であるが、かなり競争率が高いことは明白である。

そんな中俺はというと、シエリーにダメ元でナルガクルガのクエストを確保して欲しいなどという無理なお願いをした。

しかしシエリーはそんな俺の無理なお願いに対して、嫌な顔一つせずにあしらってくれた。シエリー曰く、「貴方はこのギルドの看板ですから、この程度なら大したことはありませんよ」と言っていたのだが、きつと無理をしてくれたに違いない。

そしてそんなシエリーに対して、俺はほとんど借りを返すことが出来ていない。

つまり、ヤバイ。

「貴方がこんな風に私を裏切るとは！恩を仇で返すとは！飼犬に手を噛まれるとはこの事です！！」

「いや俺は犬じゃな」

「黙れ、犬」

「……………」

何かもう泣きたい。

てかどんどんシェリーの性格が変わっていくぞ！？これが地じゃないよな？

いつものあの穏やかな笑みを浮かべたシェリーは何処に行ってしまったのだ。

早く何とかしないと、俺も昨日の男ハンターのように壁に突き刺さることになってしまう。絶対に嫌だ。

「こ、今回の件に関しては全面的に俺が悪かった。だっ、だから今までの分も合わせて埋め合わせをさせてくれ！頼む！」

「埋め合わせ？それは具体的に何をしてくれるのですか？」

「え？あ、ああ、えーと……………」

埋め合わせという言葉に食い付くシェリー。ここで半端なことを言ったら殺される気がする。

どうしよう。全然考えてなかったんだが。何かシェリーを満足させられる様なことはないか？何かないのか？

「何ですか？埋め合わせというのはどういうものなのですか？早く答えなさい」

「そ、そうだな。なら、俺に出来ることなら何でも」

「何でも？今何でもと言いましたか？言いましたね？言ったと言い

なさい」

「い、言った。うん」

「何でも、何でもですか……」

何でもという言葉を聞いてからシェリーはブツブツと何かを言っているが、何を言っているかは分からない。とりあえず怖い。

「ふう、仕方ないですね。今回のことは、まだ完全に許した訳ではありませんが、まあいいでしょう」

「ほ、本当か？」

「ええ。ただし、何でも言うことを聞くということをお忘れなく」

「あ、ああ、分かった」

何だが良く分からないが何とかなつたみたいだ。もう絶対シェリーだけは怒らせないようにしなければ。もうこんな事は懲り懲りだ。

そうなるとアリシアをどうにかして調き、もとい、躰けをしなければいけないな。元はと言えばあいつのせいでもあるだろう。いや、少しは俺のせいでもあるんだけどな。

それより、何でもすると言ってしまったが、何をさせられるんだろうか。ヤバいことは嫌だな。

でもシェリーは基本的には良識ある聡明な娘であるから、そんな酷いことはさせられることは無い、筈だ。

……不安だ。

結局あの後には普通に報酬を受け取って家に帰って来た。シエリーの様子はいつもと変わらない様だった。集会所のハンターと村長がかなり安堵してた。

そしてやっとこさ帰って来た我が家の様子なのだが……、

「それで、私は彼と組むことが出来たんだ」

「さすが姐さんニヤー！」

「凄いニヤー！」

「それだけじゃなくて、彼がな、私のことを、名前で、アリシア、と、呼んでくれる様になったんだ」

「やったニヤ姐さん！」

「そ、それに、さっきはな、私に家で待っていて欲しいと言ってくれたんだ。これはもしかして……」

「もしかして何なのニヤー!?!」

「何なのニヤー!?!」

「つ、妻だと、認められたんじゃないだろうか？」

「うニヤー!? 本当かニヤー!？」

「凄いニヤ姐さん!」

「旦那さんもやるニヤー!」

「やはり君達もそう思うか? 私もそうだと思っていたんだ」

「そつに違いニヤいニヤー!」

「そつだニヤー!」

「やはりそつか……!」

「ニヤーニヤー!」

誰かこいつらを止めてくれ……。

## 空気男と乙女心（後書き）

あともうすぐで3rd発売ですがこの小説に3rd要素を入れるか悩みどころです。3rd要素を入れていけるシナリオも結構考えられているんですが、そうなると長編になりそうな予感。そんなに長くする予定は無かったので需要があれば続くかも知れない。それか3rdは3rdで新しい小説を書くか。

**空気男と毒怪鳥と現実として存在する村（前書き）**

かなり更新が遅れてしまい申し訳ないです。

Brdも一応一段落したのでこれからは執筆に専念できる、かもし  
れません。

一応かもと付けて逃げ道を確保させていただきます。

## 空気男と毒怪鳥と現実として存在する村

「うっ……、痛い……」

「当然の報いだ」

「痛いニヤー」

「鬼だニヤー」

「悪魔だニヤー」

「まだ言うか貴様等、罰が足りない様だな」

「ニヤー、ごめんなさいニヤー」

馬鹿な妄想を膨らませて居たアリシアに拳骨を一発くれてやり、それを助長していたアイルー共にも一匹一匹拳骨を食らわせてやった。割と本気で、しかも防具着けたまま。さぞかし痛いだろう、良い気味だ。

この俺がいつまでもこいつ等に屈していると思ったら大間違いだ。暴力に頼るのはどうかとも思うが、言っても聞かないこいつ等には身体で分かせた方が早いのだ。あと殴った方がスッキリするし。

「とにかく、今後そのぶざけた妄想をするのは止める。特に公共の

場でそんなふざけた妄想を垂れ流しおつたらタダじゃ済まさん。分かったな、アリシア」

「ううう、分かった……」

「貴様等もだ。アリシアを煽って馬鹿な妄想を膨らませるのは止める。次やったらマタタビ無しだ」

「ニヤー！？殺生ニヤー！」

「酷いニヤー」

「鬼畜だニヤー」

「やはり反省していない様だな。これはマタタビは無しだな」

「ニヤニヤー！？ごめんなさいニヤー！」

「ごめんなさいニヤー！」

そんなにマタタビが大事かね。物の価値は人それぞれか、いや、アイルーは人じゃなかったな。

とにかくこれで一先ずは大丈夫だろう。

思えばもっと俺が強気に出てこいつ等をコントロールするぐらいしとかないといけなかったのかもしれないな。

これからはそこら辺に気を付けてこいつ等をきちんと管理する必要があるな。

「分かればいい。とりあえず飯だ。俺は風呂に入って来るから上がる頃に頼む」

「分かったニヤー」

「なら私も」

「そうやって馬鹿な行動をしようとするのも禁止だ」

何当たり前の様に着いて来ようとしてんだこいつ。馬鹿なんじゃないか？

「そんな……！昨日は一緒に入ってくれたじゃないか」

「あれが最初で最後だ。分かったらおとなしくしてろ」

「うつつ……、それじゃあ、君が寝ているベッドに入ることもダメなのか？」

「当たり前だろ！常識で考えろ！」

「そんな……、なんてことだ……」

まるでこの世の終わりを見たかの様に絶望しているアリシア。こいつの頭の中はいつたいたいどうなっているんだ？常識無いのか？

とにかくこいつと誤解されるようなことをするのはヤバい、危険だ。何が危険なのかは分かっているとと思うが、シエリーだ。

シエリーをこれ以上怒らせると次は本当に殺されるかもしれない。てかもう怒ったシエリーは見たくない。あれは心臓に悪い。

「そもそも、そういうのは、あー、あれだ、恋人同士がやるものであって、俺とお前はそういう関係じゃないんだから、そういう周り

に誤解される様なことをするべきではないんだ」

「君が私の恋人に成ってくれれば良い。それなら問題ない筈だ」

「だーから、恋人にはならんって何度も言わせるな！」

「じゃあ、どうすれば君は私の恋人に成ってくれるんだ？」

眉を八の字にして上目遣いに俺を見つめてくるアリシア。

くっ、狙ってやってんじゃないよな？

実に遺憾だが、こういうちよっとした仕草に女を感じてしまう。俺も結局は男だからな。

だから強くは言えないのは仕方ないことなんだ。そうだと思わせてくれ。

「まあ、あれだ。お前と、あー、恋人に成っても良いとか、その、成りたいだとか、す、好き、とか、そういう気持ちが高まったら、まあ、恋人に成る、……かもしれないな」

「そ、それは本当か！？本当なんだなっ！？」

「あ？あー、そう、かもなあ」

「そうか！……ふふふ、ならこれからは……、それから……、いや、これなら……！」

あ、何かミスツたかも。

絶対こいつ自分の都合の良い様に解釈してる。

てか何て恥ずかしいことを言ってるんだ俺は。完全にこいつに乗せられてるんじゃないか？

いや、俺は可能性の話をしただけであって、こいつとそういう関係に成る気なんてこれっぽっちも無いぞ？無いったら無いんだぞ？そう、俺は可能性の話をしただけなんだ。それをアリシアがどんな風に解釈しようが、俺がなびかなければ問題無い。かなり苦しいかな、この言い訳。

「何にしても！これから抱きつくやら、ベッドに忍び込むやらは絶対にするなよ？いいいな？」

「むう、非常に残念だが仕方ない。しかし、これだけは言わせて欲しい」

「ん、何だ？」

「私は君のことが好きだ。愛している」

「ぶふうっ！な、何言ってるん」

「だから、絶対に、必ず！君を振り向かせてみせるっ！」

言うだけ言ってアリシアは部屋に戻って行った。何て奴だ。

全くどうしてこう恥ずかしいセリフをポンポン吐き出すのか。恥ずかしいとは思わないのか。

しかし、面と向かって、あー、好きだ、とか、えーと、あ、あい…だとか言われると、まあ何だ？ちょっと……、いかにいかに！これではアリシアの思いつぽではないかっ！

奴はその恥ずかしい言動で俺を混乱させるつもりだった様だが、そうはいかんぞ！

とにかく風呂だ風呂！風呂に入ってさっぱりして気を静めるのだ！

それから風呂に入って湯ぶねに頭まで浸かってたらのぼせた。

「ゲリヨオオオオオスツ！！」

「全く、うるさいな」

「ふふっ、相当お怒りの様子だが、どうする？」

「どうするも何も、倒すのがハンターだ」

そう言っただけで会話を止めた俺達は前方の飛竜に向け武器を構えた。

ちなみに今はあれから三日経っていたりする。キングクリムゾンと言われても仕方ない。

この三日間は比較的平和だったと言えるだろう。アリシアが暴走する事も無かったし、そろそろ来ると思っていたシェリーの要求もまだ来ていない。

集会所で今回のクエストを受注する時にアリシアとシェリーが小競り合いをしていたが、今までに比べるとおとなしいもので周囲に被

害も無かった。これからもこうであって欲しいものだ。

そして今回は毒怪鳥ゲリヨスの討伐だ。

その為に沼地と呼ばれる泥沼と洞窟があるフィールドに来ていた。足下がねちゃねちゃして気持ち悪いが、我慢だ。ハンターとは忍耐力も必要なのだ。

そして毒怪鳥ゲリヨスは読んで字の如く毒の有る怪鳥だ。

ゲリヨスがその口から吐き出す毒は猛毒で知られており、早急に解毒薬を飲まねば死に至る程のもので、当然俺達も念のため解毒薬を持って来ている。備えあれば憂いなし。

そしてゲリヨスは毒だけでなく、その頭頂部にあるトサカを打ち合わせることで強烈な閃光を出し、その閃光を食らったハンターは三半規管を一時的にマヒさせられて行動不能に成ることもある程だ。

その閃光は瞼を閉じる程度では到底防ぎようもないもので、武器でガードするのが一般的だ。

しかし、俺の武器のライトボウガンとアリシアの太刀はガードをする事の出来ない武器なのでこの方法はとれない。

ならどうするか？と言われれば

「まずはトサカを壊すぞ」

「分かった！」

そう、先にトサカを壊すという方法だ。

トサカが無ければ閃光は出せないのでトサカを集中的に狙って破壊するのが定石。

あとトサカが付いていると言うことでゲリヨスをにわたりの的なものと想像する人も居るかもしれないが、怪鳥と言われるだけあって、やや、いや大分違う。

太い両足はかなり硬く、そこを狙っても弾かれることもある程。  
そして全身を覆うゴム質の皮が特徴的で、ハンマー等の打撃攻撃はダメージに成りにくく、雷属性の武器も効果が薄い。腕と一体化した翼もそれで覆われている。

あとこれは俺が個人的に思っているだけで誰しもがそう思っている訳ではないのだが、ゲリヨスの顔の、人間で言う鼻の部分の形があれだ、……男性器に見えてならない。

いや全く不謹慎な発言だったと詫びるべきだな。済まない。

しかしそういう風に見るとそれ以外には見えなくなるので厄介だ。

そういえばゲリヨスの主食はキノコだから顔にも立派な松茸が

と、いかんいかん。

これ以上は流石に控えるべきだな。俺の思い込みに違いないんだ。そうなんだ。

とにかくゲリヨスというモンスターは毒を吐いたり閃光を出したりと中々トリッキーなモンスターだと言えるだろう。

そして今回俺達が相手にするゲリヨスは、通常の紺に近い色のゴム質の皮を持つものではなく、紫のゴム質の皮をもつ亜種だ。

当然だが原種よりも強力な個体であり、数も多くはない。

その分その素材は原種のものより高値が付くし、良質な武器や防具となるだろう。

そしてこのクエストは緊急クエストと呼ばれるもので、早急に討伐または捕獲が必要なモンスターを狩猟するというもの。

それは村の近くに迫って来ているモンスターだったり、多くの人間に被害を出している飛竜の討伐等様々な理由が挙げられる。

今回は村の近くまで迫って来たゲリヨスを討伐するというものだな。そして緊急クエストは、報酬も通常より割高だ。

てかそのぐらい無ければ沼地何てフィールドには個人的には来たくはない。

此処で戦闘を行えば必ずと言って良いほど身体中泥だらけになるの

は必至だ。

仕方のない事だと分かってはいるが、それでも汚れるの嫌だ。武器や防具の整備は大変だし。

とにかく、狩りに集中しよう。

俺は通常弾LV2を装填しゲリヨスのトサカに照準し速射する。

三発の通常弾LV2が俺の予測通りの弾道を描いてゲリヨスのトサカに直撃するのを見届けると、こちらに突進してこようとするゲリヨスを見て回避行動をとる。

回避後にまたトサカへ通常弾LV2を速射し破壊を狙う。

アリシアの方はゲリヨスのトサカへ一太刀くれてやり、ゴムの様に伸び、しなる尻尾の攻撃を危なげなく回避する。

そして今度は紫のゴム質の皮で覆われた身体へ大きく太刀を振るい、飛竜刀【楓】が爆炎を発生させゴム質の皮を焼き切る。

今回のアリシアの武器は鬼神斬破刀ではなく、ゲリヨスの弱点の火属性を持つ飛竜刀【楓】だ。

リオレウスの素材で作られた強力な火属性を持つ太刀で、赤い刀身が特徴的だ。

飛竜の弱点属性を突くのはハンターの常套手段であり、その為になんかの属性の武器を持っていても何らおかしいことはない。

俺も他に幾つかボウガンを持っているしな。

それにゲームと違って武器も防具も壊れない何てことはなく、普通に壊れる。

まあそんな簡単に壊れるものでもないし、壊れても修理出来るがな。

アリシアが鋭い斬戟を放つ度にゲリヨスの身体から鮮血が吹き出し、刀身から発生した爆炎によりさらにダメージを与えていく。

それを横目に、俺は淡々とゲリヨスのトサカに弾丸を放ち、直撃した弾丸が二十を越えた辺りでゲリヨスのトサカが壊れた。

「ゲリヨオオオオオツッ！！」

自慢のトサカを破壊されたことで怒り状態に成ったゲリヨスは、毒を撒き散らしながらフィールドを走り回る。

俺達はそれに動じることはなく、毒や突進、ついでに攻撃を躲し隙をみせるのを待つ。

そして走るのを止めたゲリヨスにアリシアが急接近し、その身体を大きく切り裂き、俺の弾丸が頭部に次々と直撃する。

そしてそれがトドメとなったのかゲリヨスは地に倒れ伏したが、

「はいダウト」

俺は倒れたゲリヨスを撃った。

「ゲリヨオオオオオツッ！？！」

たちまち叫び声を上げて起き上がるゲリヨス。

今のはゲリヨスの得意技の一つである死んだフリである。

これを使って、倒したと油断したハンターを襲ったりする姑息な手段だ。実際にこれを食らうハンターも居る。

まあ俺には通じないがな。経験とか勘とかで分かるもんだ。

それにこのゲリヨスは上位のゲリヨスだからな。まだ死にはしないだろう。

起き上がったゲリヨスに対し俺達は攻撃を再開した。

そしてアリシアの斬戟と俺の銃撃がゲリヨスの身体を切り刻み、穴を穿ち、血を撒き散らせ、次第に追い詰めていく。

俺達の息の合った連携により、ゲリヨスはまともな反撃も出来ずに痛みへのた打ち回る。

ほんと皮肉なもんだが、アリシアと俺はかなり連携がとれてるんだよな。何でだろ。

アイコンタクトとかで大体アリシアが何しようとしてるか分かるし、アリシアも分かっているみたいだ。

そんな訳で、かなりスムーズに狩りが行える。だからどうって訳じゃないけどな。

まあ言わなくても分かるってのは楽だから良いか。

そんなことを頭の片隅で考えながらも、攻撃の手を休めることはなく、ゲリヨスは再び地に伏した。が、

「ダウト」

「ゲリヨオオオオオオ！?!?!」

何度やっても無駄だということが分からんのか、鳥頭め。

しかし死にマネを何度も繰り返すのは体力が残り少ない証だ。

もうすぐで墜ちるだろう。

そしてアリシアの気刃斬りをまともに受けたゲリヨスは今度こそ起き上がることは無かった。

試しに頭に一発通常弾撃ち込んだので確かだ。俺は用心深いのだ。

そしてこれは必要なこと。

俺達は狩人、狩る側の者なのだから。

「では次だが」

「おい、まだあるのか？勘弁して欲しいのだが」

「そう言わないでくれ。で、次だが」

ゲリヨスの狩猟を終え、今は竜車に乗って村まで帰っている最中だ。沼地から村まではそこまで遠くないので、あと三時間かからない程度で着くだろう。

そして今は隣に座っているアリシアから質問攻めにあっていた。

その内容は、好きな食べ物何か、とか、趣味は何だ、とか、好きな女性のタイプは、等々どうでも良いものから答えづらいものまで色々あった。

俺はその質問を武器や防具に付いた泥等を落としながら適当に答え、答えづらいものについては黙秘するか躲すかしていた。

それで何でこんなに質問攻めにされているかと言うと、アリシア曰く「私達はもつとお互いのことを知り合うべきだ。だからお互いに相手について知りたいことを質問し合おう」ということらしい。

そこで俺はアリシアについて特に知りたいこともないので、さつきからアリシアが俺に質問し続ける形になっている。

「てか、一々メモなんか取らなくて良いだろ」

アリシアは俺の返答を聞く度に忙しくなくペンを走らせ、それを逐一メモしていく。

俺としては適当に答えているだけなのだから、そんなに必死にメモ

されても困るのだが。

「ん？ああ、これが。大丈夫、君の言った言葉は今までの分も合わせて全て頭に入っているから心配しないでくれ」

いや、そんな意味で言ったんじゃないんだけどな。  
てかそれならメモする必要何てないんじゃないか？

「これは君の言葉を文字として残しておこうと思って書いているものだ。そしてそれだけではなく、君の観察につき、あ、いや何でもない。忘れてくれ」

「お前今何を言おうとした？ちよつとその紙を寄越せ」

こいつ今とんでもないことを口走らなかつたか？  
観察日記と言っただろ、絶対そうだろ。

まさかこいつ俺の観察日記何てもんを作ってやがるのか？もしそんなものが存在するのならば早急に消し炭にする必要性大だ。

「これはダメだ。絶対ダメだ」

「いいからちよつと見せろ」

「嫌だ。とにかくダメなんだ」

「言うことを聞けアリシア」

「う、だつ、ダメだ！」

そう言ったアリシアは紙を小さく折り畳むと、それを谷間の中に入

れて隠した。

なんてことをしゃがるんだこいつは。こいつの胸の大きさなら確かにそれが可能だが、何て奴だ。

「そんなに見たいなら、君が此処から取り出してくれ」

「んなこと出来るかつ！」

クソツ、なんて奴だ全く。痴女だろこいつ。

とにかく諦めるしかないか。いや、観察日記と呼ぶくらいだから本か何かに書いているのだろう。

そしてそれはアリシアの性格から考えて厳重に保管されている筈だ。多分家の中の何処かにあるのだろう。

ならば家に帰ったら徹底的に家の中を搜索し、見つけ次第燃やしてくれるわ。

「さあ、早く」

「しないと言ってるだが、自重しろ」

「あつっ」

なおも胸を俺に寄せて来るアリシアに拳骨を食らわせて黙らせる。

痴女め。そんな誘惑に負ける俺ではないぞ。

「君は私に冷た過ぎると思う」

「お前が馬鹿なことをするからだ。それに馬鹿な行動をするのは禁止だと言っただろ」

「うっ、それじゃあ次の質問だが」

「おい、まだ何か聞くつもりなのか？もう俺は何も答えんからな」  
こいつに新たな情報を与えてなるものか。

「それなら、君が私に聞きたいことは無いのか？」

「観察日記とやらは何処にあるのか言え、アリシア」

「い、言わないぞ。それはダメだぞ」

ちっ、そう易々と口を割らんか。

こっとなつたら意地でも見つけ出して消し炭にしてくれるわ。

「誰にも見せるつもりはないから安心してくれ。それより、私に聞きたいことはないのか？」

安心してくれと言われても、自分のことについて書かれているようなもの、しかも書いてるのはアリシアなのに安心出来る訳がないと思うのだが。

まあそれは家に帰ってからにするか。こいつは絶対言わないだろうし。結構頑固だからな。

それにしても、アリシアに聞きたいことが……。よく考えてみると知らないことばかりだな。

大して興味はないがこの機会に聞いてみるかとするか。

「お前は何処の村の出身何だ？」

「言っただけでなかつただろうか？私はポツケ村の」

「ポケケ村だっ!？」

「ん?ポケケ村を知っているのか？」

「あ、ああ。少し、な」

こいつマジか!?マジであるのポケケ村出身なのか!?なんということだ!

ポケケ村はこの世界の元と成っている俺の元居た世界の大人気ゲーム、モンスターハンターポータブル2nd・2ndGにおいて登場する村であり、そこを中心にハンターとして活動していく、言わば物語の中心にある村だ。

この世界に来た時からあるだろうとは思っていたが、本当に存在するとは。

「そうか!でな、ポケケ村は

」

アリスアは自分の故郷を俺が知っていると聞いて、嬉しそうにポケケ村について語り出した。

俺がゲーム上の知識として知っているポケケ村と、アリスアが語るポケケはほぼ同じで、村付近に雪山があり雪に囲まれた村であること等々、ほぼ同一であるとみて間違いない。

この分だとココット村やジャンボ村も存在するのだろう。行ってみたいものだな。

「ふふふ、それにしても、君がポケケ村のことを知っているとは。嬉しいよ」

満面の笑みで嬉しさを表すアリスア。

それにしてもこいつがポツケ村出身とはなあ。何があるか分からん世の中だ。

「そうだ！今度私の里帰りも兼ねて、一緒にポツケ村に行ってみないか？案内させて欲しい」

「あー、そうだなあ、まあ行ってみるのも良いかも知れないな」

「本当か！絶対だぞ！」

こんなことを言っでは居るが、ぶっちゃけかなり行ってみたい。かなり興味がある。

ゲームの舞台となった村を実際に歩いてみるというものは非常に興味深い。

ああ、今から楽しみだ。

そんな感じで村に着いた俺達は、またまた集会所へとやって来た。まあ当たり前のこと何だがな。クエスト受注するのも此処だし、報酬を貰うのも此処だ。

そんな訳で集会所の扉を開けて中に入る。

周囲の視線が俺達、主に俺に突き刺さるのは、もう慣れた。しかしそれとは別にアリシアを見て悲鳴を上げるハンターも居た。この前の集会所での騒動でアリシアに殴られた酔っぱらいハンターだな。トラウマにでもなったか、可哀想に。同情はしないがな。

周囲の視線を振り払いながらカウンターにいるシェリーの所まで進む。何も起きませんように。ちょっと祈っておく。

「おかえりなさい、バレル。今回はちゃんと早く帰って来れた様で何よりです」

「あ、ああ、ただいまシェリー」

シェリーのご機嫌は悪くないようだ。

こうやってシェリーのご機嫌を伺ってしまったのは、怒ったシェリーに苦手意識が芽生えているからである。恐怖しているとも言つ。

「その女との会話など不要だ。早く報酬を受け取って私達の家に戻る」

俺の後ろからアリシアが余計なことを言いだす。頼むから黙っててくれ。

今ちよつとシェリーがピキツとなったのが分からないのか？

「また貴女ですか。いい加減バレルに付き纏うのを止めたらどうですか？」

「君の方こそ、彼が怯えているのが分からないのか？彼が可哀想だ」アリシアの言葉を聞いたシェリーはジロリと目だけを俺に向ける。

身体が震えそうになるのを必死で抑えて首を横に振り否定する。アリシアさん本当に頼むから自重してくれっ！

視線を俺からアリシアに戻したシェリーは、アリシアを睨み付ける。それに負けじとアリシアもシェリーを睨み返す。

辺りに不穏な空気が流れ始めたのを感じたのか、集会所に居たハンター達は急いで集会所から出ていく。

この前の二の舞になるのを恐れたのだろう。正直俺も逃げ出したい気持ちでいっぱいだ。

誰かこいつらを止められる猛者は居ないのか？やはりこの村のハンター共は腑抜けばかりか？

そうなると俺が止めるしかない。てか原因が俺だし……。鬱に成りそうだ。

「あー、シエ、シェリー？報酬の方を受け取りたいのだが」

シェリーに対してかなり下手に出て言う俺。これ以上無いってくらい良い判断だと自分でも思うんだが。

てかこれ以外思いつかん。

俺がそう言ってから数秒程睨み合っていた二人だったが、少ししてシェリーが睨むのを止める。

「そうでしたね。こんなどうしようもない人に構っていても仕方ありませんから」

「なんっ」

「うんうん、その通りだな」

なんだとっ！と食って掛かろうとしたアリシアの口を手で塞いで黙らせる。

むーむー唸っているアリシアだが、ほんとに黙れ。

「これが今回の報酬ですね」

「ああ、ありがとう」

何とかシェリーから報酬を受け取った。これで後は家に帰るだけだ。癒しが欲しい。かなり切実に。

家に着いたら徐々にアイルー達の肉球をぶにぶにさせてもらおうかな。あれはかなり気持ち良いんだ。

そうと決まれば長いは無用だ。アリシアが暴れだす前にさっさと家に帰ろう。

「じゃあ、またなシェリー」

「はい。……ああそうでした、これを言うのを忘れていました」

「ん、何だ？」

帰り際にシェリーが何かを言おうとするのを見て、家へと踏み出そうとしていた足を止める。

「後で貴方の家に行くのでそのつもりで」

「え、な、何故に？」

「ダメなんですか？」

「ダメに決まっている」

いつの間にか俺の手から抜け出たアリシアが口を挟む。てかいつの間！？

「貴女は口を挟まないで下さい。ダメなんですか？バレル」

「だ、ダメな訳ないだろ」

此処でダメと言えたらどんなに楽だろうか。いや、家に来るのは別に構わないが。理由はこれ如何に？

「そうですね。それではまた後で」

「ああ、また後でな。ほら、帰るぞアリシア」

とにかく今は家に帰ろう。

俺はなおもシェリーに食って掛かろうとするアリシアを連れて家路を急いだ。

シェリーは俺の家に来て何をするつもり何だろうか。

## 空気男と毒怪鳥と現実として存在する村（後書き）

作者にはゲリヨスの鼻的部分が○んぽに見えてなりません。

それは違っつて人も居ると思いますがち○ぽに見えて仕方ないんです。

もつとも、代表的なちん○モンスターのフルフル様の陰に隠れていて目立たないだけなのかもしれません。

次話はシェリー無双になる、かも。

空気男と不公平と初夜？（前書き）

シエリー無双とか言っておきながら無双出来てるのかわかりませんが、作者的には出来てないかも。

てかもう誰がヒロインだかわからない。

あと詰め込みすぎた感が否めないですね。

## 空気男と不公平と初夜？

「いいか君達、これから来る女は敵だ。全力をもって排除するのだぞ」

「敵ニヤ！？」

「は、排除ニヤ！？」

「そつだ。遠慮はいらない、存分に」

「何を言ってるんだお前はっ！」

「うきゅっ」

やっと家に帰り着き、アイルー達の出迎えを受けていた俺とアリシアだが、アリシアがまた馬鹿なことを言いだした。とりあえず拳骨を食らわせて黙らせる。

そんなにシエリーが嫌いなのかこいつは。

俺としては女同士仲良くしてもらいたいのだが、女同士というものはよく分らない。分からんったら分からん。

「馬鹿なことすんなって言っただろっが。そしてアイルー達に変なことを吹き込むな」

「うっ、しかし」

「しかしもかかしもあるか、おとなしくしてろや。それとお前達、今から来るのは客だ。失礼のない様にな」

「お客さんかニヤ？分かったニヤ」

考えてみるとアイルー達はまだシェリーに会ったことが無いような気がするな。

シェリーが俺の家に来るのは今回が二度目で、一度目はこの家に住みだしてまもなくだったか。様子を見に来たとかそんな理由だったな。

そういえばこの家に住むのを勧めてくれたのもシェリーだったな。ハンターに成って暫くしてから、金もまあまあ貯まってきたのもあって家を探していた時にシェリーがこの家を勧めてくれたんだっけか。

それまでは村長の家にお世話になっていたが、いつまでもそうしているのは生粋の日本人気質の俺には忍びなく、そろそろ独り立ちしようとしていた時にシェリーが相談に乗ってくれて、この家を紹介されたんだった。

この家は大きさの割には値段も手ごろ、といっても相場がよく分かっていなかったから交渉や手続きはシェリーに任せっきりだったがな。

そういえば大家が涙目だった様な……。何をしたんだ、シェリー……。

ま、まあそんなこんなでこの家に住むことになったわけだ。

今考えてみるとシェリーには世話になりっぱなしだな。シェリーが怒るのも無理はなかったかもしれん。

……これは本当に何でもやらなければならぬかもしれないな。覚悟だけはしとこう。

てかシェリーが来たらアリシアと衝突するのが目に見える。本当にめんどくさい奴らだ。特にアリシア。どうにかならんものか、胃が痛くなってきた。癒しが欲しい、切実に……。

癒し、癒しと言えば、

「サクラ、ちょっと」

「ニヤ？どうしたのニヤ旦那さん」

トコトコと寄って来る一匹の桜色のアイルーは、総勢16匹居る我が家のアイルーの中でも特に良い毛並みをしていて、俺の癒し要員の筆頭である。桜色の毛並みだからサクラという安易な名前だが……。

このアイルーをネコ婆に紹介された時は、身体に電流が走った様にビビツときたものだ。

そして俺の方に寄って来たサクラをなでりなでり、とこれでもかと撫で回す。

背中の方はサラサラしていて指通りが良く、お腹の方の毛は柔らかくて、触っていてとても気持ちが良い。

そして極め付けはその肉球。それは触るとぷにぷにされていて、柔らかさと心地よい弾力を兼ね備えている。

この感触は例え様がないな。凄まじい癒し効果だ。麻薬の様な中毒性すらあるかもしれん。

本当、アイルーを雇って良かった。

「うニヤー、くすぐりたいニヤー」

サクラが気持ちよさそうに喉をゴロゴロと鳴らす。かなり癒される。

本当にこのアイルーという不思議生物は興味深いな。あとでサクラにはいつもの二倍マタタビあげよう。

そしてそんな時、食い入る様にこちらを見つめていたアリシアが一言、

「……………ずるい」

「は？何がだ？」

ずるい？何がだ？

「その子ばかりずるい。私も君に触って欲しい」

またアリシアが訳の分からないことを言いだしやがった。てか変態っぽいぞ。

ほんと何言ってるんだこいつ。絶対頭おかしいぞ。

「何で俺がお前何か触らなきゃいかんのだ。馬鹿なことを言っな」

「でもずるいじゃないか、不公平じゃないか」

「ずるいも不公平も無いだろ。ちょっと撫でてただけだろ」

「じゃあ私も撫でて欲しい。抱きしめて欲しい」

「だからそついう馬鹿なこと言っなって言ってるんだろが！」

「でもずるい、不公平だ」

ずるいだの不公平だのをガキの様にガタガタとぬかすアリシア。何かムカついてきたな。

「黙れや」

「あつっ」

とりあえず拳骨を落としておく。黙らせるにはこれが一番だ。

「旦那さん！姐さんを苛めたらダメなのニャー！」

「いや、苛めて無いだろ。これは躡けた」

「し、躡けニャー！？でも姐さんが泣きそうなのニャー」

「うっっ、痛い、ずるいい」

アリシアを見るといつの間にか涙目に成っていて、今にも涙が零れ落ちそうだ。

いやいや、そんなに力を入れて無いから泣く程痛くはないだろ？女を本気で殴るほど落ちぶれてはいないぞ？

「あー、泣くなよ。そんなに痛く無かつただろ？」

「うっっ、でも、ずるいい」

まだ言うかこいつ。そんなに悔しいのか？

こんなことで泣く程悔しがるとかおかしいだろ。アイルーに嫉妬するってなんだよ。

しかし泣くのは止めて欲しい。さすがにそれは罪悪感がある。

「ほら、泣くなよ」

仕方ないのでちょっとだけ頭を撫でてやる。

むむっ、これは……！

紫色のセミロング位の長さのアリシアの髪は、サクラの毛並みには劣るが、艶やかでサラサラしていて、触っているとなかなか気持ち良い。

俺が撫でてしていると、アリシアの白い肌がどんどん赤らんでいく。ちょっと面白いな。

でも俺はナデポもニコポも持って無い筈なんだが。アリシア限定か。あー、そういや好きだとか言われたっけなー。

アリシアはさっきまで泣きそうだったクセに、今は真っ赤に成っている。忙しい奴だな。てか泣いてないならもういいだろ。

「はい終わり」

「え、もう終わりなのか？もう少しだけ……」

「終わりと言ったら終わりだ」

「うっ、じゃあ次は、こっ、ぎゅっ、としてくれ」

「誰がするかっ！終わりだって言ってるんだろ！」

今度はハグを求め出すアリシア。調子乗ってるんじゃないか？

てかハグはダメだろ。何考えてんだこいつは。シェリーに見られてもしたら命は無いぞ。

あー、そうだ、今からシェリーが来るんだった。本当にどうしょ。そんな時、ドアがコンコンとノックされた。

「お客さんが来たのかニヤァ？」

言ってる傍から来やがったか。

アイルーが玄関の扉を開けると其処には金髪碧目の黄色いメイド服を着た女性、シエリーが居た。

てかシエリーは常時メイド服なのか？

ああ、多分仕事をちよつと抜け出して俺の家に寄ったくらいなのだろう。

てか何でギルドの受付嬢はメイド服何だろうか。大長老の趣味？いやこの世界ではメイド服が正装なのか？分からん。

まあ何にしてもそんなに時間はかからずに済む用事なのだろう、……いやちよつと待て、何だその後ろの大荷物は。

「シエリー、その荷物は……？」

「私も今日からこの家に住むことにしました」

「なに！？？」

「なんだとっ！？？」

俺が叫ぶのと同時にアリシアも叫ぶ。

いやちよつと待て、待ってくれ！何でそんな突拍子もないことを言うんだ！？

シエリーが此処に住むだと！？何故に！？いやいやそれはダメだろう。

冗談かと思っただが、シエリーの口元は笑っているが目は笑っていない。

つまり、マジだ。

「まさかダメとでも言うつもりですか？」

「当たり前だっ！」

「貴女は黙っていて下さい。ダメとでも言うつもりですかバレル？」

「いや、それは、ダメだろう？常識的に考えて」

ただでさえアリシア一人に苦労しているというのに、さらにシェリーが加わるだー！？

この二人が一緒の家で暮らしていて何も起こらない筈がない！またこの前の様に騒ぎを起こすに決まってるじゃないか！

単純に考えて俺への負担が倍以上になる。もの凄く嫌だ。

それに美女二人と一緒に家に住んでいる男なんて、周りからどんな目で見られるか分かったもんじゃない。

アリシア一人でも結構な騒ぎになったのに、そこにシェリーが加わったら、闇討ちされて殺されるかもしれないぞ、マジで。

アリシアもシェリーも見た目は美人と言って間違いからな。村の男共に人気があるんだ。

ここは俺の平穩のためにはシェリーを住まわせる訳にはいかないのだ。

「つまり、アリシアさんは良くて、私はダメ、ということですか？」

「え、いや、それはだな……」

それを言われると何も言えなくなってしまふ。

まさかシェリーも不公平だ何だと言うつもりなのか？

そもそも何で俺はアリシアを家に住ませているんだらう。

何かなし崩しの感じだよな。てかアリシアを追い出せれば全て丸く治まりそんな話じゃないか？

でもアリシアの執念は凄まじいものがあるからなあ。

「ダメに決まっているっ！！」

「一々口を挟まないでもらえますか？いつまで経っても話が進みません。それで、どうなんですかバレル？私はダメなんですか？」

何て答えにくい質問なんだ。

世間一般から見ればダメに決まっているが、既にアリシアが住んでるからなあ。それにシエリーには借りがあるし。

もしかしてこれが何でも言うこと聞くとかいうことなのか？マジか？今まで散々シエリーに世話になってる俺が言うのも難だが、そんなのありか？

「それに、貴方達が間違いを犯さぬ様に監視するという大義名分もあります」

「いや、こいつとそんな関係になるつもりはないんだが」

「私もそんなことはあり得ないと信じていますが、万が一というものがありません。それに貴方が襲われる可能性だってあるんですよ？」

「……流石にこいつもそんなことはしないだろう？」

「そっ、そうだっ！私はそんなことはしないぞっ！！」

「……………」

全く説得力が無いな。何か心配になってきた。そもそもアリシアの方が力が強い訳であるし、こいつの変態性からみてもあり得ないとは言い切れ無い。てか女に襲われて抵抗出来ない男って……。何だか自分が情けなくて仕方ない。

いや、でも、流石にそんなことはしないだろ。頭撫でただけで真っ赤に成るような奴なんだし。

「騙されてはいけませんよ。彼女は貴方を尾行したり、果ては家中に侵入していたそうではありませんか。ハッキリ言って危険極まりないです」

「……そう言われてみると、そうかもなあ」

あれ？アリシアが一気に危険人物に見えてきた。

こいつって結構ヤバイ奴なのか？何だかんだでやってることは変態の所業だし。

そんなヤバイ奴と一緒に暮らして大丈夫なのか俺は。

「私は絶対にそんなことはしない！信じてくれっ！！」

「彼女の言っていることは嘘ですよ。信じてはいけません」

「嘘なんかじゃない！確かに今までの私はそんなことをするような人間だったかもしれない。でもこれからは違う！改心するからっ！」

「口ではこう言っているも、人はそう簡単に変わるものではありません」

「黙れっ！君に私の何が分かると言っんだ！」

「貴女の全てが理解不能です。故に危険だと言っているんです」

ちよつと待て待て待て。このまま行くとヤバい展開に成りそうな気がするぞ。

てかシェリー、言ってることは正論だがアリシアを追い詰めるのは止めてくれ。

頭に血が上った人間は何をしでかすか分からないものなんだ。そしてその被害を被るのは主に俺なんだ。

何にしても結局は俺が仲介に入らないといけないな。

「二人共もう止めてくれ。本当に落ち着いてくれ、頼むから」

「だが！」

「落ち着けアリシア。もう分かったから」

「私は改心する！これは本当なんだ、信じてくれっ」

「それはもう分かったから。だから落ち着けアリシア。それとそういうのは言葉じゃなくて態度で示せ、分かったな？」

「うっ、分かった……」

落ち着いたか？これで一安心だな。

まあアリシアもこう言っているし、多分大丈夫だと思う。

本当に二人共仲良くしてもらいたいんだが、この二人は根本的に合わないのか？売り言葉に買い言葉だ。

何とか成らないものか。

「甘いですね、本当に貴方は甘いです」

「まあそうかもしれないな。自覚はしているよ」

「ふう、仕方ないですね。その甘さは貴方の悪い所でもあり、良い所でもありますからね」

「一応褒め言葉として受け取っておく」

「ふふっ、それでは、荷物を運びたいので手伝ってもらえますか？」

「ああ、……って本当に此处に住む気なのか？」

「最初からそう言っているではありませんか。まさか冗談だと思いですか？」

「いや、しかしなあ……」

俺への負担がなあ……。何とかならないものか。  
そんな煮え切らない俺の態度を見たシェリーは、僅かばかり俺を睨み、ぼつりと、俺だけに聞こえる様に一言、

「何でも」

「うっ」

つまり、お前何でも言うこと聞くって言っただろさっさと私の言うことを聞け！ということだな。

ここにきてやはりそれを持ち出してくるか。容赦無いな。

どうしよう、と言っても拒否権何て無いからな……。

「はあ、分かったよ」

「そうですか！では早速荷物を運んでしましましょう。それに模様替えもしなくては、貴方の家は少しばかり殺風景ですからね。あとは」

「もう好きにしてくれ」

あー、もう仕方ない。成るように成れ。こうなりや自棄だ。

何だか嬉しそうにあれをしようこれをしようと言ってるシェリー。

荷物を次々に運んで行くアイルー達。

それをちよつと現実逃避しながら見てるだけの俺。

そしてそんな中、黙っている筈が無い者が一人。

「ふ、ふざけるなああああつっ！……！」

アリシアが吼えた。

顔を真っ赤にし鬼気迫る形相でシェリーを睨み付けている。普通に怖いな。

まあこいつが黙ってる筈が無いよな。

俺はもう傍観でもしてよう。めんどくさくなった。

「私は絶対に認めないぞ！認めてなるものかつ！今すぐこの家から出ていけっ！」

お前が認める認めないの前に家主の俺が認めただが。

「私には此処に住む権利があります。むしろ出ていくべきなのは貴女の方です」

権利って……、いやまあそうかもな。借りが有るんだし。

「ふざけるなっ！この家はもう私達の家なんだ！私と彼だけが住んで良い場所なんだ！」

既にアイルーが16匹住んでるけどな。

「ふざけたことを言っているのは貴女の方です。書類上では既にこの家は私とバレルの家ということに成っています。この意味がお分かりですか？」

え？マジで？それは初耳なんだが。

そしてヒートアップしていく二人。

シェリーはどんどん険しい表情に変わっていき、身体から赤いオーラが洩れ始めている。

アリシアは今すぐにもシェリーに殴りかかりそうだ。

そろそろ止めないとちょっと、いやかなりまずいな。

でもどうやって？と思っていた時、玄関の扉がコンコンと控えめにノックされた。

因みに玄関の前に置いてあったシェリーの荷物は全てアイルー達が運び終わっていた。アイルーって結構力持ちなんだぜ？どうでもいいか。

それにしてもこんな時に誰だ？この状況を打破してくれる救世主の登場か？

待たせるのも悪いので扉を開ける。

「い、こんにちは！バレルさん！」

「あ、ああ、こんにちは」

扉を開けた先に居たのは、深緑色の髪とそれと同じ色の大きな丸目で愛くるしい顔立ちの美少女と言って差し支えない女の子、ケティちゃんが居た。何故に？

そしてケティちゃんはその抱きしめたくなくなるような小柄な身体とは不釣り合いな大きさのリュックを背負っており、萌え、げふんげふん、さらに疑問は深まるばかりだ。

「あー、どうしてケティちゃんが此処に？」

「はい、えっと、実は、その」

「どういうことですかバレル。何故彼女が此処に？」

「そうだ！何故この小娘が此処に居るんだ！」

激しい口論を繰り広げていた筈の二人は、音もなく俺の背後に現れ、その怒りの矛先をケティちゃんに向けた。その二人の圧力を感じたケティちゃんは少し怯えている。怯えた顔も可愛いな。じゃなくて二人を止めなければ！

「おいお前らストップだ！妙な圧力を出すのは止める！」

「彼女を庇うとは……、まさか貴方はロリコンなんですか？」

「そんな小娘の何が良いと言うんだ！私の方が良いに決まっているっ！」

「うっっ、ひくっ」

ケティちゃんの大きな丸目がどんどん潤んでいく。

てか俺はロリコンじゃないぞシエリー！

それにケティちゃんとは二つか三つ位しか変わらないんだからロリとは言わないだろ！？

それからアリシア！お前は何でそんな意味分からんことで自信満々なんだ！もつと慎ましさを持ってよ！

「それで“私の”バレルに何の用ですか？事と次第によっては許しませんよ？」

「ふざけるなっ！彼は“私の”ものだ！」

「二人共黙れや！いつまで経っても話が進まんだろが！」

“私の”という部分を強調する二人。俺をもの扱いするなっ！しかもシエリーが何か喧嘩腰だし、アリシアはアリシアで一々噛み付くし。

「あ、あのっ！何でシエリーさんが此処に居るんですか……？？」

「此処が私とバレルの家だからです。それを勘違いしていらっしやる人が居ますが、その内排除する予定です」

「それはこっちのセリフだっ！」

「シエリーさんまで……」

排除って何か怖いぞ。

アリシアのことは前に会った時に知っていたが、シエリーについては分からないから聞いたんだらうケティちゃんに、さも当然の様に

答えるシエリー。

そしてシエリーの発言に噛み付くアリシア。  
何故か分からないがなんか落ち込んだケティちゃん。

「それで、ご用件は何ですか？」

シエリーの言葉に俯いていた顔を上げるケティちゃん。  
その顔には決意とか決心とかそんなものを感じる。  
そしてケティちゃんが遂に口を開いた。

「わ、私も此処に住みます！！」

「は！？」

「なんだと！？」

「今なんと？」

俺ビックリでアリシア怒鳴ってシエリー聞き返す。  
は？え？いや、何で？何でこうなった？

ケティちゃんが住む？俺の家に？いやいやまずいだろ。

いや俺的には、あの愛くるしい小動物の様な癒しを与えてくれるケティちゃんが居てくれれば相当癒されるとは思う。

思うがだ、ケティちゃんの母親はあの女傑で知られるケイシーさんだ。

ケイシーさんは元ハンターらしく、その武勇伝は数知れず。

一説には山の様な巨体を持つ老山龍をたった一人で追い払ったとか。真正銘の化け物だ。

そして一人娘のケティちゃんをとて可愛がっており、手を出そうとした不届きな男共を血祭りに上げたとか。

つまり、ケティちゃんを此処に住ませると、俺が死ぬ。

「今の言葉を撤回しなさい。今ならまだ許して差し上げます」

「い、嫌です！」

「ふざけるなっ！今すぐ此処から立ち去れ！！」

「絶対に嫌です！」

露骨にケティちゃんを脅すシェリーは、ゴゴゴゴッ！という効果音が聞こえてきそうで非常に怖い。

そしてそのシェリーを真っ向から受けて立っているケティちゃん。凄いな。

アリシアはアリシアで小柄なケティちゃんを上から見下ろし、これでもかと圧力をかけるがケティちゃんは一步も退かない。

いつの間にか二対一になってる。

とにかくシェリーとアリシアを落ち着かせて、ケティちゃんを説得するべきだろう。どんな難易度だよ。無理に近い。

だがやるしかない。壊れつつある俺の平穩のために。

あの後にはシェリーを宥めてアリシアを宥めてケティちゃんを宥めて

と、ひたすらに場を落ち着かせようと必死に、かなり必死に説得し続けた。

そしてシェリーはともかくケティちゃんを住ませる訳にはいかなないので、なるべくケティちゃんを傷付け無い様にやんわりと断ってから途中まで送って行った。

あと今度一緒に調合の練習をすることになった。デートとかそんな甘いものは無いぞ。

てかケティちゃんは俺にとっては妹的な感じだからな。

帰り際にケティちゃんが「私、バレルさんのこと信じてますから…」と言ったのが何だか心に残った。

それで家に帰ったら未だにシェリーとアリシアが睨み合っていて、俺の姿を見るや否や、左からはシェリーに「貴方はロリコンですか？ロリコンなんですか？」とまくしたてられ、右からはアリシアに「私の方が良いだろう？そうだと言ってくれ！」とか訳の分からないことを言われ続けた。疲れた。

その後も事ある毎に二人は衝突し、それを俺が宥めてはまた衝突しの繰り返しで俺の気力がどんどん奪われていった。

そして現在は真夜中、だと思っ。

俺は疲れ果てていたので早めに就寝したのだが、鼻腔をくすぐる様な良い匂いがして目が覚めた。

良い匂いと言っても食べ物ではなくて、甘い感じの良い香りだ。

そしてその甘い香りは俺が抱きしめている抱き枕からしている。

俺はその抱き枕から発する甘い香りと、抱き枕の柔らかい感触が気持ち良くて、自分の身体に引き付ける様に抱き寄せ、また眠りに就こうとした。

「少し苦しいです」

「んあー、ごめんごめん」

.....え？

月明かりが差し込む部屋の中で、碧い瞳と目が合った。

「なんつむー！」

「大声を出してはダメです。何処かの誰かが起きてしまいますから」  
咄嗟に叫び声を上げそうになった俺の口を、今まで抱き枕だと思っていたシエリーの手が塞ぐ。

な！？何でシエリーが！？え？は？あれ？此処俺の部屋？あれ？抱き枕がシエリーで？シエリーが抱き枕で？は！？ゆ、夢？夢だよな？

「夢ではありませんよ」

え？夢じゃない？夢じゃないのか？は？なんだ？これは？それにしても、柔らかいな、うん。寝よう寝よう。……ってダメだ！

「シエ、シエリー、こ、これは、違うんだ、誤解なんだ、寝ぼけていて」

「ふふっ、分かっていますから、落ち着いて下さい」

「あ、ああ。うん、そうだな」

お、落ち着け、俺。冷静になって状況を把握するんだ。  
此処は俺の部屋。寝る前には誰も居なかった。だが何故か今はベッ  
ドの中にシエリーが居る。間違いは犯して無い、よな？  
てか俺はいつまで抱きしめてるんだ、馬鹿じゃないのか？相当混乱  
しているようだ。  
でも何だか放してはいけない様な、放したくない様な……。

「何で、シエリーが此処に？」

「貴方から誘って来たんですよ？覚えていませんか？」

「え！？う、嘘だろ！？」

「はい嘘ですよ」

嘘かよっ！洒落にならないから止めてくれ！本当に取り返しのつか  
ないことをしてしまったと思っただぞ！？

それにシエリーはこんなことを言うような娘ではなかっただろ？

「少しからかってみただけですよ」

「本当に洒落にならないから止めてくれ……」

「ふふっ、そうですね」

それから少しの間、沈黙。何故か言葉を発してはいけない様な空気  
になっている。何度も言うが俺は空気は読めるんだ。

そしてその間、シエリーの熱っぽい眼差しを受け続けてる俺。てか  
顔が近いんだが……。

その見る者を虜にする様な碧い瞳で見つめられてる内に、少しクラ

クラしてきた。

まだ寝呆けてるようだ。そうに違いない。絶対そうだ。それよりも、いい加減ちよっと辛くなってきた。そろそろ喋って良いよな？

「えーと、シエリー？」

「何ですか、バレル？」

な、何だか、シエリーから色気というか何というか、そんなものを感じる。

と、とにかく会話を進めなければ！

「あー、そうだ。何でこんな状況になっているのかさっぱりなんだが」

「分かりませんか？」

「あ、ああ、本当に分からないんだが……」

「少しだけ、興味があったんです。こうして、貴方の腕の中で眠ること……」

そう言ってさらに擦り寄ってくるシエリー。

てかこれ以上は本当にヤバいだろ！？シエリーはいったいどうしたんだ！？

「それと」

今度は何だ？

「貴方はアリシアさんと寝たそうじゃないですか。不公平だと思いませんか？」

火山での狩りの時のあれか？そっぴや洗い浚い白状したんだっぴやな。いやでもその言い方だとちよつと。

「ちよ、ちよつと待てシエリー。その言い方だと色々ヤバいから」

「そうですね。しかし性交に及んでいないとはいえ、一緒に寝たことには変わりありません」

「まあ、それはそうだが……」

確かに寝たのは寝たが、何も無かつたんだぞ？

それにベースキャンプには大きいベッドが一つあるだけだし、一緒に寝るのは仕方ないんじゃないか？

「私は、それが悲しくて、悔しくてなりませんでした。貴方のこの腕にアリシアさんが包まれて居たかと思うと、殺意すら芽生えます」

途端にシエリーから凄まじいまでの殺気が溢れだした。

しかしそれも一瞬で霧散する。

「ですが、今はそんなことはどうでもいいです。今は私が貴方の腕の中に居て、貴方を独り占めしていますから」

なんか、恥ずかしく仕方ないんだが。でもなんか雰囲気的に拒めないんだよな。

「それに、これからは貴方と一緒に暮らせませすし、私の我が儘もたくさん聞いてもらうつもりです。貴方は何でも言うことを聞いてくれると言いましたから」

「え？それは今日ので終わりじゃ……」

え？終わりじゃないのか？まだあるのか？でも普通一個だけだよな？

「はい？まさか今日のことですべて清算出来たとでもお思いですか？」

「違うのかつ！？」

「当たり前です。私が今まで貴方にしてあげたことは、それに対する貴方の誠意は、その程度のことです清算し切れるものなのですか？」

「うっ、いや、なんとというか……」

よくよく思い出してみると、ギルドナイトとかいう警察みたいな奴等に楯突いたり、禁止区域指定されている場所に知らなかったとはいえ無断で入ったり、とまあ考えてみると俺がそういう面倒を起す度に、シエリーに助けられていたな。

これは、結構、いやかなり、思っていた以上にシエリーの世話になっているな、うん。

「あー、うん、そうだな。でも俺の出来る限りのことで頼む」

「はい、分かっていますよ。無理やり恋人になれなんて言いません」

シエリーの発言にちょっとドキツとした。まあここまでされたら気付かない方がおかしいんだが。でも何で俺なのがさっぱり分から

ない。

「今日の私はちょっと卑怯だったかもしれないね。そろそろ部屋に戻ります」

シェリーが腕の中から抜け出したことで、少しだけその温もりが名残惜しく思えた。あー、もうこの思考が既に恥ずかしい。

そしてシェリーは部屋の扉の前でこちらに振り向き口を開いた。

「私は、最後には貴方が私を選んでくれると信じていますから」

その言葉を残してシェリーは部屋へと戻って行った。

シェリーが部屋に戻ってから、結局朝方まで眠れなかった。あー、もう何か思い出しただけで恥ずかしくなってくるな。とりあえず、飯だ飯。部屋を出てリビングの方へ行くとアイルー達がせつせと朝食の準備をしていた。

「旦那さん、おはようございますニャー！」

「おはよう。アリシアとシェリーは？」

「姐さんはまだ寝てるのニヤー。シェリーさんは集会所へ行ったのニヤー」

「そうか」

アリシアは案外朝が弱いからな。もう少ししたらのそのそと起きだすだろう。

シェリーは朝早くから仕事か。大変だな。まあこの村の集会所の受付嬢は二人しか居ないからな。

まあ昨日の今日でシェリーに会うのはちょっと気恥ずかしいものがあるのでちょうどよかったな。

そして席について飯を食おうとした時、ドンドンドンツと玄關の扉をノックというより殴りつける様な大ききの音がした。

この朝っぱらからうるさいことこの上ない。誰だこの非常識な奴は。

「さつさと此処を開けんかポンコツ！！居るのは分かっておるぞ！！」

……もうだいたい分かってたがこれで誰かが判明したな。

「我輩が来たのだからさつさと出てこんかつ！ポンコツが！雑魚ハントーの分際で生意気だぞっ！！この腰抜けめがつっ！！」

……段々イライラしてきた。

いい加減うるさくてかなわんで渋々扉を開ける。

其処に居たのは予想通りの全身にクロオビ装備を纏った、とにかく濃ゆい暑苦しい顔立ちの男。

この村の訓練所の鬼教官であり、一応は俺の師匠でもある男が居た。



空気男と不公平と初夜？（後書き）

次話からは二、三話かけて狩り中心の話になる予定です。  
年内にもう一話更新出来たら御の字ですかね。

## 空気男と鬼教官と集団演習（前書き）

一気に書いたのでおかしな所があるかもしれないです。あつたら教えて下さい。

そして毎度毎度、説明文が長いですね。

推敲とかしたらごっそり文章削れそうな気がする。

あとこの小説今のところ2ndG基準です。てか3rdいる？3rd要素いる？

3rdに繋げるシナリオあるけど3rd要素いる？

## 空気男と鬼教官と集団演習

灰色のオールバックに太い眉、意志の強さを感じさせる眼光鋭い黒目、口髭をたくわえた40代半ば程の男。その身体は無駄なく鍛え上げられていて、その容姿と合わせて貫禄を感じさせる。

それがこの村のハンター養成施設、訓練所の鬼教官と呼ばれる男、その名はダンカン。

ハッキリ言つて俺はこの男が嫌いだ。てか死ね、消え失せろ、地獄に落ちろ。そのくらい嫌いだ。

一応俺も訓練所にはお世話になり、この男の指導の元、ハンターと成った訳ではある。

そんな一般的に言えば恩師と言つて差し支えないこの男を嫌う大元理由は、訓練と称した拷問を受けたからに違いない。

この男の訓練、もとい拷問は半端なものではなかった。

一日中飲まず食わずで走らされるのは当たり前。モンスターの攻撃と称して丸太やハンマーで殴られ続け、骨折した回数は数知れず。

回復薬を飲めば二三日もしない内にその骨折も完治するが、治った途端にまた骨折。

あまりの激痛に気絶するも、すぐさま叩き起こされまた拷問。

やっと食事が出来ると思えば、毒や麻痺に耐性を付けるとかいう名目で食事には毒テングダケやマヒダケを致死量ギリギリ入れられ、生死の境を彷徨ったことも多々ある。悪夢にうなされ続けて夜も眠れない。

これらはほんの一部でしかない。

そして、その時の俺はハッキリ言って狂っていたのだろう。

これくらいが出来なければハンターになど成れはしれないと思ひ込み、言われるがままに全ての拷問を気合いで耐えきった。

今考えてみてもゾツとするものがある。人間の思い込みの力とは相  
当なものだ。防御本能が働いたのかもな。

あの頃なら空も飛べたかもしれない。

そしてその訓練という名の拷問は、訓練所で行うべき通常の訓練の  
範疇を明らかに越えているものであり、通常の訓練の約4倍に相当  
するということを知ったのはハンターに成ってからだった。

村長が止めなければ俺は教官殺しに成っていただろう。本気で殺し  
に行こうとしていた。

そんな事があり、今ではこの男の全てが気に食わない。てか思い出  
したことで殺意が沸いてきた。

今までよく耐えてたものだ。俺の我慢強さも半端じゃないな。

「何の用だ貴様。さっさと失せやがれ」

「何だその口の利き方は！我輩に対してそんな口を利いて良いと思  
つておるのか！」

「当たり前だ。貴様に敬語など使う必要ない。顔も見たくない程だ」

「なんだと！？この恩知らずがっ！誰のお陰でハンターに成れたと  
思っておるのだっ！」

「あんな拷問を訓練だと勘違いしていやがる貴様のお陰ではないこ

とは確かだな。狂ってると思えん」

「お前の様なポンコツを雑魚ハンターに昇格させてやった我輩に対してなんという言い草だっ！」

本当になんて偉そうな奴なんだこいつは。

確かにあの拷問を乗り越えたからこそ、今のハンターとしての俺が在るのかもしれない。

しかしだ。当時、村の子供にも劣る身体能力しか持たない俺に対して、あんなハンターですら音を上げそうな拷問をするこの男は鬼と思えん。

今俺が生きてるのが不思議でなんくらいだ。

「貴様みたいなのが教官やってること事態が正気とは思えん。あんな拷問しといて、ハンターにしてやった、とか思ってる頭の弱い奴だからなっ！」

「なんだとっ！？もう一度言ってみろ！」

「お、落ち着くのニヤ二人共！」

俺達からただならぬ気配を感じとったのか、咄嗟にアイルーが止めに入る。

あと一歩遅かったら殴り合いになっていただろう。

俺はそれで構わないが。勝つのは俺だ。

しかしこの男をぶん殴れないのは苛々する。

「「チッ」」

ビキビキッ。

「マネすんなやっ!」

「落ち着くのニヤー!」

二人同時に舌打ちした俺達は、これまた二人同時に怒鳴った。クソがっ、苛々する。

それはこの男も同じらしいが、こいつと同じ行動をとってしまったことが余計に腹立たしい。

ふー、落ち着け、俺。この俺に苛々してもキリがない。それよりも早く追い出すべきだ。

「で、結局何の用だ」

「ふんっ、客に対して茶も出さんのか。礼儀知らずが」

……………殺していいか?

「す、直ぐに用意しますニヤ〜!」

俺の殺気を感じとったアイルーが、すぐさま茶を用意しに行った。今すぐこいつをぶち殺すからそんなことせんでもいいのにな。

「旦那さん落ち着くのニヤー!」

「そうニヤー」

数匹のアイルーが俺を宥める。

クツ、我慢だ我慢。

「おまちどおさまニヤ〜!」

茶を注ぎに行ったアイルーが戻ってきた。何時にも増して早いな。うちのアイルー達は優秀だな。

「旦那さんの分もあるニヤ、どうぞニヤー」

「む、悪いな」

茶を受け取ってズズツと一口。

「「ぶあちゃあああ!」「」

余りの熱さに茶を吹き出す音×2。

「「マネすんなやつ!」「」

「おっ、落ち着くニヤ〜!」

「「集団演習だと?」」

「そつだ！我輩が育てた訓練生二名と合同でな」

何の用かと思えば、集団演習を行うから参加しろ、ということらしい。

集団演習とは、演習とついでにはいるが限りなく実戦に近く、てか実戦と変わらない。

ただ訓練所での鉄則の私物の持ち込みの禁止と、素材の持ち帰り禁止というルールに基づいたものになる。

したがって、武器防具は普段使っているものは使えず、決められた装備を使うことになり、アイテムの持ち込みも禁止なので決められたアイテムしか使えなくなる。

そしてモンスターを討伐してもその素材の持ち帰りは禁止。もちろん報酬もない。

貰えるものは一部の武具を作る為に必要になるチケット等微々たるものだ。

つまり利益が無い。

「却下だ」

「何!？」

別に金が全てでハンターやってる訳ではないが、こちとら命懸け。報酬を貰うのは当たり前だ。

しかも訓練生二名というオマケ付き。ハッキリ言って足手まとい。いやメインはその訓練生二名がモンスターを討伐することか。

つまり、俺がその訓練生二名とやらのお守りをせねばならんと言っことだろう。嫌だ。

「腐っても訓練所出ならば、先輩として後輩の面倒を見るのは当たり前だろうが！」

「知りもしない奴の世話などごめんだ。それに訓練生のお守りは貴様の仕事だろう」

それに、演習で手に入ったモンスターの素材が、そのままこいつの懐に入ることぐらい知っている。

何で俺がこいつの懐を潤す為に働かなければならんのだ。

「……まさか、怖いのか？」

「あ？」

今何と言ったこいつ。怖い？怖いだと？

「我輩が育てた訓練生の前で、惨めに醜態を晒すのが怖いのだろうか？」

「何だと貴様っ！」

「怖いのなら仕方がないな。やはり腰抜けだったと言っわけだ」

「言わせておけば貴様……！上等だ！受けて立つ！」

「おや？腰抜けがどついう風の吹き回しだ？怖くて逃げ出したいんじゃないかったか？」

「誰が腰抜けかつ！誰が逃げ出すかつ！やってやるわクソツたれが

っ！」

俺は目の前のムカつく顔をした男を睨み付けながら言い放った。  
俺はやるぞ、この男に勝つぞ！

良いように使われただけだということに気付いたのは後の話だ。

「ふああ、おはよう。客か？」

「客なんかじゃない。それより顔を洗ってこい」

「うむ……」

二階から欠伸をしながらアリシアが降りて来た。

眠そうだな。朝に弱そうないメージは無かったんだがな。夜更かしでもしてんのか？

アリシアはそのまま目を擦りながら洗面所へと向かって行った。

「な、なっ、なんだとおおおお！！！」

今まで黙って居たかと思えば、教官がいきなり叫び出した。

「今のは、最近村で噂の人氣急上昇中の美人女ハンター、アリシア君ではないかっ！！！」

何だこいつ。いきなり叫び出したかと思えば、今度はアリシアについてうんたらかんたら。

てかアリシアって村ではそんな扱いなのか、初めて知ったな。

まあ美人は美人だしなあ。

「それが何でお前の様な奴の家に居るんだーっ！さっさと答えんかっ！！」

「暑苦しいわ！離れろっ！」

掴み掛かって来る暑苦しい馬鹿を引き剥がす。近くで見ると暑苦しさが増えるな。

本当に暑苦しい奴だ。

「何でアリシア君がお前何その家に居るんだっ！まさかお前、アリシア君に手を出したのかっ！？」

「誰が手を出すかっ！」

「クソオオオッ！アリシア君は柔らかかったか！？暖かかったかっ！？」

「黙れや変態がっ！！！」

「面倒だ……。安請け合いなんてするんじゃない」

「たまには良いじゃないか。ほら、行こう」

あの後には、あの変態オヤジを家から追い出すのに苦労した。本当に面倒な変態だ。

しかも今回の集団演習とやらは、訓練所の闘技場ではなく、実際の狩場で行うらしい。しかも今日。

当日になってから言ってくる辺り、あの男の計画性の無さがうかがえるな。

そんな訳で、今はとぼとぼと足取り重く訓練所に向かっている所だ。そして何故か着いて来ているアリシア。

「何で着いて来てんだお前」

「私は君のパートナーなのだから、演習とはいえ狩りを行うのなら、一緒に行くのは当然だ」

「そうか？んー、まあいいか」

「うむ」

満足そうに頷くアリシア。

まあいいや。こうなればこいつも道連れだ。

定員は四名までだから、訓練生二人と俺とアリシアでちょうど四人だしな。

それに俺一人で訓練生二人をカバーするのはやや厳しい。俺はパーティ戦に慣れてないんだ。

アリシアはハンター歴が俺よりも長そうだし、そういう経験もあるだろうから、一緒に来てくれた方が助かることも多い……か？

まあそこら辺に期待しとこう。

そんなことを考えているうちに訓練所に着いた。  
無駄に大きな門をくぐった先には、待っていたと言わんばかりに仁  
王立ちしている教官が居た。

「やっと来たかポンコツめ。待ちくたびれだぞ！」

「まだ約束の時間の5分前だろうが」

「30分前行動が当たり前だ！」

うぜえ……。

「む！隣に居るのはアリシア君ではないか！我輩がこの訓練所で教  
官をしているダンカンである！」

白い歯を見せながら自己紹介をする教官。

本人は決まったとか思ってたんだろうがその笑顔はキモいぞ。あと暑  
苦しい。

「はい、初めまして。アリシアと申します。いつも彼がお世話にな  
っております」

律儀に礼をするアリシア。こんな奴に頭下げなくていいのに。

てか何だその挨拶は。お前は俺の妻か。

俺がこんな奴に世話になってるなどお世辞でも言っもんじゃないぞ。

「今日は私も彼と共に演習に参加したく思い、参上した次第です」

「そうかそうか！初心を忘れぬのも良い心がけだ！何処かの腰抜け  
とは大違いだな！」

殺してえ……。

「そんな話しはどうでもいい。さつさとその集団演習とやらの説明をしろや」

「全く、言葉遣いになつとらん！アリシア君とは大違いだな！」

何で俺が一々アリシアと比べられにやならんのだ。

てかアリシアは何なんだ？猫かぶってんじゃないのか？

いや、年上に対してはこんなもんだったか。

「そんなのどうでもいいから早く進めろや」

「まあいい。今回の集団演習の討伐対象は……」

「勿体ぶらずにさつさと言えや。どうせ大したモンスターじゃないくせに」

「グッ、今回の集団演習はイヤンクツクの討伐だ！」

ほらやつぱり、大したもんじゃないじゃないか。

まあ当たり前だがな。訓練生交えての集団演習に、そんな大層な飛竜が出る訳が無い。

イヤンクツクとは鳥竜種に属するモンスターで、大怪鳥と呼ばれている。

その身体は全体的にピンク色の鱗や甲殻で覆われていて、体毛はほとんどなく、顔面には巨大なクチバシ、後頭部にあるエリマキトカゲの様な耳が特徴的だ。

体長は大体リオレウスよりも二回りほど小さく、飛竜の中では最弱の部類だ。

故にハンターの登竜門とされていて、こいつを倒せなければハンターとしてはやっていけないと言われている。

熟練のハンター達ならばそう時間もかからずに討伐する事も可能だ。ゲームの中では親しみを込めて「クック先生」とか言われてたな。

まあ最弱とはいえ、実戦経験の乏しい訓練生にとっては強敵と言って間違いない。

俺とアリシアが訓練生二人をサポートすれば、いけるか？まあ訓練生の練度によるな。

「では次に武具だが……、いつもは我輩が決めるものだが、今回は特別に選ばせてやろう！ついてこい！」

そう言われたので教官の後について行き、少し歩いた先にある倉庫の前まで来た。

教官がその倉庫の扉をガラガラと開けると、その中には所狭しと武器や防具が並んでいた。

そしてその全てが下位素材で作れるものだ。訓練所で貸し出ししているものだろう。

「好きな装備を選ぶがいい。我輩はこれから訓練生達を呼んでくる」

そう言うってから教官は去って行った。暑苦しいのが居なくなっただけで清々した。

「とりあえず、選ぶか」

「そうだな。君はどれにするんだ？」

どれと言われてもライトボウガン以外は無理何だがな。ヘビィボウガンも使えなくは無いが、余り慣れてはいないから今回は無しだな。そしてライトボウガンがまとめられて置いてある棚から、そのうちの一寸を手取る。

「これだな。前まで使ってたことがあるから」

俺が手に取ったのはライトボウガン、サンドフォールだ。

サンドフォールは、砂漠を泳ぐ様に移動する魚竜種のガレオスの鱗やヒレと鉱石を組み合わせで作られているボウガンだ。

比較的簡単に作れる割にその性能はまあまあ良く、通常弾1v2を5発速射出来ることと、飛竜の弱点を突ける属性弾の装弾数も多く、サポートに必須の状態異常を起こす麻痺弾や睡眠弾も使える。

俺が下位ハンターの時はこの使っていたので、使い方は熟知しているし、何よりまだ身体が覚えてる。

弾丸を装填せずに空撃ちしてみたが、状態は良好だ。細かい傷は有るが、小まめに整備されているのだろう。

可変倍率スコープ、サイレンサー付きな所も俺が所持しているものと変わらないし、こいつでいけそうだな。

「そうか。私はどうしようかな……」

即座に決めた俺とは違い、アリシアは何やら悩んでいる様子だ。

太刀が置いてある棚や片手剣の棚、双剣の棚等を見て回っている。

「太刀以外も使えるのか？」

「ん？ああ、一通りは使えるよ。もっとも、一番得意なのは太刀に変わり無いが」

ほう、他の武器も使えるのか。羨ましいな。

使える武器が多いということは選択肢が増えるということだ。モンスターごとに有利になる武器を使っていけることになる。

大体、俺みたいの一つしか使えない奴の方が珍しいんだけどな。

「いつも通り太刀といきたい所だが、太刀はその攻撃範囲の広さが災いして、パーティ戦では他の接近武器の邪魔に成りやすいんだ」

確かに、左右横方向に広い攻撃範囲を持つ太刀は、そのリーチの長さ故に仲間をも巻き込んでしまうこともあるだろう。

ゲーム内じゃ、ただ太刀を振り回すだけの奴は侮蔑を含めて「太刀厨」とか呼ばれてたな。

「それに、訓練生二人がどの武器を使うのか知らされていないし……」

そつえばそうだ。てか俺達はその二人の情報を全く知らされていないんだが。これってかなり重要なことなんじゃないか？

てか前もって言っとくべきだろう。本当にあの男は計画性というものが無いな。

むしろ、嫌がらせという線もあるな。疑い出したらキリがない。

「まあ、好きなのを使えば良いだろう。結局はクックだしな。足手まとい二人居ようが、お前なら武器の違いくらい問題にならんだろ

「？」

「……君にそう言ってもらえると嬉しいよ。ありがとう」

「事実を言ったただけだ、勘違いするな」

「ふふっ、そうだな。ありがとう」

何やらアリシアの方から桃色の雰囲氣的な何かが漂って来るが、無視しておく。

無視するのは慣れたもんさ。

「で、何にするんだ？」

「うむ、太刀にしようと思う。やっぱりこれが私にとって一番使いやすいから」

。そう言ったアリシアが太刀の棚から取り出したのは、黒刀【零ノ型】

カントロスという甲虫の素材から作られたそれは、属性付加こそ無いが鋭い切れ味が売りだ。

これで武器は決まったから、次は防具だな。

ずらりと並んでいる防具は剣士装備とガンナー装備、さらに男性用と女性用とで分けられているらしく、当然俺は男性用のガンナー装備を物色する。

一般的にガンナー装備は剣士装備程の防御力は無く、防御力よりも軽量さによる動きやすさに重点を置いているものが多い。一応最低限の防御力はあるがな。

つまり防御力に関してどれもどっこいどっこいだ。そして此処にある防具はどれも下位の、比較的簡単に作れるものばかりであり、大したスキルが発動する訳でもないので完全に好みで選ぶことになる。

サンドフォールと同じ砂竜の素材で作られたガレオス装備にするか……、いや、何か所々に付いてるヒレが気になる。絶対邪魔だろ、これ。

クック装備は……、今からクックを狩りに行くんだから何となくパス。  
バサル装備……、重そう。もろに岩だしな。

どれでも良いとなると中々決めにくいものだな。

さっさと決めるか。そうだな……、使いやすいそうなバトル装備でいいな。発動スキルも悪くないし。

装填速度+1はリロード時間を短縮出来るし、攻撃力UP【小】はライトボウガンの攻撃力の低さを、少しだが上昇させる。

バトル装備は初心者用装備と言われ、普通に何処の店でも売っている装備だが、値段や性能から見ても手ごろな装備と言えるだろう。ケルビの皮と鉱石を組み合わせて造られており、簡素だがしっかりとした造りになっている。それに此処の装備はそこそこ強化されるし。

ときばきとバトル装備をインナーの上から身に付けていく。レギンス、コート、レジスト、ガード、と装備していき、最後にバトルキヤップを装備しサンドフォールを肩にかける。  
これで準備は終了だ。

いつもはナルガ装備なので違和感はあるが、まあこのぐらいの誤差なら大丈夫だろう。

それに最近は武器や防具に頼っていた所もあるし、そういう意味でリハビリには丁度良い。

俺の方は終わったのでアリシアの方をしてみる。防具付けるだけで一々別の部屋に行ったりはしない。裸になる訳じゃないしな。

そんでアリシアの方も装備し終わった様だが……、

「……何だその装備は」

「ん？何処もおかしな所は無いだろう？」

さも当たり前みたいな顔してるが、こいつ確信犯だろ。

アリシアが着ているのは赤ともピンクともとれる色合いのコンガ装備。

ババコンガという巨大なゴリラの様なモンスターの素材から造られた装備で、その特徴は大きく開いた胸元と腹回りか。

そんなもんをアリシアが着ると、つまりは、あー、あれだ。谷間とかが強調されていて、てかこいつの場合は特にだが、あとへそも丸出しだし。

もう言わなくても分かるだろうが、エロい。

「お前なあ、もうちょっと自重しろよ」

「何がだ？」

惚けんなや。てか笑ってんじゃねえか。

「胸元が開きすぎだろ。そんなもんだったか？いや違っただろ」

「何を言う。これは元々こういうものだ。君が直してくれるなら話は別だが」

「誰がするかっ！てかさんなこと言ってる時点で分かってやってるってことじゃねえか！自重しろや！」

「むう、仕方ない。それでもダメとは、君は本当に手強いな」

いそいそと胸元を正すアリシア。先ほどよりはマシだが、それでも目に余る。

てかこれって防具としてどうなんだ？役割果たしてるか？

女性用防具はさりげなくこんなデザインのものがあるから困る。可愛ければ良いとか思ってたんのか？

てかもう痴女だろこいつ。何だよこいつ。その内全ての行動がエロに直結していくんじゃないか？

改心するとか言ってたか？まあ直接的行動に走らなくなったのは良いが、これじゃほとんど変わらんだろ。

「はあ、お前という奴は。もういい、行くぞ」

もう一タツツコミすんのが面倒になったので倉庫から出る。

外を見てみるが、まだ教官は来ていない様だ、っと、ちょうど来たな。

「ふん、馬鹿の一つ覚えにボウガンか。芸の無い奴め」

「腕は貴様以上だな」

「グッ、減らず口を叩きおって」

この男は教官をやっているだけあって、様々な武器に精通しているがライトボウガンの扱いに関しては負ける気がしないな。

他がダメなんだからそれくらいじゃないとやっていけないんだがな。

「……ん？あ、アリシア君！す、すっ、素晴らしいぞっ！！」

突然教官は叫び声を上げ出した。その視線の先はアリシアの、特にその深い谷間に集中していて、血走った目で凝視している。

アリシアは教官のそのあまりの変態っぷりに、胸元を隠して後退りする。隠すくらいなら最初からそれを選ぶなよ。まあこの変態相手にはしょうがないが。

それにしても、あのアリシアが引くくらいの変態っぷりとは。普通にヤバいなこいつ。

とりあえず殴つとくか。

「さっきからいい加減にしろや変態がっ！」

「ぶふあああー！！」

変態の顔面に右ストレートを叩き込んでおく。

鼻血を出しながら吹き飛ぶ変態。クリーンヒットか、まあまあだな。

「や、やりおつたなああ！」

鼻血を拭いながら起き上がる変態。チツ、特にダメージは無しか、

つまらん。

「黙れ変態がつ！どんだけ女に飢えてんだよ！」

「何だとっ！？」

戦闘態勢に入る俺と変態。

上等だ、今日という今日は、再起不能になるまで叩きのめしてくれるわ！

「なあなあ！さっきからそんなことどうでも良いからさっ！早くクエスト行こうぜっ！」

そんな時、もう待ちきれない、とばかりに声を上げたのは、今まで教官の後ろにいた訓練生らしき赤い短髪の16か17歳くらいの少年。

活発そうな顔付きで、ランポスシリーズで身を包み、背には骨系の大剣・ボーンスラッシャーを装備している。訓練生にしては体格が良いな。

「むっ、仕方ない。今日の所は勘弁してやる」

こっちのセリフだ変態が。話が進まないのでも口には出さないが。

「この二人が今回の集団演習を共にする訓練生の、アーサーとクラークだ！」

「おう！よろしくなっ！」

アーサーと呼ばれたさっきの赤毛が元気に挨拶をする。

かのアーサー王と同じ名前か。別にだからどうって訳じゃないけどな。

すると突然アーサーは俺とアリシアを見比べ出した。何のつもりだ？

「なんだ、上位ハンターって言っても大したことないな！これなら俺もすぐ上位にいけるぜっ！」

は？なんだとこのクソガキ。

口の利き方に気を付けるよ、全く礼儀がなってない。少しは年上を敬えよ！

自分のこと棚に上げといて何言ってるんだとか思われるかも知れないが、これでも俺は一部を除いて礼儀正しいんだぞ。その一部の奴は言わずもがな。

しかしこいつの場合、悪気があって言ってる訳じゃなく、素で言ってるっばいな。余計質が悪い。

「でもその女は結構良い身体してるぜ？フヒヒ」

今度はアーサーの隣に居た奴が、アリシアに対して平然とセクハラ発言し出した。

さっきクラークと呼ばれた奴が、って何だこいつ！

そいつは剣士用のバトル装備に身を包み、背にはアイアンランス改を背負っているが……、特筆すべきはその腹！

防具越しにも膨れ上がっているのが分かる。何だその腹！ヤル気あるのかっ！

てか全体的に太り過ぎだろ！ハンター舐めてんのかっ！

そんでフヒヒって何だ！？そんな笑い方リアルで初めて聞いたわ！

その醜悪な見た目は、擬人化した豚と言って違いはない。

そしてその豚の舐める様な視線に、堪らずアリシアが背筋を震わせ  
て俺の後ろに隠れた。

アリシアをここまで怯えさせるとは。なんて豚だ。

「おい！何をしておるか！アリシア君が怯えておるではないか！」

教官が豚に怒鳴るが、お前だってさっき同じ様なことしてただが。

「とにかく！この4名でこれから集団演習を行う！」

本当にこんな奴ら（特に豚）とで狩りがやれるのか……。

無理だろ……。

## 空気男と鬼教官と集団演習（後書き）

装備は適当です。アリシアの装備が若干強いかな？まあ大丈夫です。

あと、そんな装備で大丈夫かな？ってネタ使おうかと思ったけど止めました。いい加減くどいですからね。

サンドフォールって3rdだと無いんですよ。

2ndと2ndGの序盤だと、上位行くまでこれ一丁でクリア出来るんですけどね。

あとアーサーとクラークの名前も適当。ググってたら何か出てきたのでそれにしました。

アーサーは漫画とかアニメの熱血馬鹿系主人公をちょっといじっただけのキャラで、クラークは豚。デブハンターも珍しいからいいかと思って書いた、反省はしていないが後悔はしている。

あと本来のオチは決めてあったのですが何か長くなってオチまでいけませんでした。次の話の序盤を読んだら、ああ、これをオチにしたかったんだな、と書いていただけだと思います。

では長くなりましたがこれで、ノシ。

空気男と馬鹿と豚（前書き）

やーっつとこさ投稿できました。大変お待たせ致しました。  
最終投稿日が去年で、5ヶ月ぶりの投稿で、もうね、馬鹿かと、ど  
んだけかかってんだとね。

そして5ヶ月も待っていてくれた読者の皆様に感謝する次第であります。

## 空気男と馬鹿と豚

出発前にして大きくやる気を削がれた俺と、何だかすこぶる不機嫌なアリシア。

そして俺とは違ってやる気満々の訓練生のアーサーに、ニタニタと気持ち悪い笑みを浮かべている同じく訓練生のクラーク。見た目は豚。

こんなメンバーで狩りに行くことになるなんて、やる気が上がる要素が全くない。大金を積まれるぐらいじゃなければ割に合わん。本当に何でこんなことしてんだ俺は。帰っていいか？

などと考えてる内に竜車が来た様だ。どうやら訓練所専用の竜車らしい。

中は広々としていて、軽く十人は乗れるだろう。

まあ身の丈程もある大剣や槍を扱うハンターも居るのでこのくらいは普通だ。

「よっしゃー！ 一番乗りだぜっ！」

「みつともないから騒ぐなよ。フヒヒッ」

馬鹿みたいに大声上げて意気揚々と竜車へ乗り込んだアーサーと、それに続いて乗り込む豚。みつともないのはお前の腹の肉だろ。

あとその笑い方止めろ。

まあ、いい。

どうせ最初から期待何かしてなかったからな。

大体この糞教官が俺の家に押し掛けて来た時点で気付くべきだった。

多分この糞教官が問題児を俺に押し付けたかったんだろうな。嫌がらせにしても質が悪すぎる。

殺気を込めて睨み付けるが、当の本人は何処吹く風といった様子だ。

こいつ、いつか殺す。

しかし、貴様は墓穴を掘った。

この訓練生二人は、俺達上位ハンター付きとはいえ、イヤンクツクの狩猟を行うことが出来るレベルか、それに近い実力が有ると判断したから今此処に居るわけだ。

そんな二人が点で使い物にならなかつたら……？

この糞教官の無能っぷりが露見されることになるだろうな。

その年で定職を失うのは、さぞや辛かるっ？くくくっ。

「ど、どうしたんだ？」

「ん、いや、何でもない」

おっと、ついつい黒い笑みが出てしまった。アリシアがなんかビビってる。自重せねば。

因みに、ハンターに成るためには必ずしも訓練所に入らなければならぬというわけではない。ないが、利口な奴なら訓練所に入るだろうな。

いきなりギルドに登録してハンターに成る奴も少なからずいるが、まあそれで成功する奴は極端に少ないし、死亡率も高い。

つまり訓練所というのは、ハンターとしての土台となる基礎的な部分を身に付けさせ、有能なハンターに成るよう育成すると共に、新米ハンターの死亡率を引き下げる、という目的があるわけだ。

しかし、どう見てもこの二人は俺が受けたような拷問の如き訓練を受けている様には見えない。

どういうことだ？ 糞教官の手抜きなのか？ かなり納得いかないぞ。

それともあれか？ 元々この世界の住人であるこの訓練生二人と、飛び入り参加当時の俺とでは身体能力の差は歴然であり、俺に行った様な拷問は必要なかったということなのか？

事実と言えば事実だが、微妙に納得出来ん。

「それにしても、一体何なんだあの二人は。我々を舐めた様な発言といい態度いい、とてもじゃないがハンター足る器とは思えないよ」

そう言ったアリシアは、むすっとした顔をしていて、かなりご機嫌斜めな様子。

まあいくら訓練生で、初めての飛竜種の狩猟で舞い上がっているとはいえど、あれはな……。

「それに私の経験上、ああいった連中は口ばかりの役立たずか、何かしらの問題を起こす者が多い」

様々な街や村を渡り歩いたアリシアの言うことなのだから、その通りなのかもしれない。俺もそう思うし、どう見ても協調性やらがあるようには見えない。いや、協調性がないのは俺らも同じか。あれ？ このパーティって既に色々破綻してるんじゃないか？大丈夫か？

それにしても、アリシアは今までああいう奴らに苦労して来たんだろうな。地味に可哀想な奴だなこいつは。

それで俺に興味を持つのは止めて欲しいんだけどな。俺はお前の御眼鏡に適うような奴じゃない。

ただ日本人特有の謙虚さを持つてるだけだ。

あと言つとくが、お前もトラブルメーカーなんだからな？

「やはり君と二人きりの方が良い。それが一番だ」

「はいはい」

平然と恥ずかしいことを言うアリシアの対処にはもう慣れたものだ。

こいつは一日の内に最低十回はこついうこと言う奴だからな。

「むう……。君のその態度も気に食わないぞ」

「お前のお馬鹿発言に一々反応してられるか」

「む、私は馬鹿じゃないぞ」

「いや、馬鹿だから」

「馬鹿じゃない」

「馬鹿だろ、ってこんなことしてないで早く行くぞ」

竜車へ歩き出した俺に、なおも自分は馬鹿じゃないと主張し続けるアリシア。それ言う度に馬鹿っぽいぞ？

そんなアリシアをシカトして竜車に乗り込み、中を少しばかり見回して適当な所に腰を下ろす。

そして当然のように俺の隣を陣取るアリシア。相変わらず距離が近い。肌と肌が触れ合う様な、というかピッタリとくっ付いている。

……………。

何となく俺が横にズレる。俺とアリシアの間に一人分くらいの空間が出来る。

すかさずその空間を埋めるべくアリシアが擦り寄ってくる。

……………。

俺が横にズレる。

アリシアが擦り寄ってくる。

俺が横にズレる。

アリシアが擦り寄ってくる。

俺が横にズレ た瞬間にサンドフォールを隣に置いてアリシアをガード。

ならばと反対側に回り込むアリシア。

それをさらにガードする俺。

さらにそこから反対側に回り込む と見せかけて切り返し、俺がそれに釣られた隙に、チャンスとばかりに隣に座ってくるアリシ

ア。

くっ、何て高度なフェイントを

「て馬鹿か！ いつまでこんなことやらせとんじゃポケッ！ お前やつぱり馬鹿だろ！」

「私は馬鹿じゃない！ それに、それを言うなら君だってそうじゃないか！ 君が最初から隣を明け渡してくれればいいだけじゃないか！」

「お前の場合は一々距離が近いんだよ！ そんなにくっ付く必要無いだろが！」

「ある！ これはとても重要なことなんだ！ それに、家ではあの女が邪魔で君と触れ合うことが出来ないじゃないか！ そんな私の身にもなってくれ！」

「んなことするか！ てか周りの目も少しは気にしろや！」

「分かった、じゃあ誰も見てない時なら良いんだな！」

「ダメに決まってるだろがっ！」

「何故だ!？」

なんやかんやで俺達が竜車に乗って向かう先は、今回の狩場とな

る密林。

密林とは、樹木がすまなく生い茂っている林。ジャングルなんかを想像してもらえば良い。大体そんな感じのフィールドだ。

そしてフィールドの大部分は密林地帯だが、中央部は山岳地帯になっており内部は空洞化していて、ランポスやリオレウスと対をなす、陸の女王と呼称されるリオレイア等が巣を作っていることがある。

森と丘と比べると、樹木が生い茂っていて障害物が多い分見通しが悪いフィールドだな。

弾丸が障害物に当たり、弾道が変わる事も稀にあるので注意が必要だ。

しかし、火山や雪山の様な過酷な環境というわけではないので、訓練生交えての集団演習には適していると思われる。

そして俺達は密林に向かう竜車に揺られて一時間弱、あと二時間程で着くといったところか。

ここで普通のパーティの連中ならば、移動中のこの時間でクエスト内容の確認や大まかな作戦決めや、各自武器の整備等に使うので、俺達もそのようにしたい、のだが

「もう我慢ならん。貴様、いい加減にしろ。でなければその目玉を抉り出す」

「ブヒッ!?!」

アリシアの口から出たとはとても思えない、ドスの効いた低い声

が車内に響いた。てか目玉を抉り出すとか怖いわ！

今のアリシアの発言で分かるように、アリシアは相当怒っているらしい。殺気立っていると言ってもいい。

その原因は、アリシアから見て斜め前にいる豚だ。

この豚は先程から露骨なまでに、アリシアの胸やら太ももやらを視姦し続けており、男の俺から見ても嫌悪せざるをえない。アリシアも良く耐えた方だと思うが、遂に我慢の限界だったようだ。

そういえばアーサーはどうしたかって？ 居たなそんな奴。

アーサーはといえば、ごろんと横になりいびきをかいて寝ている。出発してから少しの間は何やら興奮した様子で騒いで居たが、一時間経過した辺りで眠りだした。子供かこいつは。

ガチガチに緊張してるよりはリラックスしてる方が良いが、もうちょっと緊張感を持ってても良いんじゃないかとも思う。

が、まだおとなしくしている分マシか。

「だいたい貴様、何だそのたるみきつた身体は、ふざけてるのか？ この竜車は狩人専用だ。豚は家畜小屋でおとなしくしている」

「な、なんだとっ!?!」

………なんとという罵倒。これは罵倒されて喜ぶ変態以外には結構堪えるぞ。

「貴様の様な者が居るだけでも不快だ。今すぐ下車して何処へなりと消え失せろ」

「お、女のくせに、生意気だぞっ!」

あー、豚よ、それは多分アリシアにとっては禁句だぞ？  
ほら、アリシアが怒りで奮えているし。噴火前の火山の如く。

「貴様ツ！ もう一度言ってみろっ！！」

「ブヒツ、だいたい女なんかにはンターが務まる訳ないって言うてるんだよ。だからその隣の男と組んでるだろ？ 女なんて結局は男に守られてない何にも出来ないくせに。出来るのは下の世話ぐらいだろ？ ブヒヒヒ！」

「おい、お前いい加減に」

「きつさつまあっ！ よくもそんなことを！ 二度とそんな口が叩けない様にしてくれるわっ！！」

「ブビイイッ！！」

俺が豚の傲慢な物言いに怒るよりも速くアリシアの繰り出した拳が豚の顔面に命中し、鼻血を撒き散らしながら豚が吹き飛び、竜車の壁にぶつかるよりも速くその首を掴んで床に叩きつけた。

何て速さと手際だ。神速と言っていていいだろう。  
ってこれはヤバイ。下手すりゃ殺しかねん。

「おい待てアリシア！」

「止めてくれるな！ この男だけは、この男だけは許せないっ！！」

「じ、じぬうう」

「ちょっと、マジでヤバイから止まれ！」

俺はアリシアを羽交い締めにして止めようとし、って止まらない！？ どういう力してるんだこいつ！？

「頼むから止まれ！ 落ちつけ！」

「こんな男を庇うというのか！ 君は！」

「そうじゃないだろ！ ただやり過ぎだって言ってるんだ！ 分かったら落ちつけ！」

「……………分かった」

よ、漸く止まってくれた…………。

豚の方は…………、うわー、これは、凄いことになってるな。

鼻血を垂れ流し、口からは泡を吹いて気絶している。

…………死んでは、ないな。回復薬かけとけば大丈夫だろ。

アリシアもやり過ぎた部分はあったが、この豚の態度の方にも問題はあったし、自業自得みたいなもんだろ。これに懲りて自重して欲しいものだ。

アリシアの方も少しやり過ぎたのは自覚している様で、シユンとしている。

俺は豚のアイテムポーチを漁って回復薬を取出し、それを豚の顔面にぶちまけてからアリシアの隣にドカツと腰を下ろした。

…………うーん、気まずいな。

アリシアも何だか落ち込んでいる様子で黙ったままだ。

「私は…………」

何て声をかけようか、と思っていると唐突にアリシアが口を開いた。

「私は、女でも立派なハンターに成りたいと思って、今まで必死に頑張ったんだ。本当に、頑張ってきたんだ。……だから、女にはハンターは務まらない、何て言われると、頭に血が上って、気が付いたら今みたいなことをしてしまっているんだ……」

「そうか」

アリシアの口調からも分かる様に、アリシアは男に舐められたくないとか、女だからといって、女であることを理由に馬鹿にされたくないと思っているだろうことは、前々から気付いていた。

女ハンターとして今までやってきたアリシアは、さっき豚に言われた様なことを散々言われ続けて来たのだろう。

それにめげずに立派なハンターを目指して努力するというのは、並大抵のことじゃない。

相当な苦勞をしてきたんだろうな。

「君は……」

「なんだ？」

「君は、どう思う？ 女なんか、ハンターに相應しくないと、そう思うだろうか……？」

どこか不安そうに聞いてくるアリシア。

だが、そんなこと、俺にとっては

「 どうでもいい」

「 なに？」

「 どうでもいい、そんなこと。男だとか女だとか、そんなもんはハンターには関係ない。ハンターなんてのは、突き詰めれば実力がありゃ良いんだ。そこに男だとか女だとかは全く関係ないし、そんなもんを持ち出しても意味がない。

だからお前も一々気にするな。お前は立派にハンターやってるよ」

「 …………… うん、ありがとう」

…………… なんかアリシアが嬉しそうに微笑んでいるが、…………… あー、あれだ。

そう、俺が言いたかったのはだな、男よりも強い女がゴロゴロいるこの世界で、女だから何て理屈は通用しないってことを言いたかった訳であって、決してアリシアを擁護したり気遣ったりした訳ではない。うん。ないったらない。

てかアリシアの方が明らかに俺より強いからな？

アリシアがちょっと本気出したら一瞬でボコられる自信があるぞ？ マジで。

まあこんなこと今の雰囲気と言わないけど。俺は空気が読めるからな。

空気男だけにry。

「起きろ馬鹿」

「うっ、ぐおおお！ 腹がああっ！」

既に密林のベースキャンプに着いたというのに、未だに寝続けるアーサーを蹴り起こした。鳩尾に良いのが入ったらしく悶絶している。

「起きろ豚」

「ブ、ブビイイ！ 腹がああっ！」

同様に豚も蹴り起こした。こいつはあれからずっと気絶し続けていたが、途中で起こしてもまた騒ぎ出すだろうと思いいのままにしておいたのだ。そしてこっちも同様に悶絶。

「じゃあボクは此処で待機しておくのニヤ。頑張ってくるのニヤー」

「ああ、ありがとな。ほらこれやるよ」

「ニヤニヤ！ マタタビニヤ！ ありがとうございますニヤー！」

此処に来るまで竜車を操作してくれていたアイルーにマタタビを渡すと、アイルーはびよんびよん跳ねて全身で喜びを表現している。

……和む。

「どこからマタタビを……。確か、訓練所の演習は支給されたアイ

テム以外は持ち込み禁止のはずじゃないのか？」

「む、確かにそうだが、これは演習に使うつもりはないし、完全にアイルーへの俺からの報酬という形で持ってきた物だ。すなわち、アイルーが貰うべき当然の報酬を与えただけに過ぎない。それともお前は、アイルーの働きに対して何の報酬も与えなくてもいいと思っているのか？ そうなのか？」

「い、いや、そういう訳じゃないんだ。誤解を与えてしまったようですまない。それにしても、君は本当にアイルーが好きなんだな……」

当然のことだろう。こんな愛らしい生物が他に居るか？

答えは否！ 断じて否！

人語を理解し、家事全般をそつなくこなす器用さ、素直な性格に加え、なんとも言いがたいこの可愛らしさを持つという、癒し生物満載な小動物。

人間なんかよりよっぽど善良だと思っただが、そのところどうなんだ？ ということをアリシアに熱く語ってみたところ、

「そ、そうか……」

アリシアが引いてた。

……………失礼な奴だ全く。

とまあ、そこは置いて置くとして、漸く今回の狩場たる密林に到着したわけだ。

……何故か異様に長く感じる道のりだったな。気のせいだろう。そう思いたい。思わせてくれ。

ということを考えていると、いつの間にやら復活したらしいアーサーが何か叫んで気合いを入れていた。一々テンション高いなこいつ。

豚の方かというと、アーサーとは正反対にブスツとした顔をしている。こちらに何か言っ来ないのは、少しは懲りたからなのかどうなのか。

「あー、漸く密林に着いたわけだが、最初に一つ言っておく。俺達の言うことは必ず守ること。無視して死んだとしてもそれは自己責任になるから注意しとけ」

「なっ、何でそうなるんだよ！ 俺達を守るのがお前らの役目だろっ！ ふざけんなよっ！」

豚が喚き出した。ちょっと死の可能性についてほめかすとすぐこれだ。

まさか自分達のことをお客様か何かだとも思ってたのか？ 馬鹿か？

「こっから先はモンスターの棲息地だ。この先に進むのはハンターか自殺志願者しかない様な危険地帯。何が起こっても可笑しくはない。

そんな危険地帯へ進むのに、こちらの指示を無視した行動をする奴が居れば、全員に危害が及ぶ可能性がある。

そんな迷惑な奴は勝手に死んでくれていい。というより此処に置いて行く。目の前で死なれても面倒だからな。当然演習には参加させない」

「な、ななな……」

「俺達の言うことを聞かない奴のことなんて知らん。勝手に死ぬ。それにモンスターの棲息地に入って例え死んだとしても、ギルドは一切の責任を負わないし、自己責任ということになる。」

それは訓練所の演習だろうが何だろうが同じことだ。お前らだってそのくらいは知ってるだろ？

だから死にたくなけりゃちゃんと指示に従え。そうすりゃ危なくなつた時は助けてやる」

「わ、分かつたよ……」

これだけビビらせとけば流石におとなしくしてるだろ。これでもまだ何か言うつもりなら、本気で此処に置いていく。当然のことだ。この先は訓練生が舐めてかかってタダで済むようなところではない。

弱肉強食の自然界だ。弱い奴は死ぬ。それだけだ。

モンスターはこちらの話に聞く耳を持たないし、死に物狂いで襲って来る。そこに手加減なんてない。

此処が下位の密林だろうが何だろうが、死のリスクは常にハンターには付き物だ。俺やアリシアだって油断すれば死ぬことだった十分あり得る。

そんな場所でイヤクツクの討伐を行おうとしているにも関わらず、こいつらには少しばかり覚悟が足りない様に思えたので、最初にごういうことを言った訳だ。

これで少しは危険を認識してくればいいが、どうなるかな？

「よし、じゃあ先ずは各自支給されたアイテムを出せ。それを全員で確認する」

俺の言葉を聞いてアリシアとアーサーと豚が、各自与えられたアイテムポーチの中身を確認し出した。

「こういうことは普通、竜車の中で終わらせておくべきなんだが、いろいろあったから今やる。」

さて、俺も自分に支給されたアイテムポーチの中を確認してみることにするか。

さてさて、何が入っているやら

「は？」

え？ は？ え？ ……え？

「どうしたんだ？」

「……いや、何でもない。……多分俺は疲れているんだ、そうに違いない。絶対そうだ」

「だ、大丈夫か？」

何かアリシアがこちらを心配そうにしているが、そんなことはどうでもいい。

それよりも、このアイテムポーチの中身だ。さっき見たのは幻覚だろうそうだろうそうに決まっている。

……ふう、よし。意を決して開けてみる。

石ころ。石ころ。石ころ。石ころ。……。

これでもかと言わんばかりにぎっしりと詰まった石ころ。

アイテムポーチをひっくり返すと、ゴロゴロと音を立てて落下する大量の石ころ。

石ころ。石ころ。石ころ。にが虫。石ころ。……何故ににが虫……。

よく見るとにが虫が紙をくわえている。とりあえず読んでみるとそこにはたった一行、

『弾（玉）無しハンター（笑）』

「……ふ、ふふふふざけんなああああ!!」

「ど、どうした!? 何があった!?!」

あ、あの糞野郎おお! やりやがった! マジでやりやがった! 弾丸の一発どころか、回復薬すら入ってねえじゃねえかつ!

「ふ、ふふふふ、殺してやる。殺してやるぞ糞教官。今すぐ殺しに行つてやるぞ……!」

「お、落ち着いてくれ! 早まつては駄目だ!」

「止めてくれるなアリシア。俺はあの糞教官を殺さなければならな

いんだ。あいつの息の根を確実に……」

「あはははっ！ 玉無しだったよー！」

「ブヒヤヒヤヒヤ！ 玉無しブヒヤヒヤヒヤ！」

「……お前らの罪を数えろ」

「え？」

「え？」

俺を卑劣なる罠にはめた糞教官よりも先に、そこで笑い転げる馬鹿と豚から肅正する事にした。

殺しはしない。この先に差し支えるからな。4分の3殺しで許してやる。

なあに少しのケガぐらい回復薬を使えばどうにでもなる。本当に便利なアイテムだよ……。

……俺には支給されてないけどなっ！

そして馬鹿と豚をボコリながら、糞教官をどう料理してやるうかと考える俺だった。



## 空気男と馬鹿と豚（後書き）

いつもよりちょっと短いけどキリがよかったのでここまで。

ちよっとやり過ぎな部分もあるけどコメディってことで多目にみてくだちい。

なんかあつたらちよっと書き直します。

あとこの先の展開について意見が欲しい、てか作者がやらかしてしまつてたんですが、

ポツケ村フラグなるものを立ててたんですがね？ モンハンて公式設定があるでしょ？

その大陸の地図的なみたらいろいろ矛盾点が見つかってしまいました、どうしよかなと。

重要なのは、主人公の居る村の位置を大陸のどこら辺にするかということと、今回の話でやっと到着した密林の名前を公式どうりテロス密林にするとか、バサルの話の火山をラティオ活火山にするかということです。

そこら辺について意見が聞きたいなとか思いました。

……面倒くさくなつたら捏造するやも……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0175p/>

---

モンスターハンター 空気男の生きる道

2011年5月4日18時39分発行